
モンスターハンター ～ポッケの平和～

Kinako

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター ～ポッケの平和～

【Nコード】

N7208C

【作者名】

K i n a k o

【あらすじ】

ここに、ポッケ村という地球いや、異世界の村がありました。そして、異世界、地球にごく普通の中学生が二人いました・・・

ここに、ポツケ村という、それは小さな小さな村がありました。ですが、今はもう無残なことになっています・・・

その、ポツケ村を復旧させるために、このもの達が立ち上がった・・・

「???1「もう、この手しかないのですか?」

「???2「仕方あるまい・・・」

「???3「ですが、これは単なるおとぎ話なのでは?」

「???2「そうじゃ。」

「???3「ではなぜ?」

「???2「今この、ポツケ村には、モンスターから身を守る手段がないのじゃ。」

「???2「勇気あるハンターは、巨龍の攻撃によってみな死んだ・・・」

「」

「???1「では、ジャンボ村からハンターを集めることは・・・」

「???3「ほかの村も、巨大蟹によって、破壊された。」

「???1「そんな・・・」

「???3「だから、この案しかないのじゃ!」

「???3「仕方あるまい・・・」

「???2「この、件に関しては私グリードと・・・」

「???1「私、ラルスが参ります。」

「???3「じゃが、うぬらももう年じゃろ・・・」

ラルス「大丈夫です。ヴァイン様もまだ古傷が痛むでしょうに。」

ヴァイン「そうじゃな。」

ヴァイン「では、頼んだぞ。」

ラルス・グリード「はっ!!!」

（ここは日本）

ここに、またものすごく冒険を夢見る少年がいた・・・
名は、「デイフラ」。

実はハーフである・・・

年齢は13才。

中一である。

成績は、いつも国語の文だけ読んで、寝る。

こんな状態なので、成績は言わなくても分かるが・・・

学校一最悪。

学校で評判である。

違う意味で・・・

第一話にく〜

く第一話く 異世界への誘い(前書き)

初心者ですので、下手くそです。

お手柔らかにお願いしますorz

〈第一話〉 異世界への誘い

〈ここは日本〉

ここに、またものすごく冒険を夢見る少年がいた・・・
名は、「デイフラ」。

全くもって、変わった名前である・・・

年齢は13才。

中一である。

成績は、いつも国語の文だけ読んで、寝る。

こんな状態なので、成績は言わなくても分かるが・・・
学校一最悪。

学校で評判である。

違う意味で・・・

最近、ゲームもやりすぎて、目の視力は0.001
という、前代未聞の視力である。

なので、完全にめがね生活である・・・

運動神経もない、いいところは見た感じなさそうだ・・・

だが、そんな彼にいつも一緒にいるのが「カデル」。

また、ハーフであるが、そこは許して欲しい。

彼の成績は抜群！

運動神経もトップ争いをしている感じである。

この、正反対の二人は、なぜかうまくやっている。

周りの人間も不思議に思っている。

その理由はただひとつ。

二人とも、無類のゲーム好きなのである。

実は、カデルもコンタクトをつけているのである・・・
だが、誰にも言っていない。

もちろん、ディフラもだ。

こんな二人が、あの、ポツケ村を救う人になるとは……
それは、後ほど。

「よう！カデル！最近俺ら暇になってんな。」

「そうだね。」

「なんだよ、冷てえな。」

「いや、この本がおもしろくて……」

（話はポツケ村に戻る）

「ついに手に入れたぞ！！！！」

「やったな、グリード。」

「おう！」

「早く、ヴァイン様の下へ行くぞ。」

「ああ」

さっ、と二人は行った。

（話はまた日本に）

「どんな、本なんだ？」

「村の平和を異世界の人が救って……」

「ああ。もういい。」

「なんだよ、ちゃんと聞けよ。」

「ハハ。」

「聞くよ聞くよ。」

「秘宝を手に入れて、異世界の人にポツケ村という村を救ってもら
うという感じかな。」

「面白そうだな。」

「なんだ？さっきまでもういいとか言ってたくせによ。」

「ハハハ」

「ハハハ」

「じゃーな」

「また明日」

「今日も楽しかったよ」

そして、二人は別れた。

だが、ディフラはまださっきの本の話が頭に残っている。

もうそれで、頭がいつぱいだ。

「そんなことあったら良いのにな」

こんなことも言っている。

はあ

二話に続く

〜第二話〜 ここがポケ村!?

一方、カデルも本を読み続けている。
カデルの母親が、

「いつまで、その本読んでのの? いいかげんにしないと晩御飯抜きにするよ!」

それは困る。

と、思ったカデルは急いで居間に行った・・・

デイフラは晩御飯も食べずに、寝ている。

ZZZ・・・

「いつまでもゲームしてんじゃないよ!」
と、母親が怒る。

だが、よほどいい夢を見ているのか、全く起きない。
だが、寝言でこんなことを言っている。

「俺は、ポケーのハンターだー」
なんて口ずさんでいる。

ほんとに在るとも知らずに・・・
だが、ハンターがいるということはなぜか知っている。
全く不思議な少年だ。

「ご馳走様。」

と、言ったのはカデルである。

そして、また読みふける。

すると、自然にねむくなってきた。本にしおりをつけて寝た。

*

「ここはどこだ？」

と、言ったのはディフラである。

「誰だ！そこにいるのは！」

と、言ったのはカデルである。

この二人は夢の中で会っていた！

「ここからは、現実逃避が多くなります。ご了承くださいorz」

「あ。」

と、二人は声を合わせた。

「なんで、俺の夢にカデルがいるんだ？」

「それはこつちのセリフだ。」

「なあカデル。」

「なんだ？」

「あそこにいるのは・・・」

「誰？」

「ああ、誰だ？」

この二人には見えていないが、あれは教官である。

しかも、ディフラ達に近づいていく・・・

え？なぜ教官が？

・・・

そこはご愛嬌で。

「おい！f s d t y早くb f さg r ふあ f・・・」

「は？」

「なあ、カデル。今あの人喋ったよな？」

「ああ。」

「なんて言ってるんだ？」

「さあ？」

「おい！お前達！早くこっちこんかあ！……！」
ビクッ！

二人怖気ついてしまった。

でも、怖がるのも無理はない。

鬼のような顔をしてるからである。

「は、ハイ！」

二人は猛ダツシユで教官の元に向かった。

くポケ村く

「お前達よくやった」

「成功ですね」

「やったぜ」

「これで救世主が来る！」

「そうですね」

今ごろは、教官が捕まえに行ってくれてるでしょう。

「そうじゃな」

く夢の中く

ディフラが言った。

「あ、あのなんでしょうか？」

すると、恐い顔で教官が、

「お前達をポケ村に連れて行く」

すると、カデルが、

「ちよ、ちよっと待って下さい！話がよくつかめません！」

「お前達は選ばれし者だ。よって、ポケ村のハンターになっても

「僕もです」

「貴様達はなつとらん!!!」

と、いいつつも、一歩一歩進んでいく二人であった。

「さあ、ここから飛び降りればポケット村だ」

「マジ?」

二人は声をそろえていった。

到底無理である。

教官の足も軽く震えている。

これ武者震いなのか?

たぶん違う。

恐れている感じだ。

穴を見ると、「こおおおおお」と、深いような音になっている。

これは怖い。

「俺らここ降りるの?」

「そうだ。私はここを上ってきた」

「どうでした?」

「とてもキツイ」

「それって、単に歳なんじゃ・・・」

ここで、カデルに口をふさがれた。

「もがつもがっ」

教官はものすごい形相で見ている。

「教官すみません。」

「なぜ、私のことを知っている?」

「だって、私の愛読書とちょうど一緒なんですよ。」

「不思議なもんだな」

「だが、これからはお前達で自分でやっていくのだぞ」

「はい」

「OK!」

下手をすれば、これにて完。

なんてことにも、なりかねない。

そういうことに気をつけながら、少しずつ進んでいった。

ギイ、ギイ、ギイ……

そつと、はしごを降りていった。

最初に、教官。

次に、カデル。

最後に、ディフラ。

と、いったなにやら変な雰囲気漂わせている感じがする……

すると、案の定ディフラが足を滑らせて落ちた！

ドンガラガツシャーン！

「いてて」

「何をしている！この馬鹿モンが！」

「ご、ごめんなさい」

ディフラは半泣きである。

だが、教官は冷静な声で、

「じゃあ、村長の所に行くか。」

「は、はい」

カデルは少々焦り気味で言った。

「行く途中で、いろんなものがある。最近は大龍によって破壊され

たが武器屋ならある。そこで、装備を整えるのだ」

「へえ」

二人はハモツてしまった。

思わず口を手で隠す。

「あの横の猫は何だ？」

すると、武器屋の主らしき人の横に猫がいる。

アイルーだ。

「何だニヤ？何か買うかニヤ？」

「うわ！猫が喋った！」

すると教官が、

「この地方では、猫・・・」

そのとき、武器屋のアイルーが教官をにらみつけ、大タル爆弾Gを取り出そうとした。

教官は慌てて、

「や、やめてくれ！ごめん！」

こんな、教官を見た二人は、

「クスッ」

と、笑った。

（でも、猫が喋るって不思議だな。こんなの本には載ってなかったぞ）

と、ふとカデルは思った。

そして、教官が、

「じゃあな、アイルー。また後で来る！」

「了解ニヤ！」

と、アイルーは敬礼をした。

そのとき、ディフラは、

（可愛いかも。てか、ペットにしたい！）
なんて思っていた。

「まあ、今はそんなもんだ。ちなみに明日はネコバアが来る日だぞ」

「ネコバア？」

「誰だそれ」

「お前ら、さっきアイルーは見たな？」

「アイルーって、さっきの猫ですか？」

「ああ。」

「アイルーは、喋れることがあるんだ。もちろん勉強してな。そのためそういう奴はいろんな職につきたくなるんだ。」

「へえ。」

「それで、ネコバアは料理のできるアイルーを連れて来て、売っているんだ。」

「売ってるんですか？」

「まあな。だが、危険なことではない。とても、主人に忠実なアイルーたちだ。」

すると、ディフラが目をうるうるさせて、こう言った。

「まじで？そんなの欲しいに決まってるじゃん！！」

と、決め付けた。

「まあ、一匹目はただでくれるしいか。」

と、教官は言った。

ディフラと、カデルはウキウキしている。

「さあ、着いたぞ。」

と、自慢げに言われたが、二人の想像と全く違うものだった。

全身に温かそうな服。

目の前に焚き火。

それしかない。

すると、ディフラが、

「あ、あの～想像と全然ちがうんですけど」

「夢の見すぎだ。」

「そ、そうですか。」

「はいはい、茶番はそこまでじゃ。」

「も、もうしわけございません。」

「まあ良い。そこ座れ。」

と、言われてもあるのは地面のみだ。

それに、ここは寒い地域なので地面が冷たい。

「冷たっ！」

「がまんしろよ」

と、カデルがクールに言った。

「まあ、ここにきてもらったのは他でもない……」

二人は唾をゴクツを飲み込んだ。

「モンスター退治じゃ。」

この瞬間、そこらへんの村民が、

「おいおい、村長さん。ボケてんのか？」

すると、他の村民が、

「そんな、小さな二人組みで何ができるって言うの?」
と、村民は笑った。

すると、村長が怒って、

「黙れ! 貴様らに言われる筋合いないわ! 行けと言ったらイヤ。それだけじゃないか。お前達には勇気がない!」

デイフラとカデルは硬直した。

村長は軽く怒りながら自己紹介をした。

「わしの名はカイルじゃ。よろしく頼むよ」

「こ、こちらこそ。」

「では、早速本題に入るぞ。」

第四話に続く

〈第四話〉 準備

「では、本題に入るぞ。」

二人はどきどきしながら、ちよっぴり怖いという気持ちもありながら聞いている。

「まあ、まず武具を買って、その後また来い。」

二人はコケた。

武具買ってからかよ!?

内心そう思った。

だが、口には出せない。

横には怖い教官がいるからだ。

「わ、分かりました」

カデルは軽くイヤな感じで言った。

「頼んだぞ。」

村長は笑顔で言った。

二人は軽く引いた。

なぜなら、あの村長が笑うなんて・・・

怖い。と、思ったからだ。

二人はしぶしぶさつき行った、武具屋に行った。

途中で、教官が、

「俺はこっちの訓練所に入るから。」

「えっ!?!」

二人は驚いた。

確かにこんな人がどこで働いているかは不思議だった。

だが、訓練所というのは想定外だった。

言われてみたらそんな感じがする。

と、二人は悟った。

(後で、訓練しなくちゃならないんだろーなー)
と、デイフラは思った。

「そういえば、ディフラ。お前めがねは？」
そんなこと聞かれたのでディフラは驚いた。
めがねが無い。

だが、人ぐらいなら認識できる。
遠くの字や、人は認識できない。

「視力が軽く戻ってる・・・」

「今まで食ってきたブルーベリーのおかげだー！」
と、ディフラは喜んだ。

「いや、違うと思うぞ」

「え？」

ディフラは聞き返した？

「多分、こつちに来てからだ。ということはここが完全に異世界と
いうことが証明できるな」

「？」

カデルはディフラに軽く呆れた。

「だから、こつちに来てから異世界の世界が見たい！と、いう強い
気持ちで視力を復活させたんだ」

「なるほど」

「でも、そうだとしたらお前の視力も復活してんじゃないのか？」

「あ。」

「どうした？」

「コンタクトついてない」

二人は確信した。

確実にここは異世界で、何もかもが不思議で出来ている。

「着いたぞ」

「うん」

武器屋に着いた。

まず、主に話しかけた。

「あの〜武器が欲しいんですけど〜」

「お金は？」

・・・

実は村長からお金をもらうのを忘れてた。

「あ。忘れました」

「またおいで」

と、やさしく言ってくれた。

二人はこの人に好印象を持った。

(いい人だ)

と、二人とも思った。

そして、猛ダッシュで村長のところに向かった。

「村長！」

デイフラは村長に怒鳴った。

軽く怒っているようだ。

「なんじゃ？あ、自己紹介しておくれ」

あ、きよとんとした。

だが、二人は喋った。

「あ、えと、デイフラだ」

ちよつと、焦っている。

「あ、僕はカデルと申します」

つて、違~~~~う!!!

と、心の中で、デイフラはツッコミを入れた。

「あ、あのよ・・・」

「みなまで言うな。お金のことじゃろ？」

デイフラはムカついた。

「知ってんじゃねえか！」

「すまんのお。もう年じゃからすぐに忘れてしまつたのじゃ。」

はあ。

と、二人はため息をついた。

「じゃあ、くれ。」

と、ディフラはいらだちを見せながら言った。

「あ、待てよ。」

「どうしたんですか？」

と、カデルは焦って聞いた。

「お主らの家にマフモフシリーズなら二着あるわ。ほっほっほ。」

「ほっほっほ。じゃね〜よ！そういうことは早く言えやこのやろ〜」

すると、カデルが冷静に、

「まあ良いじゃないか。ただでもらえるんだから。」

「それもそうか。」

ディフラは頷いた。

「じゃあ、早速いつてくるわ」

「ほっほ。行つて来い。」

二人はちよつと前に落ちて不時着した家に向かう。

すると、左になにやら牧場というか、広場みたいな感じの所がある。

「なあ、カデル。あれなんだ？」

「ん？」

「左のあれだよ」

「それはね」

二人はびっくりして腰が抜けてしまった。

「そんなにびっくりしないでおくれ。」

その人はとても笑顔で二人を見た。

（あ、武器屋の主に似てる。）

と、二人は思った。

「この名前はポツケ農場って言つんだ。」

二人は頭に？ マークを浮かべた。

「えっと、ハンターの人にいろんな家具を貸し出しして、色んな素材を集めてもらって、いい装備を作ってもらって、このポツケ村を守ってもらう。こんな感じかな。」

すると、ディフラが、

「あ、あの〜。素材ってなんですか？」

「はっはっは。ほんとに君達は何も知らないんだね。」
二人はちよつと恥ずかしくなった。

「じゃ、また。いまからマフモフ装備に変更してきます。」
ちなみに二人の装備は、

デイフラ：胴ファミ通Tシャツ

カデル：胴狩人Tシャツ

それ以外は、現実世界の服である。

「胴以外装備なしということになる。」

「ああ。そうか。じゃあ行つといで。」

「はい！」

二人はウキウキしながら、走っていった・・・

「救世主か・・・」

と、ポツケ農場の主は言った。

バン！

扉を叩きつけた音が鳴った。

(アイテムボックスにあるぞ。)

さっきの村長の言葉を思い出してアイテムボックスをデイフラは探し出した。

「あれじゃないか？」

ここは、はつきり言って、そこまで広くない。

アイテムボックスを探すなんて入ったら分かるはずなのだが、デイフラは我を失っていたため、見つからなかった。

呆れた少年である。

「さてと」

デイフラがアイテムボックスをあけた。

ギイイイイイイイ・・・

「お！？ あつたあつた」

デイフラはマフモフシリーズを見つけた。

「ほらよ！」

「おお！」

「温かそうだな。」

「早速着てみよう。」

二人はマフモフシリーズを着た。

「あつたけえ」

デイフラは目を棒にして、和んでいる。

「じゃあ、武器を決めよう。」

アイテムボックスの中には全種類の武器の低級武器がそろっている。

「何にする？」

「そうだな・・・」

「俺はこれだ！」

デイフラはポーンブレイドを取り出した。

大剣の低級武器である。

「俺はこれかな。」

カデルはポーンククリを取り出した。

片手剣の低級武器である。

さて、準備は整った。

これから二人がどんなことを繰り返すのかは次回で。

第五話に続く

く第五話く いざ出陣！（前書き）

ポケケ村に着いた一行は準備を整えて村長のところへ向かうところだった。

〈第五話〉 いざ出陣！

「よし！ カデル。村長のところに行こうぜ！」

「ああ。」

二人は、マフモフ装備で身を固めて村長のところに猛ダッシュで走っていった。

いったいどんなことが待ち受けているか、俺らは今からいったい何をしたら良いのか、色んな期待と不安が混ざった気分の二人である。

「はあはあ」

「なんじゃ？ 騒々しい。」

村長はいつもと変わらぬ口調でしゃべった。

二人は聞いた。

「僕達は何をしたらいいのですか？」

「ああ。それはさっきも言った、モンスター退治のことじゃが……」

「最近、この近くでギアノスが農作物を食べつくしているとの情報が入ったのじゃ。」

デイフラは聞いた。

「その、「ぎあのみ」ってのは何だ？」

「この地方によくいる肉食鳥竜じゃ」

「それを退治すればいいのですか？」

カデルは質問した。

「そうじゃ。」

「分かったぜ！ 今すぐ行くぞカデル！」

「うん。」

「ちよ、ちよと待たんか。」

「なにか？」

「もうちよっとアイテムを持っていくとかして行かんか。」

「分かった・・・」

ディフラは少しすねたかんじで言った。

「でも、今は道具屋は改装中じゃから。ワシから回復薬を10個ずつやるわ。」

「おっ、サンキュー！」

「恩にきります。」

「と、言うことじゃから。行って来い。」

「はい！」

「あ、そうじゃ。」

「なにか？」

「そつちに着いたら、支給品ボックスを開けなさい。そして、支給品をもらいなさい。」

「OK！ 分かった！」

「じゃ、いつて来い。」

二人はすぐ近くの道を進んでいった・・・

「気をつけるんじゃぞ・・・」

村長は呟いた。

二人はさっきの道を進んでいる。

「なあ、カデル」

「どうした？」

「俺ら本当にハンターになっちまったな」

「ああ。」

二人はそんなことを話していると、

「ごしゅじゅん！」

ディフラはビクツとした。

前方にアイルーがいる。

「あ！ あれは・・・」

「アイルーじゃないか！」

ディフラは近づいて、
「ご主人つて誰を呼んでいたんだい？」
「えーと・・・ディフラっていう新米ハンターを探しているニヤ」
「ぼ、僕だけど・・・」
「ニヤ！？ ディフラかニヤ？」
「そうだけど・・・」
「では、自己紹介をするニヤ！おいらの名前は・・・」
ディフルは黙った。
「無いのかい？」
と、カデルが聞いた。
すると、ディフルは少し涙目で、静かに頷いた。
「そっか。」
「じゃあ、このディフラ様がお前の名前をつけてやるぜ！」
すると、ディフルが目をうるうるさせて、
「ほんとかニヤ？」
と、聞いた。
ディフルは自信満々に、
「おう！」
と、言った。
すると、カデルが、
「じゃあ、早く決めよう。ここでモタモタしてる場合じゃない」
「そ、そうだな」
二人はうなりながら考えた。
「う〜ん」
ディフルはまだ目をうるうるさせている。
「そうだ！」
と、ディフラが言った。
「決まったかニヤ？」
「ああ。」
「やったニヤ！」

「何かと考えて強そうな名前を考えて・・・」
「ジャックだ！」

アイルは少し黙って泣き始めた。

「う、ううう・・・」

ディフラはあわてて、

「だ、だめだったか？」

すると、アイルは首を振って、

「違うニヤ。うれしくて泣いているニヤ」

「そうだったのか・・・」

ディフラはクスツと笑った。

「何がおかしいニヤ？」

「いや、アイルでも感情は人間さながらなんだな」と、思って

「当たり前ニヤ！」

と、アイル・・・いや、ジャックは軽く怒りながら言った。

「じゃあ、雪山に向かってくれ。」

カデルは言った。

「了解ニヤ！」

ジャックは船を出航させた。

「アイルって本当なんでもアリだな」

「だね。」

「ハハハ」

「フフフ」

なんて、しゃべっていると、

「着いたニヤ」

雪山

雪山に着いた。

綺麗な花。

そびえ立つ雪山。

水を飲んだり、草を食べたりしている草食動物らしい動物。
なにもかもが新しい。

「うわあ~~~~」

デイフラは感動している。

「よし！ ギアノスとやらを退治しに行くぞ。」

「おう！」

「おいらはここで留守番してるニヤ！」

「分かった。頼んだぞジャック！」

「分かってるニヤ」

二人はまず支給品ボックスを開けた。

「お、いろんなものが入ってるな」

デイフラは興味津々だ。

二人は半分ずつ支給品を持って行った。

「いってらっしゃいニヤ！」

ジャックが見送っている。

第六話に続く

く第六話く 初めての狩り（前書き）

準備を整えた二人は、雪山にジャックのお陰で着いた。この雪山で、何が起こるのか？

〈第六話〉 初めての狩り

二人は走って、雪山に消えていった・・・

「がんばるニヤ」

アイルーはそう呟いた・・・ようにも聞こえた。

「なんだありや？」

ディフラは顔を傾げる。

「分からない・・・」

カデルは目を丸くして言った。

二人は少し未確認生命物体・・・いや、ポポを見ていた。
すると、

「それはニヤ・・・」

二人はびっくりして後ろにもものすごく下がった。

「お前は！」

ディフラは声が裏返った。

前にいたのはジャックだったからである。

「何でお前が？」

ディフラは今日、ビックリしてばかりである。

「ご主人がまだ新米ということで案内人ということできたニヤ！」
ディフラは納得し、

「そっか、ありがとなジャック。」

ディフラは笑顔で答えた。

「て、照れるニヤ。」

ジャックは頬を染めている。

というよりは顔が完全に真っ赤だ。

「まあいいさ。行こう！」

カデルが粹のいい声で言った。

「ああ。」

「了解ニヤ！」

二人と一匹はまた、走り出した。

「どっちに行く？」

カデルが聞いた。

「そうだな」

「こつちだ！」

デイフラは右を差した。

「分かった。」

カデルが了承した。

二人は二つの階段のような岩を登っていった。

ジャックはデイフラの背中にへばりついている。

このとき、デイフラは、

(やっぱり可愛い・・・)

と、しみじみ思っていた。

だが、そんなことをしているのも束の間。ギアノスが二匹、目の前に出現した！

ジャックが怯えている。

「どうした？ジャック？」

ジャック震えながらこう言った。

「あ、あれがギアノスニヤ・・・」

ジャックはデイフラの背中にしっかりと掴まった。

「出やがったな」

「一気に行くぞデイフラ！」

「OK！任せろ！」

二人は一斉に二匹に攻撃した！

「うおおおお！」

ギアノスは威嚇している。

ディフラのポーンブレイドがギアノスの体に直撃！・・・かと思われたが、

ギアノスはディフラ達の予想と違う、すばやさを持っていた！

「畜生~~~~」

すると、カデルが、

「落ち着いて行動しろ！」

と、言った。

それに反応したディフラは、

「ああ。分かった。こんな奴ら瞬殺だ！」

(やれやれ、全然わかってないじゃないか。)

カデルは軽く呆れた。

すると、油断をしていたカデルの首にギアノスの噛み付きが容赦な

く食らいつく！

「うあああああ！！！」

「カデル！」

「こっちに来るな！」

「!?!」

「後ろにいるぞ！」

それに気づいたディフラは剣を横に振り回した。

ギアアア！

ギアノスの腹にポーンブレイドが刺さった。

この瞬間にディフラは少し気分が悪くなった。

「おいディフラ！もうしつかりしろ！ここに来たからには戦わなく

ちやいけないんだ！」

この言葉でわれに返ったディフラはギアノスに止めを刺した。

その瞬間、もう一匹のギアノスも黙って静かになった。

ギアノスの上半身と下半身が真っ二つに分かれていた。

「や、やったニヤ。すごいニヤご主人！」

「・・・」

カデルはディフラの元に向かおうとした・・・が、

「よくやったディフラ・・・ガハッ！」

「カデル！」

「無茶すんじゃねえよ！」

「すまない。」

「もう一匹も俺が殺ってくるからよ！」

「気をつけるよ・・・」

「ああ。そうだジャック。お前はカデルの傷を治してやってくれ。」

「分かったニヤ！」

ジャックは救急鞆から傷薬を取り出した。

「ちよつと沁みるけど我慢するニヤ」

「ありがとう。ジャック。」

ジャックがカデルを傷を治癒していると、ディフラがギアノスに斬りかかった。

「一発で殺してやる！」

ギアアアア！！

ギアノス更に怒って攻撃してきた。

「おっと、あぶねえ。」

そして、横から斬りかかった。

ギアノスの首が吹っ飛んでった。

「ヒュウ」

ディフラはギアノスを一人で二匹討伐したのである。

「す、すげえじゃねえかディフラ！」

「おう！」

「う、動かないほうがいいニヤ！」

「ぐっ！」

「む、無理すんなよ！」

「すまない」

カデルは、倒れながら軽くうつむいた・・・

「カデル・・・」

「謝りたいのは俺のほうだよ・・・」

「!?!」

「俺が弱いから・・・」

「そんなこと考えんじゃねえ!」

「えっ?」

「お前が弱いのは当たり前だ!こっちに来てから一日もたたずに強くなれって言ったほうがおかしいだろ!」

「あ、ああ。」

「ディフラはきよとんとしている。前までおとなしかったカデルがこんなにも強く言うなんて・・・そう思ったからである。」

「そろそろ帰るニヤ!」

「そうだな」

「あ、ちよつと待って。」

「どうかしたニヤ?」

「素材つてこういう奴から取れるんじゃねえか?」

「あ!」

「だろ?」

「流石ご主人ニヤ!おいらもすっかり忘れていたニヤ」

「まあ、剥ぎ取るうぜ!」

「じゃあ僕は先に・・・」

「ディフラは怖い顔で、

「だめだ!先には行くな!俺と一緒に帰るんだ」

「・・・分かった」

「じゃあ、待ってる。剥ぎ取ってくるからな!」

「ああ。」

「ザクツザクツ。」

「ディフラは慣れた手つきでギアノスを剥ぐ。」

「ふんふんふん」

「鼻歌を歌いながら、両方のギアノスから剥ぎ取った。」

「少ねえな。おい。」

「ま、ちつちやいからしょうがねえか。」

ディフラはカデルの元へと戻った。

「あ、来た！」
「ごしゅじゅん！」
「やつほー！」
「あんまり剥げなかったわ」
「まあ、良いじゃないか。」
「よし！帰るニヤ！」
「おう！」

ポツケ村

二人と一匹は村に帰った。
「ま、マジかよ・・・」
「嘘だろ？」
「やるなあいつ等。」
村民達がひそひそ喋ってる。
「あいつ等何か喋ってるニヤ」
「当たり前だろ！」
「さっきまで誰も行かなかったクエストに成功してかえってきたからだよ。」
二人は自慢げに歩いて村長の所に行った。
「ほっほ。元気に帰って来たわ。」
「元気じゃねえ人が居るだろが！」
「ほ？あらま、どうしたんじゃその傷！」
「ギアノスに首を咬まれました。」
「で、どうしたんじゃその手当ては？お主らはこんな薬草の場所も知らんじゃろ？」
ディフラは自慢げにこう言った。

「下を見る下を」

「ほ？」

すると、怒ったジャックの姿が見えた。

「ひどいニヤ！おいらに気づかないニヤンて！」

「ほっほ。すまんのお。で、このアイルーはどうしたんじゃ？」

「ああ、クエストに出発する所でなぜかディフラを探していたんです。」

「そうニヤ！」

ジャックはまだ、かなり怒っている。

「新米ハンターが来るってネコバアに聞いて、昨日から待っていたのニヤ！」

「そうじゃったか……」

(ネコバア、流石は口コミの天才……)

村長は、驚いていた。ネコバアに。

「ほんじゃま報酬じゃ。」

村長はディフラに報酬2000Zを手渡した。

「サンキュー！」

「ほら！カデルもな」

「ありがとう」

「じゃあ、今日はゆっくり休むといい。その傷じゃ、何もできんじやろつがな……」

「おう、そうさせてもらっぜ。」

ディフラはカデルに肩を貸し、

「よっしや！いくぜ！」

「ああ。だが、すまないな……」

すると、ディフラは笑顔で、

「なぐに。気にすることあねえ」

カデルも顔色が悪いながらも、

「ありがとう」

と、笑顔で言った。

二人はゆっくり、ゆっくり笑いながら、自分の家に戻って行った。
ガチャ。

ドアの開く音がした。

ディフラとカデルだ。

「ふう〜。疲れた〜」

「ありがとう」

「いいってことよ!」

ディフラは指をビシツと立てて、言った。

「そういや、前に、あのババアが言ってたけどよ〜」

「なんだ?」

「この部屋の奥に、「アイルーキッチン」ってのが在るらしいぜ!」

「そういえば、この部屋の奥ってまだ入ったことなかったな。」

「ああ。名前からして飯でも食えんじゃねえか?」

「そうかもな。」

「どうする?お前、行くか?」

「いや、俺はここで休んでるよ。」

「そっか、じゃあ言ってくるわ」

「分かった。」

ディフラはアイルーキッチンに向かった。

入ると、見たことのある顔が・・・

第七話に続く〜

〈第六話〉 初めての狩り（後書き）

書いてるうちに多くなりました^^;

すいません・・・orz

それでは、応援お願いします。

そういえば、最初に出てきたあの人物達は？

と、友達に聞かれたので言います。

まず、ヴァインは訓練所前におっさん。

グリードは教官。（本編では名前を伏せている。理由は教官は教官

だから・・・無責任ですね

ラルスはあの元ハンター。

てな感じで書いていました。

あれはほんのプログですので、あんまり気になさらず読んでください。

く第七話く 新しい仲間

お、お前は・・・！

デイフラの目の前に居たのは、ジャックだった。

「ヤッホーニャ！」

デイフラは目を丸くして言った。

「な、なんでお前がここに居るんだ？」

「だって・・・」

ジャックはしみじみした顔で、言った。

「ネコバアに聞いたら、もうお前は料理人で生きていけるから、主人の手伝いを色々してあげなさいって」

「な・・・」

デイフラは硬直している。

「と、いうわけでこれからもよろしくお願いしますニャー！」

「お、おう・・・」

デイフラは心の中で、

（や、やったー！俺にも運が回ってきたぜ！あの、アイルー・・・いやジャックと一緒に居るなんて！
もう

くく感謝感激雨あられたよ！ネコバア！）

まあ、かなり喜んでる様子である。

喜びすぎか・・・？

顔がとろけている。

ちなみに、分かっているとは思うがこの時間、カデルはほったらかしである。

「デイフラ、遅いな。さっき、なんか聞いたことのある声もしたし」

カデルは寝転がりながら、呟いている。

では、話はアイルーキッチンに戻る。

「でわー」

「どうかしたニヤ？」

「ここで何か出来るの？何か良い匂いするけど・・・？」

「ここでは、おいらの作った料理、通称猫飯を食べれるニヤ！」

デイフラは顔をとりけさせて、

「じゃあ、早速お願いするぜ！」

「了解ニヤ！」

ジャックは料理作りを始めた。

「ニヤンニヤンニヤン」

なにかを口ずさみながら、作っている。

デイフラはわくわくしている。

だが、今作っているのは、ドクドクとした、なにやらグラタンか、ドリアか何か分からないものがある。

「出来たニヤ！」

ジャックは料理の素材を間違えたことに気づかずにデイフラの前に
おいた。

「いただきま〜す！」

案の定、デイフラのお腹が、酷いことになってしまった・・・

「う、うう・・・」

「すまないニヤ。間違えて、モンスターのフンを入れちゃったニヤ・
・・・」

「な、なんでそんなものを・・・」
デイフラは倒れた。

と、いうよりかは気絶した感じである。

「大丈夫かニヤ！？ご主人？」

デイフラは口から料理を吹き出して、口だけ地獄絵図になっている。

「お・・・ろ！・・・ラ！」

「おきろ！デイ・ラ！」

「起きろ！デイフラ！」

「ハッ！」

アイルーキツチンで気絶している、ディフラを起こしているのは、すっかり元気なカデルだ。と、ジャックも居る。

「お、おいカデル！傷は大丈夫なのか？」

「ああ。おかげさまで。」

ディフラは腰が抜けたように、

「よ、よかった〜」

「ハハハ」

カデルが笑った。

「よし！じゃあクエストもらいに行くか！」

「分かった。行こう。」

二人と一匹は村長の元へ向かった。

「あ、カデル」

「ん？」

「先行つてて！俺武器屋にちょっと用事があるから！」

「分かった。」

ディフラは武器屋の主人に話かけた。

「どうしたんだい？ディフラ。」

ディフラはびつくりした。

自分の名前を知ってるなんて！

ディフラは感激した。

「そういえばもう一人・・・カデル君だったっけ？」

「あ、ああ。アイツなら先に村長の所に行ってます」

「そうなんだ。で、どうしたんだい？」

「あ、あの・・・」

ディフラはボーンブレイドを背中からおろして渡した。

「これをもうちょっと強くなりませんか？昨日ギアノスを倒して剥ぎ取ったもので」

「う〜んもうちょっと切れ味を鋭くするぐらいならできるかな〜」

「じゃ、じゃあそれをお願いします!」

ディフラは身を乗り出した。

「じゃあ、そこにある骨をくれないかな?」

「あ、はい!」

ディフラはギアノスの皮や鱗はしまい、骨だけ渡した。

「こんだけあれば十分だ。ちょっとまってね」

「はい!」

ディフラは満面の笑みで答えた。

（10分後）

「ふう。出来たよ。」

「ありがとうございます!」

ディフラはボーンブレイド改を背中に着けた。

「じゃあ、行ってきます!」

ディフラは走って村長のところへ向かった。

「あ、来た来た。」

「ご、ごめん。遅くなったな・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ」

「ほっほ、元気な証拠じゃ。」

「じゃ、早速クエストを受注してもらっぞ。」

「よっしゃ!」

「ああ。」

「この前、お主らがギアノスを討伐してくれたんじゃが・・・」

「ん?」

「なんですか?」

二人は聞いた。

「うん。これはいいにくいのじゃが・・・」

「早く言えよ!」

ディフラが急かす。

「ドスギアノスの討伐なんじゃが・・・」

ジャックが尻餅をついてビクビクしている。
完全に怖がっている。

すると、ディフラが聞いた。

「どうしたジャック？」

「ニヤ、村長様！いくらなんでもドスギアノスは酷いニヤ！ご主人
が死んでしまふニヤ！」

二人は目を怖くした。

「ど、どうということだよ！ジャック！」

ジャックは震えながら言った。

「ド、ドスギアノスっていうのはギアノスのボスニヤ・・・今の状
態じゃご主人が逝ってしまふニヤ・・・」

ジャックは涙ぐんでいる。

二人は決意した。

必ずやドスギアノスを殺す！

二人の目はこの瞬間から狩人の目になった。

「では、頼んだぞ！」

「おう！」

「任せてください！」

「む、無理ニヤ！」

ジャックだけ怖がっている。

そして、ディフラのズボンの裾を引っ張っている。

「ほんとに行かないほうがいいニヤ！死ぬニヤ！」

二人は声をそろえて、

「大丈夫！」

と、言った。

その目は自信に満ちていた。
すると、ジャックは諦めて、

「分かったニヤ・・・じゃあおいらもお供するニヤ。」

「なんでだよ!？」

「死ぬときはご主人と一緒にニヤ・・・」

ジャックはうつむいて言った。

「じゃあ、行ってくんぜ！」

「頼んだぞ。」

二人と一匹は雪山に向かって行った。

〔雪山の途中〕

ジャックが、

「そういえば雪山の道って、歩いたほうが早いそうニヤ」

二人はピクツとした。

「うおい！おめえ！前に船で行ったのどういことだ！？」

「す、すまないニヤ」

ジャックは苦笑いである。

「まあまあ。いいんじゃないか。じゃあジャックその道を教えてくれ。」

「分かったニヤ！」

第八話に続く

第八話　ドスギアノス戦

一行は、雪山に着いた。

雪山

「よっしゃ！行くか！」

「逝く・・・じゃないかニヤ？」

「んだど!？」

ギヤーギヤーワーワーわめいて、叫んで殴り合いをしているディフラとジャックをほったらかしにしてカデルは進む。

「ちよ、ちよつと待てよ！」

「待つてニヤ〜！」

一人と一匹はカデルを追いかける。

二人は携帯食料を食べながら、歩いている。

すると、ディフラが、

「ふああ、ふあふえふ。ふおふいふあ。ふふおふおにひふふおほほふ？」

と、意味不明な言葉を発した。

「なんだって？口にあるものを飲み込んでから言え！」

カデルは頭にムカマークが付いている。

すると、ディフラはゴクンと携帯食料を飲み込んで言った、

「なあ、カデル。ドスギアノスどこに居ると思う？」

「ああ。そう言ったのか。ちゃんと見えよ。」

「ごめちよ」

「何がごめちよだ！」

カデルはディフラの頭を軽く叩いた。

「そろそろ茶番は終わっていたほうがいいと思うニヤ！」

二人は唾をゴクツと飲み込んだ。

た、確かに。

と思ったからである。

それに言われたのが、ジャックではなく、二人だったからである。もう、それにギアノスのテリトリーに入っていたからである。

「じゃまだあ！」

ディフラとカデルはギアノスに斬りかかった！
ズバツ！！

一瞬にして、二匹のギアノスの息の根を止めた。
下にはギアノスの首が二つ転がっている。

二人は血しぶきにも気づかず、吹雪の中に消えていった……

「ま、待つてニヤ〜」

ジャックは二人を追いかけた。

「今はこちら辺にはギアノスしかいねえな〜」

「そうだな」

二人は白い息ながら話している。

すると、目の前に　　！！

緑のとさか、ギアノスよりでかい口……いや体全体。
間違いなくこいつがドスギアノスだ！

と、二人は悟った。

「ようやくおでましか……」

「まず、周りから片付けよう！」

「OK！任せろ！」

ギイギヤアアアア！！！！

ドスギアノスは高く吼え、二人を睨む。

ちなみに、ジャックは特等席、ディフラの背中にくっついてる。

「うおおおおお！！！」

「はあああああ！！！」

二人はギアノスを三匹を一掃した！

このとき、ジャックは

(す、す、すぎるニヤ・・・)

と、ジャックは思うのであった。

そして、三匹をドスギアノスの攻撃をよけながら、剥ぎ取った。

「じゃあ、行くぜ！」

「ああ。」

ギヤアアギヤアア!!!

ドスギアノスは完全にキレて、デイフラに噛み付いた！
ガギン！

デイフラはボーンブレイド改で防御した！

「今だカデル！横から斬りつける！」

「まかせろ！」

カデルのボーンククリがドスギアノスの横っ腹に突き刺さる！

グギヤギヤアアア！！

ドスギアノスは血を出しながら悲鳴を上げている！

その瞬間、デイフラのボーンブレイド改がドスギアノスの首に斬り

かかる！

バシユ!!!!

ゴトツ・・・

ドスギアノスの首が転げ落ちた。

「ふう」

「はあはあ」

「どうした？カデル。息あがってんぞ！」

デイフラは笑いながら言った。

「まあ気にするな。俺は今日始めてだから・・・」

「ああ・・・血か。」

カデルは静かに頷いた。

「じゃ、剥ぎ取るぞ」

デイフラは剥ぎ取りを始めた。

「でけえな、この骨。ふふっ。」

この時、カデルはぞっとした。

ディフラの目が薄く、赤く染まっていたからだ。

「あ、あいつの目って青かったような気が・・・」
なにか、おかしい。と思った。

「んじゃ、帰るか！」

「ああ。」

「了解ニヤ！」

一行はポツケ村に帰るのであった。

第九話に続く

く第九話く デイフラの赤い目

「ぬう。お主ら本当に帰ってきたのか？」

「たりめーだ。死んだとも思っていたのか？」

デイフラは誇らしげに言った。

「ご主人が死ぬわけないニヤ！」

ジャックが怒って言った。

「ほっほ。それもそうじゃな。」

「当たり前ニヤ！」

ジャックも誇らしげに言う。

「・・・」

カデルは黙っている。

さっきのことが頭から離れないのだ。

(あの赤い目・・・赤いのものすごく恐ろしい。)

カデルは身震いした。

「?どうしたカデル」

「ん?ああ。いや、なんでもないよ。」

「そっか」

「じゃあ、報酬じゃ。」

「ありがとうな！」

デイフラは軽く笑った。

微笑みというやつか・・・

そして・・・

カデルは決意した。

(今日、本人に聞いてみよう)
カデルはそうのように決めていた。

自宅

「ふう。今日は特別疲れたな」

「そうだね。」

「じゃあ、ジャック。今度こそ飯ちゃんと作ってくれよ!」

「任せるニヤ!」

「あ、あのさディフラ・・・」

ディフラはジャックとしゃべっていた。

カデルはあのことは後にしようと思った。

(こっちに来て初めてだな飯を食べるのは・・・)

カデルは心を今は入れかえた。

「じゃ、行くぞ!」

アイルーキッチン

「じゃ、早速作るニヤ!」

「お、おう・・・」

ディフラはビビッている様子だ。

まあ無理はない。

昨日に散々な目にあっているからな。

ジャックは料理に取り掛かった。

「出来たニヤ!」

すると目の前に現れたのはビックリするほどの豪華な料理だった。

「あ・・・え?」

ディフラは声が裏返ってしまった。

昨日とは全く違うものだったからである。

「凄いな・・・」

カデルも感心している。

「ま、まあ食べようや！いただきます！」

「いただきます。」

二人は食べ始めた。

すると、デイフラが、

「う、うめえじゃねえか！」

「当たり前ニヤ！」

ジャックは胸を張っている。

10分後

「あゝ食った食った」

「ご馳走様。」

二人は大満足である。

そして、カデルは言うことを決意した。

「あ、あのさデイフラ・・・」

「ん？なんだカデル？」

「あのさ・・・」

「お前、赤い目・・・」

「？」

「赤い目になってなかったか？お前の目。」

「え？」

カデルは言い切った。

でも、デイフラは身に覚えのない感じである。

「なんだそれ」

「は？」

カデルはビツクリした。

「あ、でもそういえば俺一瞬記憶がないところがあるんだ」

「え？どこ？」

「剥ぎ取りしてるころ」

実は、デイフラは剥ぎ取りの仕方など全く知らなかった。

まあ当たり前だが・・・

「あと、その後に俺なんか頭が痛いというか、なにか思い出せそうなんだよな」

「そっか。」

アイルキツチンには変な空気が漂っている。

ジャックもそれを感じている。

(先に寝るニヤ・・・)

ジャックはそつと二人の部屋に行った。

「じゃあ、この話はこれぐらいにして寝るか！」

「う、うん。」

二人も自分の部屋に行った。

「おやすみ」

「ああ。おやすみ。」

二人は眠りに付いた・・・

ディフラの夢の中

「お前は力が欲しいか？」

ディフラの頭に低い変な声が聞こえる。

「だ、誰だお前!？」

「力が欲しいか？」

「あ、ああ。欲しいさ。強い奴と戦っても、生き延びれる力が欲しい!」

「そっか、ならば私の試練を乗り越えてみよ。だが、お前の最も恐れるものがこれから出てくるぞ!それに耐えれたら、力をやろう。」

「だ、大丈夫だ・・・」
デイフラはちよっぴり怖気づいている。
最も恐れるものって・・・
考えるだけで恐ろしい。

「では行くぞ！」

第十話に続く

〈第十話〉 試練（前書き）

ディフラは変な声に導かれて、試練をすることになった・・・果たして成功するのか！？

第十話 試練

森丘？

ピカッ！

「うわ・・・まぶし・・・」

「！！！！」

「だ、誰だ！？」

ディフラの目の前に現れたのは、デカイ竜である。

「あ・・・う・・・」

ディフラは腰を抜かしている。

しかも、半泣きである。

グルルルル・・・

目の前にいたのは空の王とも呼ばれるリオレウスである。

「ひ・・・」

ギヤアアアアア！！！！

リオレウスはディフラに向かって猛突進して来た！

「うわああああ！！！！」

スッ・・・

リオレウスはディフラの体をすり抜けていった。

「あ、あれ？」

「な、なんで？」

だが、リオレウスは威嚇をしながら襲ってくる。

「へっ！こんなもの怖くない・・・」

だが、ディフラはまだまだ未熟物。「モンスター」というものをまだ、全然知らない。

「って、やっぱりこええ！！！！」

ディフラはダッシュで逃げた。

「はあ・・・はあ・・・なんなんだアイツ・・・突然突進してきて・・・」

・
・
」

「でも、アイツ俺の体すり抜けたよな・・・？」

「しっかりしろ！このままでは力は与えれんぞ！」

「！？どこだ！おっさん！」

デイフラは声だけでもうおっさんと決め付けている。
幼稚な人間だ・・・

「ここから抜けたくばひとつだけヒントをやるう。」

「おう！教えてくれ！」

「どこかに黒い穴がある。そこに入れ。」

「え？そんだけ？もつと・・・」

「では、精進せよ！」

これで変な声は消えた。

その直後にリオレウスが目の前に降りてきた。

「くっ！来やがったか！」

バサツバサツ！

グギヤアアア！！

「しゃあねえ！ここは討伐して・・・」

デイフラは背中に手を伸ばしたが、

なんと、ポーンブレイド改が無い！！！！

「なっ！なにっ！」

その瞬間にリオレウスの体が飛んできた！

どんっ！

「ウグツ！グツ！」

デイフラの体が吹っ飛んだ。

「ウガツ！ウグツ！ゲハツ！」

ミシッ！

骨の折れる音がした。

もちろん、デイフラの骨だ。

「グアッ！」

デイフラは吐血した。

だが、デイフラは異変に気づいた。
全く痛みがない。

反射神経で口が動いていた。

「あ、あれ？痛みが・・・？」

だが、リオレウスの体はぶつかった。

「おっかしいな〜」

デイフラは疑問に思った。

実は、早くしないと死ぬシステムである。

時間がたつと、痛む場所が増えるようになっていく。

「と、ともかく出口探さない！」

デイフラはリオレウスは無視して、逃げることにした。

「ど、どこだ!？」

デイフラは出口を探すのに必死である。

30分後

「はあ・・・はあ・・・ど、どこにあんだよ〜」

デイフラはへとへとである。

「ん？」

デイフラはなにかを発見した。

そこそが出口である。

だが、時間がかかり経っているので、痛む場所がかなり多い。

「ぐっ！」

やはり、リオレウスから逃げているからといって、一回アバラが一

本折れている。

痛むのも無理ない。

バサツバサツ!

リオレウスがここにいたか・・・探したぞ!と言わんばかりに、吼える。

ガアアアアア!

「あ、後少しなのに・・・」

デイフラは決死の覚悟で黒の穴に飛び込んだ！

「うらあ！」

その瞬間にリオレウスは炎を吹いた！

だん！

デイフラの背中に炎が直撃した！

「ぐあああああ！！！」

デイフラの服が燃えていく！

だが、なんとかその勢いで出口には入りそうだ。

でも、生死の有無は分からない。

第十一話に続く

〜第十一話〜 出会い（前書き）

〈第十一話〉 出会い

「うわああああ!!」

ディフラは今、暗いところを落ちている。

周りは何も見えない。

ドサッ!

「いててててて・・・」

ディフラは頭を打った。

すると、どこからともなくあの声が聞こえた。

(よく、あのリオレウスからにげることができ、脱出した。約束
どつり力をやろう。)

なにやら成功なようだ。

うれしいのだがなにか変な感じなのだ。

・・・

痛みが無い!

よくよく考えてみると、さっきまで痛かったところは全て完治して
いる。

「あ、あれ?痛みが・・・?」

「あれは幻術だ。だが、痛みは感じるようになっている。」

「そうだったのか・・・」

「じゃあさ、カくれよ!」

「承知した。では、目が覚めたら左肩を見るがいい。」

「え?ちよ、どういうことだ!?」

「ハッ！」

ディフラは目覚めた。

隣にカデルが爆睡している。

「はぁ、帰ってきたか・・・」

ちなみにジャックはディフラのベッドの下で寝ている。

「ん・・・」

カデルが起きた。

「おう！カデル！起きたか？」

「あ、ああ。でも、何でお前のほうが起きるの早いな？」

「う。ま、いいじゃねえか」

「おはようニヤ！」

真ん中からジャックも出てきた。

「おうジャック！」

と、まあこんな感じで朝を過ごし、朝食を食べて、村長のところに向かった。

「あれ？ディフラ。お前って前から刺青とかしてたっけ？」

カデルがディフラより先に肩に気がついた。

「って、ディフラ忘れんなよ！」

「ん？ああ〜」

「え？何？なんだよ〜」

「教えねえ〜」

ディフラは肩に手を当てて、走った。

これこそが力の源、炎の刺青である。

これからは何かと出てくると思うので覚えたい欲しい。

「ほっほ。来たわ。」

「よう！」

「おはようございます。」

「うむ。で、早速なんじゃが、『ギルド』に入って欲しい。」

「きるとっ」

「何ですかそれ？」

「まあ、簡単に言えば、そうじゃな・・・いろんな人と出会ったり、その友達とこの村よりもはるかに多い、クエストにいけるんじゃ。」
「なるへそ。じゃ、行つてくるわ。」
「さつさと済ませてくるんじゃ。」
村長は手を振った。

集会所

「ここか」
中は小さいが色々な場所にあると考えればすごい。
一行が着いたら左ににいる耳たぶがデカイ女の人に声をかけられた。
「あら、もしかして、噂の新米ハンターさん？」
もうギルドでは少しは二人のことが知られているらしい。
「最近、ポツケ村にはハンターが居なくなてたいくつだったのよ。」
でも、あなた達の事を聞いて、やる気が出たわ」
「そ、そうですか・・・」
「私はギルドマネージャーよ。よろしく。」
「こ、こちらこそ」
ディフラが慌ててお辞儀をした。
「じゃあ早速ギルドに登録してもらおうかしら？」
「あ、はい」
二人は右にあるカウンターのところにいるメイド服の人に話しかけた。
「はい、ギルド登録ですね！」
メイド服の人は笑顔で答えた。
「あ、お願いします！」
ディフラは頬を赤くしている。
カデルは、
「お、おい！ディフラ顔！赤くなってんぞ！>
と、メイド服の人に聞こえないように言った。

「え！？や、やつば！」

ディフラは急いで頬に手を当てた。

「ふふつ。可愛いのね」

ディフラの顔は蒸発しかけている。

そのまま気絶した。

全く、気絶をよくする少年だ・・・

「だ、大丈夫？」

「おいディフラ！」

「じゃあ、君」

メイド服の人はカデルを軽く指差した。

「は？僕ですか？」

「そうよ。君が彼の分も登録して。彼のこと知ってるでしょ？」

「あ、分かりました」

「その必要は無い！」

ディフラが復活した。

さつきよりテンションが高い感じた。

「うお！ディフラが生き返った・・・」

「じゃあ、早速登録して」

「は、はい！」

ディフラは元気に返事した。

5分後

「はい」

「ふむふむ。あんた達ここらへんの人じゃないでしょ？」

「え！？あ、はい。そうですけど・・・」

ディフラは声が裏返った。が、別に気にしていないようだ・・・

「僕達は異世界から来たんです。」

「え！？あ、ああ。あの伝説話でだめ元でやった・・・成功したんだ！」

メイド服の人は、びつくりした顔で言った。

「じゃあ、僕達もそろそろ・・・村長にも早くやって来いって言われてますし・・・」

「そっか、じゃあね。あ、ちなみに私の名前はラヴィンよ」

「さようならラヴィンさん！」

二人は集会所を出ようとした。

すると、出発口から誰か人がやって来た。

「はあ・・・一人で集会所はきついね。モンスターがちょっと強いんじゃない？あと、そろそろ私の家無いの？こっちに来てから、ここでずつと寝てんのよ！・・・一週間だけけど・・・」

「当たり前よ。元々は色んなハンターと交流を深めて皆で行くところなんだから。あと、あなたの家はまだです！」

ギルドマネージャーがその女ハンターに答えた。

全身がギアノス装備の武器はウオーハンマーである。

見た感じ新米ハンターである。

すると、カデルが、

「あ、あのラヴィンさん・・・あの人誰ですか？」

「ああ。あの子は新米ハンターのレイラよ」

「レイラさん・・・」

カデルがこんなことを聞くのは珍しい。

と、デイフラは思った。

（はっはくん。そういうことか・・・）

デイフラはニヤついた。

どうやら、カデルは『恋』に落ちてしまったらしい・・・

ちなみに『初恋』である。

カデルは、レイラに話しかけた。

「あ、あの・・・」

「へ？」

レイラは高い声で驚いた。

「こ・これから・・・一緒に・ク・・・クエストに・行きませんか

「さつき、一人じゃきついつて言ってたし……」

カデルはもじもじしながら言った。

「え？あ、う・ん。まあ、いいかな……」

レイラも返事した。

ちなみにレイラもカデルには好印象のようだ。

この時、カデルの顔は熟した林檎のように、赤くなっていた……

(え、アイツつてあんなに積極的だったか?)

「あ、あとあの後ろの僕の友達も居るんだけど……」

「あ！全然良いよ！たくさんいたほうがいいし！」

「ありがとう！」

カデルは思わずレイラの手を握ってしまった。

「あつ！ご……ごめんなさい……」

「いえ、全然……だ、大丈夫……」

二人とも顔が赤い。

(あいつ等……いいかんじじゃね?)

ディフラは面白そうに見ている。

「じゃあ、これ。」

レイラは『ギルドカード』をディフラとカデルに差し出した。

「ん？なんだこれ」

「僕達こんなの持ってないけど……」

二人はラヴィンのほうを向いた。

いや……睨んだ。

「うつ……」

ラヴィンは声が出ない。

「あはっはっはー！言っの忘れてた。あ、でも明日になって……」

に届くから」

「じゃあ、明日渡します。」

「うん！」

レイラは笑顔で答えた。

「じゃあ、また明日。」

「って、私またここで寝なくちゃいけないんだ・・・」
「あ、じゃあそれなら・・・」
カデルは何か提案があるようだ。

第十二話に続く

〈第十二話〉 雪獅子（前書き）

ギルド登録を済ませた二人はクエストから帰ってきた新米女ハンター「レイラ」と知り合った。が、家が無い。と、いうことでカデルが何かを提案した。

〈第十二話〉 雪獅子

「あつ、それなら僕ん家来なよ！」

「えっ……」

レイラは内心喜んでいる。

ディフラも了承した。

「じゃあ、行こうか。」

「おう！」

三人は自宅に向かった。

……ディフラはつまらない。

なぜなら、レイラとカデルがずっと二人で喋っているからだ。

（まあ、いいけど……やっぱりつまらん……）

ディフラはふてくされている。

自宅

カデルは大変なことに気がついた。

ベッドが二つしかない。

「あ、ベッドが……二つだけ……」

カデルは隅っこで体育座りをしている。

すると、レイラが、

「あ、別に床でも良いよ」

「え、でも……」

カデルは落ち込みながら言った。

その間にディフラはジャックに、

（ジャック、村長の所に行って、ベッドもらって来い！）

と、小声で言った。

（了解ニヤー！）

ジャックはこっそり村長の所へ向かった。

そして、ディフラが段取りよく、

「じゃあ、アイルーキッチンに行こうよ！とりあえず」

「ジャックは？」

カデルが聞いた。

しまった！と、ディフラは思った。

ジャックは今、村長にベッドをもらいに行っている。

「あ！」

ドジなディフラである・・・

「ったく」

カデルが呆れた。

ガラガラガラ・・・

何か転がる音がした。

ドン！

木材を持って来たジャックが居た。

「何だその木は？」

「ベッドの材料ニャ」

ジャックはベッドを持ってくるのではなく、材料を持ってきた。

「ナイスアイデア！やるなジャック！」

「じゃあ、早速組み立てよう。」

「おう！」

「レイラは待ってて。」

「うん。分かった」

カデルは呼び捨てにしてみた。セーフなようだ。

（ふう。怒られるかと思ったよ。）

カデルは心の中でほっとした。

30分後

ベッドが完成した。

なかなか綺麗なものである。

「ありがとう！」

レイラは感謝した。

「よかったニヤ！」

「ジャックもありがとう！ここまで運んでくれて！」

「て、照れるニヤ」

ジャックは頬を赤く染めた。

「じゃあ、ジャック。忙しいが夕飯作ってくれ！」

デイフラがいった。

「OKニヤ！」

そして、その瞬間に、

「今日は豪勢に頼むぜ！レイラも来たし！」

デイフラがノリノリで言った。

「任せるニヤ！」

ジャックは親指を立てて言った。

1時間後

「はあ、食った食った」

デイフラは大満足だ。

「あ、ありがとうね皆・・・」

「？」

一同は聞き返した。

「今まで、あんまり人に親切にしてもらえなかったから・・・」

レイラは泣き始めた。

「お、おい泣かないでくれ。」

カデルがあせつていった。

「ともかく今日はなんもしてねえが、寝よう！」

「私はガウシカ狩って来たよ！」

レイラが怒って言った。

「わ、悪いい……」
ディフラは軽く頭を下げた。
「じゃあ、おやすみ……」
「うん。おやすみ……」
三人は就寝した。

朝になった。

「ふ……ふわあああ……」
レイラが一番早く起きた。

ちゃんとした所で、寝れたから、うきうきしながら寝て、あんまり寝ていない。

ちよつと、寝不足か……
その十分後に、

「う……うああああ……」
カデルが起きた。

今日も爆睡である。
その一時間後に、

「う……うらああああ……」
ディフラが起きた。

その一時間二人はポケット村について話していた。
「あ、おはようディフラ。」

カデルが話しかけた。
「おお……もういつちよ寝よ」

ディフラは寝ぼけている。
そして、二度寝をしようとしている。

どれだけ寝たら満足なんだ……
と、カデルは思いつつ、ツッコミを入れた。

「寝るな！皆待ってたんだぞ！」
「ん？ああ。悪いな」

と、まあこんな具合でいつものように動いて村長のところに向かっ

た。

「ちーす」

「おはようございます」

「ど、どうも」

レイラは丁寧にお辞儀した。

「ほ？お主は・・・誰じゃ？」

「あ、私はレイラと申します。昨日からディフラさんの所でお世話になってます」

「ほっほ。そうじゃったか。お主らも隅に置けんのお。」

「や、やめてくださいよ」

カデルは顔を赤くして言った。

「じゃ、早速クエストを受注してもらっぞ。」

「おう！」

「と、いつてもたいしたもんじゃないが・・・」

「ん？」

「ブランゴが最近こちら辺で暴れているから薬草が取りにいけんと情報が入った。早速ブランゴを討伐してきてくれ。」

「分かった。レイラが居るからある程度はモンスターの名前分かるよな？レイラ」

「うん。ブランゴぐらいなら知ってるよ」

「じゃあ、行くか」

「おいらも行くニャ！」

「ああ。」

「じゃあ、行ってきますね」

「うむ。気をつけてな。」

一行は雪山に向かった。

この時、ディフラは元の世界のことを考えていた。

母はどうしてるとか、学校は大丈夫か。とか、色々考えていた。軽いホームシックである。

（いつになったら帰れるのかな）

雪山

「あれ？カデルとレイラ。お前らの武器ちょっと輝いていねえか？」
デイフラが二人に聞いた。

すると二人はくすつと笑ってカデルが言った。

「俺らの武器も強化したんだよ。お前が寝ている間に。」

今日の朝に二人は武具屋に行つて、武器を強化していた。

「じゃあ、行くか！」

まず、一行は雪山の上の方に向かった。

今日は前よりなぜか吹雪が強い。

このときに、カデルとデイフラはいやな予感がしていた。

そしてこの時に大きな咆哮が・・・

そんなことには気づくはずも無く、普通に歩くだけだった。

「っち！ギアノスが・・・1・2・・・3匹か・・・殺るぞ！」

デイフラが気合を入れながら皆に言った。

「おう！」

「うん！」

三人は一斉にギアノスに斬りかかった。

グギヤア！

ギヤウン！

ゲエエエエ・・・

三匹のギアノスは一瞬にして息の根を止められた。

三人の鎧には血痕が付いている。

そして、前にすすんだ。

その地面にはギアノスの遺体が真つ二つに分かれていたり、

横っ腹に穴が開いてたり、

顔が原型を保っていない物があつたりする。

「あっ！ブランゴよ！」

一行の前にはブランゴが5匹いる。

「とつとと殺るぞ！」

デイフラが一番早くボーンブレイド改を手に、ブランゴに斬りかかった。

ズバツ！

だが、切れたのはブランゴの左手だけだった。

だが、そのおかげで、ブランゴは体制を崩した。

「今だカデル！お前がとどめさしとけ！」

デイフラは他のブランゴを殺しに行った。

「ああ、任せろ。」

カデルはブランゴの顔面にボーンククリ改を突き刺した。

グオオオオ・・・

ブランゴは静かに倒れた。

「やるわねあんた達！」

レイラが叫んだ。

今一匹討伐。

「当たたり前だろ！」

デイフラは親指立てて言った。

「うおおら！」

デイフラがブランゴに斬りかかった。

ひゅっ！

だが、ブランゴによけられてしまった。

その瞬間にレイラがブランゴの顔面にウォーハンマー改を叩きつけた。

そしてブランゴは吹っ飛んだ。

そして、壁に叩きつけられた。

グギャー！

ベキッ・・・

ブランゴの背骨が折れた。

それと同時にブランゴは死んだ。

「よっしゃ！これで二匹目！」

三人は順調にブランゴを倒していった。

10分後

三人はブランゴ5頭を討伐した。

「はぁ・・・はぁ・・・」

三人とも息が上がっている。

「はぁ・・・じゃあ、帰るか」

デイフラが息を上がらせながら言った。

三人は村に帰ろうとした。

が、どこからともかく大きな咆哮が聞こえた。

グオオオオオオオオオオオ！

「！！！」

三人は武器を取り出した。

「まだブランゴがいたのか！」

「つたくめんどくせえな」

「いいえ。これは・・・」

レイラが言いかけたところで一行の目の前に大きなブランゴのようなモンスターが現れた。

「あ・・・で、でえ・・・」

一行の目の前に現れたのはキングサイズのドドブランゴだった。

「あ、あれはドドブランゴよ！」

レイラが叫んだ。

「うち！こっちは疲れてんだよ！」

だが、そんな声も聞かずにドドブランゴは三人にタックルしてきた。

「ジャック！お前は隅っこの方にいてる！」

デイフラがジャックに言った。

「わ、分かったニヤ！」

ジャックは猛ダツシユで氷の柱に隠れた。

「くっ！どうする！？」

「戦うしかねえ！」

だが、そんなことを話していると、ドドブランゴのパンチがレイラの腹に入った。

「ああっ！」

「レイラ！」

カデルが叫んだ。

レイラは勢いで吹っ飛んだ。

「野郎！」

デイフラが斬りにかかった！

ガキン！

デイフラのポーンブレイド改はドドブランゴに白羽取りされてしまった。

「なっ！」

バキッ！

ドドブランゴの鋭い爪がポーンブレイド改に突き刺さる！

「ぬ、抜けねえ！」

「デイフラ、俺がその腕を切り落とす！」

そう言ったのはカデルであった。

カデルはポーンククリ改でドドブランゴの腕を切り落とそうとしたが、ドドブランゴに蹴り飛ばされた！

その時に同時にデイフラも勢いで飛んでった。

だが、ドドブランゴの蹴りは予想以上に強くて、鳩尾に入った。

「うあがっ！」

カデルは吐血した。

「カデル！大丈夫か？」

「はああ！」

その瞬間にレイラのウォーハンマー改がドドブランゴの鳩尾に入った！

グオ！

だが、それほどのダメージにはなっていない。

「今よ！逃げるわよ！」

「しゃあねえな！おいカデル！俺につかまれ！」

「ああ、分かった。」

「ジャックはレイラと一緒に逃げる！」

「了解ニヤ！」

「うおおおおお！」

デイフラはカデルに肩を貸しながら、全力疾走した。

その瞬間にドドブランゴは逃がすかと言わんばかりに、雪だまを一行の前に落とした。

ドンッ！

「うおっ！」

一行は止まってしまった。

グオオオオオオ！

その瞬間にドドブランゴが突進してきた！

第十三話に続く

〜第十三話〜 四人目のハンター（前書き）

三人はブランゴを討伐しに行った。

そして、終わったかと思ったら、ドドブランゴが現れた。
そして逃げる道も防がれて、絶体絶命！

第十三話 四人目のハンター

「や、やべえ。このままじゃ死ぬぞ!」

ダダッダダッダダッ・・・

ドドブランゴはすごいスピードで突進してきた。

一行が死を悟ったとき、

「はあああああ!」

と、がけの上から声がした。

男は鉄刀【楔】を下に向けて落ちてきた。

ドスッ!

鉄刀【楔】がドドブランゴの中心に刺さっている。

グオオオオオオ・・・

ドドブランゴはこの一撃だけで死んだ。

ちなみにその男が落ちた高さは5メートル弱あった。

あと、防具はランポスシリーズである。

どっちかっていうとベテランに入る・・・かな?

その男はドドブランゴから何のためらいも無く鉄刀【楔】を抜き取った。

ズブッ

「ったくも。また血がついちまったよ。ドツプリと」

「あ、あの・・・」

カデルがその男に話しかけた。

すると、その男は振り返って、笑顔で、

「大丈夫だったか?」

と、聞いた。

「あ、は、はい。」

カデルはきょとんとしなから言った。

「そうか・・・って、ちょっと怪我してるだろ？」

「え！？あ・・・はい。」

「そう隠すな。ほら、薬草だ。これ張ってたら大丈夫だ」

「ありがとうございます。僕の名前はカデルといいます。」

「俺はデイフラだ！」

「わ、私はレイラです」

「おいらはジャックニャー！」

「そうか。ちょっと待っていてくれ」

「？」

「おーい！早くこんかあ！」

男は誰かを呼んだ。

すると、壁からこそつと女ハンターが出てきた。

手にはハンターボウーをもつて、全身ハンター装備である。

こいつは新米ハンターである。

「お前、こここの人のところに行け」

「えっ・・・」

その女はびっくりしている。

まあ、無理も無い。

「ちよ、ちよつと待てよ！勝手に決めんなよ！」

デイフラが慌てて言った。

すると、男が、

「俺は今から未確認の龍に戦いに行かないといかん。それで生き延びれる確立は・・・0に等しい・・・」

と、言い終わって俯いた。

「はあ！？そんな格好で未確認？無理だろ！」

デイフラは半笑いで言った。

「まあ、この装備で行ったら生き延びれる確立は0だ。だが、他の装備で行ったらどうだ？勿論自分の中で最強のな！」

男は自慢げに言った。

「じゃあ何故そのような装備を？」

カデルが聞いた。

確かに普通は自分の中で最強の装備で挑むはずだ。

「こいつの訓練のためさ」

男はそう言っつて、女ハンターの方を向いた。

「こいつに合わせて行っただよ。それにここで俺の大事な防具が潰れたら嫌だしな」

と、いうことで一行は女ハンターを仲間に入れることにした。

「よ……よろしくおねがいます」

女ハンターは照れながらも言った。

「私の名前はセーナと言います。もう、呼び捨てで良いですよ……」

「

セーナは可憐に言った。

「じゃあ、よろしく頼むぜ！セーナ……さん……？」

少しずつ俯きながら言った。

「だから、呼び捨てでいいですよって言うてるのに」

セーナは軽く頬を膨らまして言った。

デイフラはセーナに恋をしたらしい。

恋多き少年だ……

だが、ラヴィンの時よりも慎重に言ってるようだ。

こっちがストライクだったようだ。

しかも、ど真ん中。

「じゃあ、セーナ……」

デイフラは顔を赤く染めた。

「宜しく、セーナ。」

カデルはクールに呼び捨てにした。

それを見たデイフラは、

(お、お前よくセーナって呼び捨てに出来るな)

(いや、普通だろ。さてはお前……セーナのこと……)

(お前こそ、レイラのことか・・・)

(あゝ！それは言うな！本当にマジで！)

(じゃあ、お互い内緒っていう事で・・・)

「なにが？」

二人の首の間にレイラが入ってきた。

「わ、たたたたたた！い、いやなななんでも無いよ！」

ディフラは慌てて誤魔化した。

「はっは〜ん。さてはディフラ・・・セーナの・・・」

「アーリーー！！本当にマジでそれは・・・言わないでください・・・本当に・・・」

ディフラはレイラに対して敬語を使った。

分かりやすい奴だ・・・

「じゃあ、カデルは何言ってたの？」

レイラがカデルの気持ちも知らずに核心を突いた。

「うつ・・・そ、それは気にしなくて良いよ・・・」

カデルの顔が次第に赤くなっていく。

「あ、そう・・・つまんないの〜」

レイラはすねた。

(おいおい〜お前のフィアンセがすねちゃったぞ〜)

ディフラがひやかす。

(や、やめるよ〜)

「ほら〜！やっぱり何か喋ってた〜！」

レイラが突っ込んだ。

それを見ていた二人は、

「あいつ等元気だな・・・」

「ええ。でも、私ああいうの好きですよ？」

「そうか・・・」

と、三人のことを観戦していた。

「じゃあ、帰るか！」

ディフラが言った。

「ああ。」

「うん！」

「はい……」

「おう！」

他の仲間も揃って言った。

ポツケ村

「あいつ等すげえな……」

村民は驚いている。

そこらへん（自宅の屋根）から落ちてきた輩がどんどん仲間を増やしてだいぶ強くなっている。

もう、だいぶ腕は上がってきている。

問題は武器だけか……

と、村民は思うのであった。

「ほっほ。また、人間が増えとるわい。で、おぬしらは何処から？」

「ジャンボ村から」

と、男が言った。

「ほう。もうそろそろ普及してきたか。」

「はい」

「ま、その話はさておき、報酬じゃ。」

一行は報酬をもらった。

男を除いて。

「あれ？おっさんいらんのか？」

ディフラが質問した。

「ああ。お前らが強くなれ。では村長。私はジャンボ村に戻ります」

「ほ？その娘さんはどうするんじゃ？」

「ディフラの家で暮らすことになりました」

「そうか。ほっほ。やっぱりおぬしらは隅に置けんのお！」

「や、やめる！ 恥ずかしいじゃねえか！」

「ほう。と、いうことは……」

「もう良いだろ！ はい！ 終わり！」

デイフラが強制的にその話は終わらした。

「あ、あの……自己紹介を……」

「ほ！？ ああ〜そうじゃな忘れておったわ。」

「では、改めて。私の名前はセーナと申します」

「ほう。綺麗な言葉遣いじゃのお！ レイラは……」

「レイラも十分ですよ！」

カデルがかばった。

「カデル……」

レイラはカデルに見とれている。

「レイラ。お主ひよつとしてカデルのことが……」

「ゴラ！ 村長のヴォケ！ お前はひやかすのが好きなのか？」

と、デイフラが頭にムカマークを付けながら言った。

（お前が言っなよ……）

と、カデルはデイフラに軽くあきれた。

「じゃ、帰ろっぜ！ 今日はドドブランゴが出てきて疲れた」

デイフラは何気なく言った。

「おい！ デイフラ。お主さっき『ドドブランゴ』と、言ったのっ？」

村長が慌てて言った。

「え？ あ、うん。それが？」

「ギルドの報告ではドドブランゴなんて出てこないんじゃよ……」

「はあ！？ んなわけねえだろが！」

デイフラが血相を変えて言った。

「まあ、ギルドに報告しとくわい。じゃあな。」

「おう！ 頼んだぜ！」

「じゃ、改めて。帰るか！」

「ああ。」

「OK！」

「うん……」

「俺はここでおさらばだ」

「……ちゃんと、帰ってきてね！」

セーナが半泣きで男に言った。

「ああ。大丈夫だ！じゃあな！」

「頑張れよおっさん！」

ディフラも激励した。

そして、一行と、男は別れた。

これが最後のひとときと分からずに……

第十四話に続く

〜第十四話〜 帰還後の休息

「おっさん・・・絶対生きろよ・・・待ってるからな・・・」
「ディフラは静かに呟いた。」

「ん？ディフラ何か言った？」

カデルが呟きに気づいて聞いた。

「あ・・・いや。別に・・・」

「そうか。」

自宅

「さてと・・・疲れたけども、ベッドがもう一ついるからな。カデル手伝ってくれ！」

「ああ。任せろ。」

二人はベッド作り。

レイラとセーナはジャックと一緒に料理を作っている。

1時間後

「よし！出来た！」

「なあ、ディフラ・・・」

「ん？なんだ？」

「レイラの時より綺麗に作ってないか？」

今回作ったベッドはセーナのベッドなので、ディフラは前よりもが
んばって作った。

「な・・・んなわけねえだろ！」

「あれれ？顔が赤くなってるよ」

「や、やめろ！」

「二人とも〜ご飯できたよ！」

ビクッ！

二人は恋の話しをしていた為、ものすごくびっくりしてしまっただ。

「どうしたの？そんなにびっくりして・・・」

「え！？な、なんでも無いよ。」

「やっぱり何か隠してるな」

レイラがカデルを追い詰めようとした。

だが、デイフラが、

「さあさあ！お前らが作ってくれた飯を食べに行くとするか！」

ナイスフォローである。

「あ！セーナが待つてるわ。行きましょ」

（おいカデル。お前レイラの手料理食べれて幸せだな！）

（いい加減にしないと怒るぞ・・・）

カデルは殺気立っている。

なんとも恐ろしい。

「うつ・・・ご、ごめん・・・」

と、デイフラは謝ったがカデルは先に行っていた。

「お、おい！待てよー！」

デイフラはカデルを追いかけた。

アイルキッチン

中に入ると、いつよりもずいぶん豪華な料理があった。

「す、すげえ・・・レイラが来た時よりも多いな・・・」

デイフラは絶句している。

「当ったり前ニヤ！」

ジャックは胸を張った。

「それに二人とも手伝ってくれたからいっぱい作れたニヤ」

料理はテーブル一面に置いてある。

「じゃあ早速いただこうぜ！」

デイフラが言った。

2時間後

「今日は多かつたな。」

カデルは腹を食べ過ぎのせいで膨れている。
軽いデブ。

見たいなものか・・・

「話も弾んだしね！」

レイラがハイテンションで言った。

「じゃあ、寝ようか・・・ふわあああ・・・」

ディフラは欠伸をしながら言った。

「ああ。」

「うん！」

「うん・・・」

セーナはいつも小さな声だ。

ディフラはそれが気になっていた。

深夜

村の外に誰か居る。

セーナだ。

その物音でおきたのはディフラだ。

セーナはポツケ農場の木の下で座っている。

「誰だよ・・・こんな時間に・・・」

ディフラはゆっくり起き上がった。

「おーい！誰だー？」

ドキッ！

セーナは誰も居ないと思って深夜に出たのに、誰か居るんじゃないか？

と、思った。

「だ、誰？」

「ん？その声は・・・」

ディフラは寝ぼけながら言った。

「・・・誰？」

ディフラは寝ぼけて自分のフィアンセということ分かっていない。

「え・・・私よ・・・セーナ」

「へ？ん~~~~」

ディフラは目をこすっている。

「あ!!!」

ディフラは目が覚めた。

「セーナさん・・・」

またさん付けになっている。

そして、ディフラは一気に顔を真っ赤に染めた。

「大丈夫？顔がものすごく赤いけど・・・」

セーナは首をかしげた。

「え！？う、うん大丈夫・・・」

「ところで、セーナは何してたの？」

「え、私？・・・私は考え事」

「何を考えてたの？もしかしてこっつて馴染みにくい？」

「え！？あ、そういう訳じゃ・・・無いんだけどね・・・」

セーナは軽く顔を下にした。

「私、両親は10歳の時に亡くしてるの・・・そして、ガルバに引き取られたの・・・」

「ガルバってあのおっさんか？」

「うん・・・だからあの人死んだら、私は行くところがないの・・・」

セーナは少しずつ涙目になってきた。

「おいおい・・・お前ずつとここに居るつもりはねえのか？」

ディフラが明るい声で言った。

「えっ・・・」

セーナは頬を赤く染めた。

実はセーナのタイプはディフラみたいな明るいタイプだった。

でも、多分眼鏡のディフラは嫌われてると思う。

セーナは眼鏡っこは嫌いなのだ。

まあ、これは余談か・・・

「いい・・・の？」

セーナは次第に顔が赤くなっていく。

「当たり前だよ！」

ディフラは笑顔で言った。

そしてこの時もう一人起きていた。

レイラだ。

「ふーん。あの子らそういう関係に・・・」

レイラはニヤついている。

カデルとレイラの時のディフラみたいなものだ。

「あれ？ディフラ・・・刺青なんてしてるんだ・・・」

「ん？ああ、これ？なんか色々あってな」

（カツコイイな）

セーナはボソツと言った。

「？なんか言ったか？」

「え？う、ううん。それよりその刺青どこでしたの？」

「ポツケ村になるのかなあ・・・」

「どういうこと？」

セーナは聞いた。

「話すと長くなるけど・・・いい？」

「うん！全然！」

セーナは笑顔で言った。

（セーナの笑顔初めてみるな）

1時間後

「と、まあこんな感じかな」

「へえ・・・そんなことがあったんだ。で、それは他の二人にも言ったの？」

「あ、ううん。カデルはあえてじらししてる。レイラはこの刺青を手に入れてから出会ったから・・・」

「そっか。と、いうことは私がその話を聞くの初めてだね！」

「あ、うん。そだね」

セーナは内心喜んでいる。

でも、顔には出さない。

なぜなら、それが見つかるのと恥ずかしいからだ。

「へえ・・・私にもカデルにも言わないなんてねえ・・・カデルに報告だっ」

レイラは自宅に戻った。

「じゃあ、そろそろ帰るか」

「うん！」

二人も自宅に帰った。

「でね、あんなことも言ってたよ！」

レイラは本当にカデルに報告していた。

忘れている人も居るかもしれないのだが、この時間は深夜だ。こんな時間にディフラ隊は全員起きている。近所迷惑だ。

「そっか。あいつ等そんな関係に・・・」

「でも、告っては無いみたいだよ！」

「あ、当たり前だろ！俺だって・・・」

「ん？俺だって・・・何？」

「あっ・・・」

カデルは慌てて口をふさいだ。

「何々々？」

レイラは追い詰める。

だが・・・

バンッ！

扉の開く音がした。

ディフラとセーナだ。

二人とも楽しそうに帰って来た。

まあ、ポツケ農場からはそんなに長くないのだが、近くを散歩をしながら帰って来た。

だから、レイラは報告が出来たのでもあるが・・・

「あ・・・お帰り。」

カデルが近くに居るレイラを軽くどけながら言った。

「お、おう・・・てか、お前らなにやってんの？」

「うっ・・・ま、まあ気にすんな。」

「あそ・・・」

だが、カデルとレイラは二人を見てニヤついている。

「なっ、何だよ！」

ディフラが軽く怒って言った。

すると、レイラがニヤつきながら、

「い〜や〜。別に〜」

「まあ、寝よや・・・眠いわ」

なぜか関西弁になっているのは「愛嬌で

「じゃあ、お休み・・・」

「ああ。お休み。」

「私も眠くなってきた・・・」

「お休み！ディフラ！」

セーナはディフラにだけ言った。

これが誤解を招いた。

第十五話に続く

〈第十四話〉 帰還後の休息（後書き）

なんか、あいの みたいになっってきました^^ ;
そして、今日は戦闘シーンはありませんでした！

ごめんなさい・・・orz

今回はちよつと番外編

みたいな感じにしてみました・・・

では、応援宜しく願います。

〈第十五話〉 初の密林へ

「え？なにになに？セーナ〜。あんたディフラって言ったよね？」
レイラがニヤつきながら言った。

「え！？そ、そういう意味じゃなくて・・・」

セーナはどんだん顔が赤くなっていく。

「じゃあ、なんで顔が赤いの？」

「え！？」

セーナは慌てながら顔を手で覆った。

まあ、隠れるわけも無いが・・・

「あの、覚えてる名前がディフラだけだったから・・・」

「あ、そういうこと。てつきりディフラのことが・・・」

「あ〜〜！！！！それ以上言わないで！」

セーナが雑音を入れる。

「やっぱり、セーナ。あんたはつきり言ったら？」

レイラが突然真面目な顔で言う。

「うっ・・・」

「もうそれはいいの〜！！！！」

セーナが怒った。

「ごめん、ごめん！」

レイラが軽く避ける。

すると、カデルが冷静に、

「なあ、皆早く寝た方が良いんじゃない？明日も何かとクエストやるでしょ？」

それを聞いた。他の輩は完全に静まっている。

「・・・」

「・・・ごめんね、カデル・・・」

「すみません・・・」

「まあ、ともかく寝よう！お休み！」

「お休み」

「お休み・・・カデル・・・」

レイラはこっさり言った。

その時、

（もしかして、レイラってカデルのことが・・・ふふっ）

と、セーナは思ったので単刀直入に言った。

小声だが。

（ねえレイラ。あんたカデルのことが好きでしょ）

（え！？な、なんのこことととかなあ・・・）

レイラは小声でしどろもどろになっている。

（やっぱり〜）

セーナが少し笑う。

（やっ、やめてよ・・・すぐそこに居るんだから・・・）

レイラが布団にもぐった。

（ふふっ）

セーナは笑い寝た。

zzz・・・

朝になった。

一番はデイフラだ。

最近起きるのが早くなってきた。

自負もしている。

「俺ってば早起き？イエーイ！」

と、一人でハシャイているとデイフラが起きてから20分後セーナが起きた。

「ん・・・んん・・・」

セーナは目をこすってから顔がポツと赤くなった。

「あ、デイ、デイフラ・・・おはよ」

すると、窓で外を見ていたデイフラが振り向いて言った。

「あ、セーナ・・・うん、おはよ」

デイフラは寝起きの笑顔を見せた。

だが、寝起きは寝起き。目がとろ〜んとしている。

それに気づいてセーナは軽く笑いつた。

「ふふつ。目。とろ〜んってなってるよ」

「え！？、マジ？」

デイフラはセーナに恥ずかしいところは見せたくないと思って隠した。

まあ、そのお陰で眠気がさめた。

そして、デイフラが早起きになった理由はお察しの人もいるかと思うがセーナにいいところを見せたかっただけである。

単純な少年だ。

まあ、これを『青春』というのだろうか・・・

「ねえ、デイフラ。見て、二人とも重なって寝てるよ」

「ははっ。本当だ」

二人が見た光景はカデルの上にレイラが乗っている。

「う、お、重い・・・」

カデルは魔されている。

「だ、誰がデブよ！」

レイラは怒りつつも寝言でカデルを蹴った。

「こいつら起きてんじやんえか？」

「そ、そうかも・・・」

二人とも呆れている。

「それにしてもあいつ等仲良いな」

「うん！私達も・・・」

セーナははっとして口をふさいだ。

「ん？私達も・・・？」

「な、何で無いの！気にしないで！」

カデア・・・

セーナの顔がすごい勢いで赤くなっていく。
もう、熟したりんごのようだ。

「どうした？顔、赤いぞ？」

そっぴい終わったあとディフラは恥ずかしながらセーナの額に手を当てた。

「えっ・・・ちよ、恥ずかしい・・・」

セーナはもっと赤くなって意識が朦朧としている。

「熱は無いみたいだけど・・・」
ドサッ

セーナは倒れた。

「ちよ、セーナ!？」

ディフラは驚いて大声で言った。

その時に残りの二人が起きた。

「ん・・・な、なんか重い・・・」

当たり前だ。レイラが上に乗っている。

「うわっ！なんでレイラが俺の上に・・・」

カデルは顔が赤くなっていく。

「ふわああああ・・・あれ？カデル・・・なんで私の下に・・・」

「そ、それはこっこの台詞だよ・・・」

カデルが苦笑いで言った。

「あれ？どうした？ディフラ・・・えっ!？」

カデルが驚くのも無理は無い。

ディフラは倒れてるセーナを軽く頭だけ持ち上げて顔を見つめているかのようになっているからだ！

だが、実はカデル達が起きないように小声でセーナ！セーナ！と言っていたからだ。

だから、今にもキスしそう見えたのだったのである。

(ねえ、カデル。ちよっとほっとこか・・・)

(ああ。そっぴいな)

5分後

セーナは復活した。

「あ、おはよ。あ、二回目」

笑顔でディフラに挨拶した。

でも、その体制がディフラが王子のようになっていたから二人とも顔が赤くなった。

そのときくすくす笑っている二人にディフラはやっと二人に気づいた。

「うおっ！お、お前らいつの間に・・・」

ディフラはきよんとしている。

「いや、お前がセーナにキスしそうだったところから・・・」

「なっ・・・」

「本当？ディフラ・・・」

「んなわけねえだろ！勝手に決めつけんな！」

「だってその体制だったら文句言えねえだろ？」

カデルがニヤつきながら言った。

カデルとレイラは今、ディフラの反応で遊んでいる。

「あ・・・」

「あっ！」

セーナも今頃気づいた。

「は、恥ずかしいよ！」

「なんで恥ずかしいの？」

レイラは標的をセーナに変えた。

「うっ・・・」

「やっぱり・・・モガッ」

セーナは慌ててレイラの口を塞いだ。

「あ、気にしないで！さあ村長のところに行こー！」

セーナはうまく誤魔化した。

「ほっほ。賑やかじゃのう。」

「で、今日はどんなクエストだ？」

「今日は安全面も考えてランゴスタの20匹の退治じゃ。」

「らんごすた？」

「蜂みたいな昆虫じゃ大きいから分かるじゃろ。」

「ちなみに装備はそろそろ変えた方がいいんじゃないか？」

カデルがディフラに言った。

二人はいまだ現在マフモフ装備だ。

かなり弱い。

女組はまあいいとして、男組は・・・

「そうだな。じゃあ装備を作るか買うかするか！」

「ディフラはカツコイイ装備にしてね！」

セーナはディフラと一緒にに行くことにした。

もちろん、レイラはカデルとだ。

「やっぱり強くならなくちゃ！」

「ああ。でも、ギアノス装備って作れるかなあ・・・」

「うん。この素材だったら多分作れるよ」

「そうか。じゃあ行こう。」

「うん」

「おうディフラ。お前彼女連れての登場か？」

「そ、そんなんじゃないよ！おっさん！」

「そ、そうですよ！」

二人は顔を赤くして言った。

「まあ、ともかくだ。装備はどうする？」

「えっと・・・ハンター装備でお願いします」

「そっか。お前やっぱりその彼女のこと・・・」

「あゝゝ！！！早くお願いします！今日は二回ぐらいクエスト行こうと思ってるですから！！」

「おうそうか。じゃあ早速作るぜ！」

「お願いします」

一方カデルとレイラは・・・

「カデルもやるニヤ。彼女連れてくるニヤんて」

「ち、違つよ」

「まあ、良いニヤ。で、どうするニヤ？」

「ギアノス装備を生産したいんだけど・・・」

「それなら、ご主人に頼めば良いニヤ」

1時間後

「おおお・・・」

ディフラは全身ハンター装備に変わっていた。

「カツコイイね！ディフラ！」

セーナも笑いながら言う。

一方カデルは・・・

「なんか、侍みたいな感じだな・・・」

こつちも、全身ギアノス装備に変わった。

「侍？なにそれ？」

「え！？知らない？まあ、また今度教えてあげるよ。」

「うん。分かった」

一行は村長のところに再び戻った。

「ほう・・・お主ら・・・『ぺあるつく』ってやつかのお？ほっほっほ」

「ちっ、ちげえよ！偶々そうなたただけだよ！」

「ほっほ。まあじゃあ早速密林に行ってもらつぞ。」

「密林？行ったことねえな・・・」

「セーナかレイラはしつとるじゃろ？」

「え？ああ、一回だけなら・・・」

レイラが言う。

「えっと・・・ツアーで10回ぐらい・・・」

セーナが言った途端、みんなの口があんぐりしている。

「ん？どしたの？」

「お前って、俺らの中では一番すげえんじゃねえか？」

「え、そう？」

「ねえねえ。みんな早く行こうよ」

レイラが言う。

セーナに嫉妬心があるようだ。

「ああ。まあ、行こうよ。」

一行はまだ未知の世界（男組のみ）の密林に向かうことになった。

第十六話に続く

〈第十六話〉 地の女王！？

密林

ディフラは雪山と違う雰囲気には驚いている。

まず、寒くない・・・

そんなことかよ！

と、思いの方も居るとは思うがそこはご愛嬌で

あとは、草食竜が違う。

これはなんとか分からんでもない発言だ。

「な、なんか全然雪山と違うな・・・」

カデルが声に出して言った。

「じゃあ、二手に分かれよっか」

言い出したのはレイラだ。

カデルと一緒に居る時間を少しでも増やすために言った。

「ああ。賛成だ。」

「じゃあ、私とディフラ。レイラとカデルね」

セーナが言った。

「あ、ああ。いいけど・・・」

内心かなり喜んで居るディフラが居た。

「じゃあ、俺は森の方に。ディフラ達は海岸の方に行って来てくれ。」

「

分かった。大体済んだなって思ったらキャンプで寝ててくれ」

こうして、二手に分かれた。

両方とも、内心かなり恥ずかしい感じがあり、嬉しい感じがある。

(ディフラと二人きり)

セーナは心の中でスキップした。

と、まあここら辺で恋バナは終わらして・・・w
え？なぜ？

そりゃあ、小説のバランスが悪くなるからですよw

「・・・」

「・・・」

「・・・いないな。セーナ・・・」

「・・・うん。」

こっちの二人はかなり探してもいない・・・
と、いった感じであろうか。

一方カデルとレイラはというと・・・

「ちよつと休もうか。」

「うん痺れてきたしね・・・」

こっちの二人はランゴスタに刺されながらも、勇敢に討伐していた。

まあ、ディフラは見つからないだけだが・・・w

カデルの体にはランゴスタの体液が所々付いている。

緑色の不気味な色をした体液が。

「どっか水があるところないかぁ・・・さっきまで木の所で戦って
たから、分らないよ・・・」

「キャンプに行けば海があるけど・・・行くまでにまたランゴスタ
が居たらどうする？」

レイラが心配そうにカデルの顔を見上げながらいった。

「あ、ああ。でも、このままだとどっちみち見つかるから行くこうか。
」

「分かった」

二人はキャンプに戻ることにした。

また、場面が変わるが、許して欲しい。

一方、ディフラ達かというと・・・

「なんか、羽の音がしないか？」

「そういえば・・・バサツバサツって聞こえるような・・・」
バサツバサツ・・・

目の前に現れたのはリオレイアだった。

「なんだこいつ・・・」

ディフラは目を丸くして恐怖に包まれているかのよう。

「俺の夢のあれ（リオレウス）と似てねえか・・・？」

ギヤアアア！

リオレイアは二人に向かって突進してきた。

二人にはまだリオレイアなど倒せる訳もなく、ただ必死に逃げるのであった。

「ハア・・・ハア・・・怖かった」

ディフラは半泣きになっている。

「酷いよディフラ。私を置いていくなんて・・・グスッ」

こっちも半泣きである。

「ご、ごめん・・・帰ったら回復薬買ってあげるからさ・・・」

「いくつ？」

「うっ・・・」

ディフラは止まった。

何故ならまだ、買えるといってもそんなに買えないお金しかない。買ったとしても、そのあと、貧乏になってしまう。

「じゃあ・・・20個・・・」

「えっ！？そんなに!？」

〈第十七話〉 退散させよ

「本当にやるき？」

セーナは驚きながらも聞いた。

「ああ。そうじゃないとどうせまた、こいつもここに来るだろ？」

「あつ……」

セーナは一瞬納得しそうになった。

だが、セーナは首を振ってこういった。

「駄目だよ！そんなことしたらディフラが死んじゃうよ！」

セーナは半泣きでこう言った。

「だから！ここで戦わなくても後で戦うことになるし、このクエストの妨げにもなるだろ！？」

「でも……！」

「いいからつれて来い！せめてカデルだけでも！」

「……分かったよ！でも、絶対死んじゃ駄目だよ！」

「もちのろんよ！」

セーナは全力疾走で走った。

「はぁ……カデル、レイラ、どこ……！？」

……

「ん？なんか声がしなかったか？」

セーナの声になにかしら気づいたのはカデルが先だった。

「え？そう？別に聞こえなかったけど……」

「……ーナ……カデ……」

かすかにセーナの声がする。
結構近い距離にいるようだ。

と、一方これで倒せるの？

聞きたくなるぐらいの装備で立ち向かっているディフラはといつと

・

「がはっ・・・！なんか体が痺れる・・・」

ディフラはリオレイアの「サマーソルト」をくらってしまったらしい。

「くっ・・・まだかよ・・・セーナ！！！」

と、言いながらも懸命にリオレイアの攻撃を避ける。

ギヤアアギヤアア！！！！

怒りながらリオレイアは突進してくる。

「うおっ！！・・・アブネーな・・・」

「でも、攻撃するぜ！」

ディフラは自分の中では自慢のポーンブレイド改を縦に振り下ろした。

ガキン！

ディフラのポーンブレイド改はリオレイアの背中の中身の甲殻に当たったものの、身体には入っていない。

「なっ・・・くそ！」

ディフラは今度は横に振った。

顔にポーンブレイド改が刺さる！

グギヤギヤギヤ！

リオレイアの右目が落ちる！

「おえっ……！気味悪いなもう……」

と、そんなことを言っている。左目だけのリオレイアが尻尾をデ
イフラめがけて振ってきた。

「うわああああ！！！」

デイフラはものすごい声で奇声……いや、叫んだ！

ガチン！

デイフラは閉じていた目を開けた。

すると、目の前に居たのはカデルだった。

それで、リオレイアの尻尾に軽く刺さっている。

「だ……大丈夫か？デイフラ。」

その瞬間にリオレイアはまだ尻尾を振り回す！

そして、尻尾がカデルの横腹に当たる。

ミシツ……！

肋骨の折れる音がした……

そう、カデルの肋骨が1本折れたのである。

「ぐあああ！」

「カデル！」

レイラは急いでカデルの元に駆け寄った。

「だ、大丈夫だ……はっ！？」

カデルは気づいた。

尻尾がまた振りかかってきている！

ザシュツ！

その音とともに、リオレイアの尻尾はちぎれた！
ものすごい血しぶきをあげて。

ギャギャギャ！

リオレイアは前に勢いで跳んだ。

その瞬間に矢が飛んできた！

その矢は見事にリオレイアの左目に直撃！

「よし！これであいつは盲目状態だ！一気に仕掛けるぜ！」

「うん！」

「OK！」

「俺は休むよ……」

「うおおおお！」

「はああああ！」

「ふっ……！」

ディフラはこのまま一気に斬りかかった！

レイラは力を溜めてディフラの後に続く感じた。

セーナはものすごく弓の弦を引き伸ばして矢の勢いをあげる。最後

の止めだ。

「だあ！」

ディフラがリオレイアの翼を斬りつける！

ギャア！

リオレイアは少し叫んだ。

その後、レイラが殴りこむ！

ドコッ！

グギャ！

リオレイアは吐血をしながら倒れこむ！

その後にとどめの矢がリオレイアの腹に当たる・・・！

ように見えたが、その瞬間にリオレイアは傷がついた翼で飛んだ。

「逃がさない！」

セーナは力いっぱい弦を引いた。

だが・・・！

「やめる！」

デイフラはセーナの手を掴んだ。

「離して！」

「だめだ！これでいいんだ！もし、このままあいつが落ちて来て勝算があるのか！？俺は無いと思う。なぜならここには怪我人も居るんだ！そういう奴のことも考える！」

デイフラはいつになく恐ろしい声で言った。

他の二人は凍りついている。

「ご・・・ごめん・・・」

セーナは半泣きにもなりながらも、謝った。

そうこうしているうちにリオレイアはどこか遠くへ行っていった。

「ふう・・・じゃああとちょっとランゴスタ狩ってから帰るか。」

「・・・ああ・・・」

デイフラは目を見せようとせず下を向いて言った。

(デイフラ・・・さっきの言い過ぎだって分かってるな・・・ハア・

・・・つくづく馬鹿なやつだ・・・)

カデルは呆れている。

「じゃあ、また後で！」

レイラが元気良く言った。

だが、いつもはそのまま、ああ。とか、おう！とかが聞こえるはずなのに・・・

「・・・ああ。行こう・・・」

「おう・・・」

男組はものすごく落ち込んでいる。

勿論、セーナもだが。

「うん・・・行こ・・・」

(ああ～～もう～～みんな暗いな～～)

こうして不安も残しつつ、ランゴスタ狩りを再開した。

第十八話に続く～

〈第十八話〉 一人は未だ怪我をしている

「……」

「……ディフ……」

セーナは少し声をかけようとした。だが、すぐに止めた。

「なんだ……？セーナ……」

だが、ディフラは気づいていたようだ。

セーナがディフまで言って止めたのにもかわらず。

「いや、なんでもない……」

「そうか……」

実際ディフラはこの話しかけてきたのを機会に謝ろうと思っていた。だが、「なんでもない」と言われたので落ち込んでいる。

この後暫く静かに歩きながら、どこで謝ろうか二人とも考えていた。そして、10分後……

「あ、あのさ……」「えつと……」

二人は同時に喋ってしまった。

「どうぞ……ディフラ……」

何故か敬語になるセーナ。

でも、こんな時は敬語になるのも無理はない。

「おう……」

「・・・さつき・・・は・・・ごめん・・・」

ディフラは下をすこしずつ下げて言った。

「えっ・・・？」

セーナは内心驚いている。

怒った張本人が今度は謝ってきたのだから。

「こつちの方が悪かったよ・・・カデルのことも考えてなかったし・

・・・」

「いや、俺が悪いんだ・・・」

「いいえ、私が・・・」

と、そのとき・・・

「ヒューヒュー。仲直りが早いことで・・・」

二人はその声の元に首を向けた。

「・・・カデル!？」

ディフラは丸くした。

「って・・・テメエ・・・」

ディフラは頬が赤くなる。

「まあ、いいんじゃないの?それで。それがお前らしいよ」

カデルは笑いながら言った。

「カデルってば・・・」

その後ろに居たレイラが言った。

「あんたもあんたらしいよ。カデル」

「そんなに俺のこと知らないくせに良く言っぜ。」

「カデルのこと・・・!？」

レイラは妄想劇場に入ってしまった。

暫くほうっておくことにした。

「あ、ちなみにランゴスタ。見た感じいなくなったよ。」

「は!？」

ディフラは驚いた。

さつきまで、強敵(?)と戦って、謝ろうとしたらカデル登場。
全然ランゴスタを倒していない自分が恥ずかしくなった。

「早いねえ！カデル流石！」

セーナはいつの間にかカデルの隣に居た。

(あんなに近くでディフラがずっと居たら、また倒れちゃうよ……
)

(うう……カデルにとられた……グスツ)

ディフラはセーナの気持ちは勿論分かるわけもなく、悲しんでいる。

「じゃあ、帰るか。」

「おう！」

「うん！」

「そだね！」

一行は村に帰った……

ディフラが毒になっていることを忘れて。

ポツケ村

「ほっほ。良く帰ってきたな。関心関心」

「はい。ですが、一つ気になることが……」

「ほ？なんじゃ？」

「先ほどのクエストで緑色の竜というんでしょうか……？何かそれらしきものが出現しました。」

「ほ！？なんじゃと？緑色の……」

村長は少し考えた。

そして……

「そうじゃ！そいつはリオレイアじゃ！お主らちゃんと逃げてきたんじゃろうな？」

「いや・・・」

ディフラが口を開けた。

少し、しんどいけれども頑張ったと言った。

他の仲間に心配をかけたくない様だ。

「撃退した・・・ふう・・・」

少し疲れたような、ため息をついて言った。

「はあ！？あいつ等何考えてんだ？あいつ等頭おかしくなってきたか？」

村民は驚いている。

「これが証拠だよ・・・」

ディフラはポーチから『雌火竜の逆鱗』を取り出した。

「なんか、あいつの尻尾をちぎったから、それを剥ぎ取ったらキラキラしてるものがあつたんだよ・・・これはいいなって・・・ぐっ・・・」

ディフラは一瞬取り乱すようになった。

だが、他の輩は気づいていない。

「こっ、これは・・・確かに・・・『雌火竜の逆鱗』じゃ。良くななもの手に入ったな。」

「これは偶々とれたもんですよ。」

カデルが重ねて言った。

「ほう・・・まあ、ギルドに伝えておく。じゃ、報酬じゃ。」

一行は3000Zを受け取った。

「では。」

「じゃ～ね～おばちゃん～」

「むっ！誰がおばちゃんじゃ～！」

「ではまた。」

そして、その時ディフラは話しかけることも出来ないぐらいに毒が回ってきていた。

(くっ・・・！これまでか・・・！?)

そしてそのままディフラは倒れてしまった・・・

第十九話に続く

く第十八話く 一人は未だ怪我をしている（後書き）

最近猛スピードで更新しています！

少し前までメンテナンス中でしたので・・・^^；

ですが、これからどんどん書いていくつもりなので宜しく願います！

〈第十九話〉 血清を探しに…！

（があ・・・つつ！）

デイフラはそのまま意識を失ってしまった。

「デイフラ!?」

セーナが驚いて近づく。

「どうした!? セーナ!」

続いてカデルがデイフラに駆け寄る。

「え!? なに!?!」

状況をあまり把握していないレイラも駆け寄る。

「ほっ!?! なんじゃ?」

「デイフラ! デイフラ!」

カデルがデイフラに呼びかける。

だが、デイフラは返事をしない。

「うつ・・・はあ・・・づく・・・!?!」

返事は出来ないが嘆いている。

すると、カデルがデイフラの額に手をあてる。

「アツツ! なんだ!?! この熱は!?!」

カデルは驚いた。

デイフラはリオレイアの毒で高熱を出していた。

「とにかく、家に戻るんじゃ!」

「はい!」

カデルはデイフラは担いで家に猛ダッシュで向かった。

自宅

どきっ・・・

デイフラは無造作ながらベッドに置かれた。

「おい! 大丈夫か? デイフラ!」

カデルはディフラを軽く揺すりながら言った。

「あ．．．お、おお．．．ガハツ！」

ディフラは吐血した。

結構大量に。

そのためベッドは一面紅に染まった。

「グフツ．．．！」

「おい！大丈夫じゃねえな．．．おいレイラ！村長んとこ行って、なんか無いか聞いて来い！」

「わ、分かった！」

レイラは飛び出て行った。

「しっかりとよ。ディフラ．．．グスツ」

セーナはちよつと涙ぐんでいる。

「お．．．い．．．セー．．．ナ．．．泣く．．．な．．．お前らし．．．
．．．くない．．．ぞ．．．ウゲツ．．．！」

ディフラは下手すると出血多量で死んでしまう可能性がある。

「ディフラ!？」

セーナが駆け寄る。

「大丈夫!? ねえ!？」

「静かにしろ! セーナ!」

カデルが珍しく怒った。

「．．．もう安静にしておこう．．．セーナ．．．」

「．．．うん。」

．．．

そして、吐血はなんとか治まったが、まだ高熱や全身の痛みは残っている。

「カデル!」

レイラが戻ってきた。

「どうだった？」

カデルが心配そうに聞いた。

レイラはむせながらこう言った。

「はぁ・・・ディフラの毒はリオレイアの尻尾の毒なんだって。で、その血清が今はここに無いの・・・」

「血清？」

「うん。なんでも、火山の所に生えている珍しい花なんだって」

「花。か・・・しかも、火山とはな・・・」

カデルはしばし悩んだ。

そして、

「よし！火山に行くぞ！」

「ええ！？な、なに言ってるの？ディフラはまだ寝込んでるのよ？」

「そうだよ。ディフラはどうするの？」

「ディフラはセーナが看病していてくれ。火山には俺とレイラ二人で行く。」

「・・・う・・・うう・・・」

ディフラが何かいいたそうに何か言った。

「や・・・やめる・・・俺は・・・もういい・・・か・・・ら・・・さ・・・」

「何言ってるんだ！これで助かるなら俺は行くぜ！」

「そうだよ！みずくさいんだよディフラは！」

「・・・でも・・・ぐはっ・・・」

ディフラはまだ安静にしないとイケないのを承知で今喋っている。

「大丈夫だから。じゃあ言ってくるぜ。」

「じゃあね」

「うん・・・」

セーナは心配そうに言った。

「気を・・・つけて・・・な・・・ぐはっ・・・！ぐ、ぐぶっ・・・」

そのままディフラは倒れた。

「ディフラ！」

「じゃあ、一刻を争うみたいだから急いで行ってくる！」

バン！

ドシャ！

二人はドアを破壊して出て行った。

「早く！早く！」

「分かってるよ！」

二人は村長に向かって全力疾走で走っていった。

第二十話に続く

〈第二十話〉 火山に初上陸！

「ほっ！早よおこんかあ！」

村長は怒っている。

「い・・急いできたんですが・・はあ・はあ」

息の上がつている二人を見て少し冷静になった村長はこう言った。

「早く火山へ行くんじゃ！ちなみに花の色は溶岩のような色じゃ。

形は溶岩のような形じゃ。」

「殆ど分らないじゃないですか！」

「でも、根気良く探すんじゃ！ディフラの生命がかかっておるのじ

やぞー！」

「はっ！はい！」

「じゃあ行つて来るよ！村長！」

「ほう！」

二人はダツシユで火山へ向かう船の場所まで行った。

船着場

「おう！早く乗れ！」

太った白髪のおじさんが腕を組んで呼んでいる。

「分かってますよ！」

「そうだよ！おっちゃん！」

「じゃあ出航だ！」

船は陸を離れた。

こうして誰も知らない世界。

火山が二人の前に立ちはだかる・・・！

火山

外見は灰色の地面。

奥にある、高くそびえる火山。

なにもかもが新しい。

二人はついてから口が暫く開いていた。

すると、船長から拳が頭に垂直に当たった。

ゴイン。

「いった〜」

二人は声を合わせてそう言った。

「てめえら！仲間の命かかってんじゃねえのか！？」

そういわれた瞬間、二人の眼つきは狩人の眼つきに変わった。

鋭い、何もかもを見透かしてそうな眼。

それを見た船長も驚いた。

「そ、そうだ。その顔で行って来い！」

「はい！」

「えつと、じゃあ・・・右の方がいいかな」

カデルは支給品ボックスを見ながら地形の確認をしている。

「うん。そだね」

右には、灰色の地面があつて、溶岩が冷えて固まった岩がゴロゴロしている。

一方、もう一つの左の道は洞窟になっていて、少し熱風が感じられる。

そう、左は火山に入ることになる。

暫くは地形を確認しないといけないので右に行くことを決めた。

そうしていると、支給品ボックスに見慣れない飲み物があつた。

白い、薬。

匂いを嗅いでみると、ユーカリのようなスー・スーする感じがある。

「なんかこれ、いい匂い〜」

レイラは少し気が紛れた。

さつきまで友・狩仲間の命がかかっているということだけで何もかもが終わったかのように感じた。

だが、この匂いで少し荷が軽くなった気がした。

でも、重大なことには変わりない。

眼つきはもちろん狩人の眼だ。

「ああ、それは『クーラードリンク』だ。ものすごい高温の所でもそれを飲んでりゃ何とか何ぜ。でも、暫くしたらまた熱くなってくる。あと、超高温の所はすぐに効果が切れるから気をつける。」

「どうも！」

二人は右に向かって走っていった。

すると、目の前に茶色の毛皮に身を包んだ獣。

ブルファンゴが現れた。

単体でも厄介なこのモンスター。今回は3頭居る。

「レイラ！まずは二手に分かれてそっから挟み撃ちでやるぞ！」

「分かった！」

そういうと、二人は双方にあった岩の方に向かった。

そうして、1頭のブルファンゴがカデルに気がついた。

ブルウ・・・

足で何回か地面を蹴ると、カデルに向かって一直線に走ってきた。

それを横に飛んでかわしたカデルは予め言っておいた合図を出した。そうすると、レイラは静かに頷き、ブルファンゴに向かってウォーハンマー改を頭にぶつけた。

すると、ブルファンゴは静かに崩れ落ちた・・・

ように見えたがまだ体力は残っていて、近くに居たカデルめがけて突進した。

咄嗟にカデルは盾で防御したが、力が強くて飛ばされた。

低級モンスターだからといって侮ってはいけないとカデルは思った。吹っ飛ばされたカデルはすぐに体勢を立て直して、ブルファンゴの脳天をボーンククリ改で突き刺した。

顔だけ紅く染まったブルファンゴはうなりながら倒れた。

すると、残りの2頭のブルファンゴが怒りをあらわにし、カデルめがけて突進してきた。

それを見たレイラはすぐにウォーハンマー改を振りかぶり、横に振り回した。

「はあああ！」

すると、1頭目のブルファンゴの横っ腹に当たり、2頭目のブルファンゴにブルファンゴが当たった。

ブルガアア・・・！

1頭目のブルファンゴは角が折れて、怒りが増した。
ブルウウウ・・・！！！！

眼が紅くなり、目線にはレイラしかない。

「え・・・ちよつとこれはマズいんじゃ・・・」

と、焦った瞬間。右から疾風の如くカデルがやってきた。

2頭のブルファンゴを通りすぎたかと思うと2頭のブルファンゴの頭から大量の血が出てきた。

カデルは通る一瞬に2頭のブルファンゴを斬りつけていたのだ。
ブファアアア・・・。

2頭のブルファンゴは静かに崩れ落ちた。
すると、カデルが小声で。

「俺、なにやってたんだ・・・？」

と、言った。

レイラは気づいていない。

カデルは無意識のうちに2頭のブルファンゴを斬りつけていたことを。

「カデル〜！早く行こうよ〜！」

「・・・！あ、ああ。」

カデルは暫く自分の手を見つめながら歩いた。

火山内部

「うわっ・・・暑っ・・・」

レイラは小言でこう言った。

「さっき貰ったクーラードリンクでしのごう。」

「あ、そうだったね」

二人はクーラードリンクを一气飲みした。

すると、カデルは火山内部全域に聞こえるぐらいの声でこう言った。

「マズー………!!!」

近くの鳥は逃げ、溶岩は暴れ、ガミザミが出てくる始末。

「うええ………」

カデルは半分泣いている。

「ちょっとカデル！あのカニ何？」

レイラこういう薬草系の匂いには耐性がある。

実はレイラの母はドンドルマにある道具屋の薬の材料をジャンボ村から運ぶ職に就いていた。

なので、いつも家は薬草の匂いでいっぱいだった。

「お……お前これ飲んでよくそんな冷静になれるな……。おえええ………」

「カデル！しっかりしてよ！あのカニ！」

レイラが言っているのは、さっきのカデルの悲鳴で出てきたガミザミだ。

周りには溶岩から噴出している熱風が出ている。

グギイイイ……

ガミザミは二人を見つけると凄い勢いでやってきた。

レイラはウォーハンマー改を構え、カデルはボーンククリ改をぎこちない感じで構えた。

カデルはまだ、クーラードリンクのマズさが忘れられないのだ。

グギイイイ……!!

ガミザミが腕を上げた瞬間にレイラはウォーハンマー改をガミザミの甲殻に当てた。

ベキッ！

当たると、ガミザミの甲殻に少しひびが入った。

もちろん、ウォーハンマー改ぐらいじゃガミザミには致命傷は与えられない。

そして、カデルのボーンククリ改がそのひびめがけて斬りかかる。だが、この状態だと斬りかかるといふよりは叩きつけるぐらいのレベルだ。

「うおりゃあー！」

すると、ガミザミはカデルの方を向き、鎌状の腕を横に振り回した。カデルのギアノスメイルを掻っ切る。

「あぶねっ・・・！これ食らったらひとたまりもねえぞ！？」

「カデルどいて！」

そういいながらレイラはガミザミの背後にウォーハンマー改を叩きつけた。

ひびがさつきよりも大きくなる。

少し、ガミザミの青い筋肉が見えた。

そうして、ひびをつけたレイラにガミザミは標的を変える。

その瞬間にガミザミの背中にボーンククリ改が刺さっている。

ギィィィガアアア・・・。

ガミザミはうなりながら倒れた。

そして、これから火山花探しが始まる。

第二十一話に続く

〜第二十一話〜 火山花

ガミザミを倒した二人はここから下ばかり見つめる。
火山花を見つけるためだ。

二人とも間違いない探し見つけるような眼をしている。
狩人の眼とは少しばかり違う。

「うん……。ないなあ……。」
「早くしないと」

レイラは焦るばかりで上手く探せていない。

一方カデルはレイラが話しかけても返事をしない。
親友の大切な命がかかっているのだから。
なんとしてでも見つけないと。

と、気持ちが高ぶるばかりで周りが見れてない。
だから、いつの間にか溶岩の近くに居て、

「カデル！横！」

と、言われて「……ハッ！！」となるぐらい。

真剣になりすぎて、視界が狭くなっているのだ。

「くそっ！くそっ！どこにもねえじゃねえかあああああああ！
！！」

カデルは泣きじゃくりながら地面を叩く。

それを見て焦ったレイラは「大丈夫？」の一言しかかけられない。

他に思いつかない。こんな状況になってカデルはどうしたら収まる
のかはディフラでも知らないかもしれない。

もちろん、レイラなんかが知るはずもない。

そうこうしているうちに山頂についてしまった。

カデルは少しゲツソリしている。

その時レイラが何か見つけた。

「カデル！あの溶岩なんか変な形してない？」

レイラが指差した所にはなにやら下が黒くて上が赤く花のようだ。そう、花のよう。ではなく「花」なのだ。

正真正銘の花。火山花だ。

近寄ってカデルが見てみるとカデルの顔がみるみるうちに変わっていった。

「これだ……。これだよ！レイラ！これが火山花だー！！！」
カデルは叫ぶと、レイラが近寄り頷いた。

カデルは急いでポーチに火山花を入れ、すぐにポケット村に戻ろうとした。

すると、なにやら風が舞い起こる。

二人が上を見ると、

赤い皮膚に、赤い羽根。

全ての部位が赤い。

飛竜のような飛竜じゃないような。

だが、カデルはそれを見た瞬間に恐怖を感じた。

このまま、突っ立っていると「死」が待っている。

「レイラ！逃げる！死ぬぞ！」

その叫び声に反応した赤き龍。

眼は恐ろしく生気が無い。だが、恐ろしい。

そういう意味の分からない常態に陥ったカデルはパニックになった。

「は……。はやく……。逃げる……。はははははやく！」

猛ダッシュで走るカデルをレイラは追いかけた。

今は逃げるしかない。

逃げないと死ぬ。そうするとティフラも死ぬ。

すると、村の人も死ぬ。

全ての映像がカデルの頭によぎる。

カデルの眼はいつものような黒い眼ではなく。

緑色になっている。

眼はしかも開きっぱなし。

そして速い。ものすごく速い。

どどんレイラとの差が広がっていく。

「ちよつと・・・カデル・・・待ってよ・・・」

すると、レイラの目の前に赤き龍が姿を現す。

「あ・・・う・・・何・・・？これ・・・」

レイラはものすごい恐怖に陥った。

そして、後ろを向いたカデルはついに我に帰った。

その瞬間に自分ほとんどもないことをしてしまったことが分かった。

グルルウルウウウ・・・

赤い龍はレイラの動きを見て隙を見つけ次第殺すつもりだ。

それに気づいたレイラは隙を作らないように必死だ。

カデルの助けが無いと駄目だ。

だが、カデルは腰が抜けて眼が揺れている。

ガアア！！

赤い龍がレイラめがけて腕を振り下ろそうとした瞬間・・・！！

・・・レイラが目を開けると少しだけ腕から血が出ている赤い龍が居た。

その近くには何も気配が無い。

少し逃げながら辺りを見回す。

すると、下を向いたカデルの姿があった。

だが、レイラが知っているカデルではない。

眼が緑色になっている。

そして、そのカデルからは殺気しか感じ取れない。

生氣も活気も無いもない。

一つだけ殺気がある。

「どうしたの・・・？カデル？」

そう聞いてもカデルは無いも返事しない。

そのままカデルはベースキャンブに向かってダッシュした。

「あ、ちよつと待ってよ！カデル！」

レイラも後ろを気にしながら走る。

案の定赤い龍はもつと腹を立て、二人を睨む。

火山の洞窟から出れば赤い龍はそこからは追いかけれない。

我に帰ったカデルはそれを狙ってひたすら走る。

この火花だけでも届けたい。

頭にあるのはデイフラだけ。

可哀想だが、レイラなんざどこにも無い。

だが、赤い龍はとてつもない速さで追いかけてくる。

しかも、その赤い龍の周りになにやら赤い粉・・・？風で舞い上がっているが火の粉のようなものが舞っている。

そして、その粉は周りのものを全て焼き尽くす。

高温なのは確実だ。

背筋がゾツとしたが、そんな事をしている場合じゃない。

そう思ったレイラはカデルの後を追う。

グウウウアアア・・・

恐ろしい声を上げながら赤い龍は飛んできた。

そして、カデルの上に落ちた。

ギリギリ気づいたカデルはしゃがんで間一髪で避けた。

だが、洞窟の出口は塞がれた。

赤い龍もそれがねらいだったのだろう。

赤い龍はうなりながらカデルに喰らいつこうとした。

その瞬間にカデルの目の前が眩しくなった。

咄嗟にカデルは眼を覆うとなにやら悲鳴が聞こえた。

グギャギャギャアア！！

赤い龍の悲鳴だ。

「な・・・何だ？」

「さあ早く！逃げて！」

レイラが叫ぶと、カデルは赤い龍を避けながら洞窟の出口を目指す。

だが、赤い龍も眼を覆っていたためすぐに眼が直った。

出口に向かってジャンプするカデル。

それに気づいて火を吐こうとする赤い龍。

ウォーハンマー改で赤い龍の後ろを攻撃しようとするレイラ。

レイラの攻撃に気づいた赤い龍は後ろを向く。

その瞬間にカデルは外に出れた。

そして、カデルは船長に

「おっちゃん！これを持ってて！」

と、必死な形相で火花を渡す。

「お、おう・・・！これをよく見つけられたな・・・。」

「じゃ！」

と、言ったカデルは再び火山の洞窟に入る。

レイラを救う為に。カデルは大事なことになるかと絶対に成し遂げる、

正義感の強い男だ。

そのため、レイラを見捨てて逃げるなんてありえない。

その時レイラは赤い龍に襲われそうになっていた。

「きゃあああ！！！」

「くっそ！！！」

カデルが諦めかけた時・・・！！

第二十二話に続く

〈第二十一話〉 火山花（後書き）

最近モンハンの小説を読んで小説の勉強中です。

ですので、暫くしたらもう少しはましになると思います・・・^^^ ;
ですので、未永くこの小説を宜しくお願いします。m | | m

〈第二十二話〉 火山からの脱出

眼を閉じたカデルは少しづつ眼を開けた。

カデルの頭に過ぎるのはレイラの「死」。それしか頭に無かった。不安がいつぱいの状態で少しづつ眼を開ける。

すると、赤い龍は小さく悲鳴を上げている。

グギヤアア・・・

よく見ると赤い龍の口に一本の矢が刺さっている。

「速く逃げて！」

二人は逃げた。火山の洞窟から逃げた。

二人は何とか脱出できた。

後ろから人がやってくる。

「大丈夫？カデル。レイラ。」

その声には聞き覚えがあった。

見るとそれはセーナだった。

「お、お前・・・？セーナ・・・？」

「ディフラは？」

二人は驚きを隠せない。セーナはディフラの看病をしているはずなのだから。

「てか、どうやってここに？」

「トレニヤーに連れて来てもらった。」

トレニヤーとはポツケ農場にいるアイルーだ。

ヘルメットを着けて探険家！みたいな格好をしている。

セーナはあのポツケ農場でディフラと喋った夜にトレニヤーにも出会っていた。

それからの付き合いだ。

トレニヤーは身体能力が高いので人を船に乗せて火山ぐらいまでの距離なら行けるのだ。

おまけに小回りが利くので狭いところも行ける。

なので速く移動ができるのだ。

「ディフラはポケ村の人に看病を頼んでるわ。最初は断られたけど……。」

「そうだったのか……。」

「おい！お前ら！速く出航しようぜ！」
船長が声をかける。

「は、はい！」

そうして、船が出航した。

「私はトレニヤーと行くわ。」

セーナはトレニヤーの船に乗る。

「任せるニヤ！」

こうして、一行は火山花を手に、火山からはなれようとした。

そのとき……！

赤い龍が火山の上から飛んできた。

「……？……あつ……！皆上みて！」

レイラのその掛け声で三人は上を見る。

「嘘……マジかよ……。」

カデルも少しひるむ。

よほど、自分の領域に入られたくないのだろう。

セーナはすぐに戦闘態勢に入る。

矢を手に、弓を引く。

「やあ！」

セーナの声と共に矢が赤い龍に一直線に飛ぶ。

だが、強靱な皮膚。鋼鉄のような羽。鋭い爪。全てが三人のハンターよりも勝っている。

案の定、矢は皮膚に当たるも跳ね返る。赤い龍にしては紙屑が当たった程度だろう。

その時赤い龍の口が赤く光る。

コオオオオ……。

龍は内臓に「ブレス」を吐く為の器官がある。それは、竜（龍）で

様々だ。

火炎袋、麻痺袋、色々ある。そのうちのこの龍は火炎袋、爆炎袋のような、火を扱う龍だ。

ガア！！！！

短く吼えると赤い龍の口から物凄い勢いで炎が飛んできた。

そして、顔を振り回せながら火を吐く。火は不思議に赤い龍の口の周りを纏っているのだ。

「ありや……。マズいな……。」

カデルが絶望的な声で言う。船が激しく揺れた。

「うわっ！」

「おっ！」

横のセーナが乗っているトレニヤーの船はもうない。少し前を見ると「ニヤニヤニヤニヤ！」と必死にトレニヤーが漕いでいる。セーナは後ろを向いて弓を構えている。

と、船長が「逃げるぞ！」と言ってこの赤い龍から逃げることにした。

しばらくすると赤い龍も自分の領域テリトリーが心配になったのか諦めて火山に帰っていた……。

「ふう……。怖かった。」

と、レイラはカデルに泣き、抱きつく。

普段ならすぐに「や、やめる！」と言って退けられるが、今回はカデルが上の空になっている。抵抗などはしない。だが、レイラは抵抗してもらわないとなんか変な感覚になってしまった。

このときカデルはこう思っていた。

（俺達はあんな奴らと闘うのか……。？無理だ……。）

というのも、レイラを助けたのは実際はセーナだ。カデルはあの時頭にデイフラの事しか頭に無かった。もし、セーナが居なかったら……。

と、いう考えを頭の中でグルグル回している。

それでカデルは上の空になっているのだ。

「カデル？どうしたの？」

レイラが心配になって聞く。だが、返事が来ない。そして、このまま船は静かにポツケ村に移動したのだった……。

ポツケ村

船を下りてもカデルは火山花を大事に持っているだけで、眼は緑。どこか変なのにレイラも気が付いてきた。カデルの眼に。

（カデルってずっと瞬きしてないような……。気のせいかなあ……。）

横からしばらく歩くと村長のところにいつの間にか着いた。

「ほう……。よう帰ってきた。ほれ早く行ってやれ。」

村長は優しくそういうと焚き火にあたって暖まっている。

「はい！」

レイラが返事をする。

「ほら！カデル行くよ！」

「……。！？あ、ああ……。」

眼の色が緑から黒に戻った。

ポツケ農場からセーナも戻ってきた。

「セーナも今戻ってきたのね？」

「ええ。ちよつと時間がかかったかしら？」

「そんなことはないわ。行きましょ。」

レイラはセーナの清純な喋り方を軽くマネてしまった。まあ、移ったというべきか……。

ドアが開き、中の村民が三人のほうを向く。

「まあ！今お帰りになったの？」

この女性もセーナのような喋り方だ。

「ええ。早く火山花を。」

カデルは頷くと火山花の花の部分をちぎり、ディフラの口の中に入れた。

デイフラは無意識に花を噛む。

「う・・・うあ・・・おえ・・・」

少し吐き気味なデイフラを見て全員後ろに少し下がる。

「マズ・・・うあ・・・ゲボマズ・・・」

これが10分続いた。全員少しずつ後ろに下がって行った。

10分後

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・ううおえ・・・」

ビクツ！と全員一気に下がる。村民は帰る。

「はあ・・・はあ・・・死ぬかと思った・・・」

デイフラの復活しての第一声

「死ぬかと思った」

「大丈夫？デイフラ？」

セーナが優しく問う。すると、デイフラが

「大丈夫といえば大丈夫だが大丈夫といわなかったら大丈夫じゃな

いよ・・・。マズすぎだろ・・・あれ・・・」

こういう風にしっかり喋れることを確認した三人は顔を見合って笑った。

「な、何笑ってんだよ！」

デイフラはベッドから起き、ツッコむ。

この後しばらくは家から笑いが絶えなかった。

この声を聞いた村長は微かに微笑んだ。

第二十三話に続く

〜第二十三話〜 古龍種

あの後四人はあの赤い龍のことを村長に伝えた。

村長はそんな龍は居ない。と、言うのだが、三人は実際見ている。だが、村長は信じてくれない。

「ったく、あのバアさん信じねえぞ〜」

元気いっぱいディフラが愚痴をこぼす。すると、呼応するようにカデルが

「本当。僕達はこの眼で見えてきたのに〜」

「カデルつてばあの時なんかおかしかったのに？」

レイラが意地悪そうに聞く。カデルは後ろに下がり、たじろぐ。

「えっ、あつ・・・いやその・・・。」

「まあ、いいんじゃないの？今度は物知りなジジイが居るってババアが言つてたからそこ行こうぜ」

ディフラが今までの話をどうでもいいように流す。事実上、ディフラは火山には行っていない。だからその話で盛り上がられるとつまらないのだ。

「ほう。ワシになにか用かな？」

四人の間に突然人が現れた。四人はその人物を中心に横に逃げる。

そして、突然現れた人は小さく、顔がヨボヨボだ。身長は小学生よりも小さいくらいだ。

四人は突然声かして焦ったが視界にその人が入らなかったため、そのまま家に歩き出した。

「なんだ・・・。誰も居ないじゃねえか・・・。」

すると、ディフラの背中に怒りの鉄槌が。

ドゴッ！！！

「ウゴベツ！！！」

ディフラは体を反らしてこけた。

「ここにジェントルマンが居るじゃろうが！」

じいさんは自分自身をジェントルマンと名乗る。単なる自己主張だろつとデイフラ以外の人間は思った。

デイフラはワザとらしく上を見てキョロキョロする。

「あゝれゝ？声はするのになゝ？おかしくなゝ」

この意地悪な光景を見て三人は平和を再確認し、笑った。

にやつくデイフラを見てますます怒ったじいさんはもう一度怒りの鉄槌を下す。

+ @でカデルにもだ。

ドウゴウ！

ダゴツ！

今度はじいさんは物凄く強くした。

「ウアゲツ！」

「アタツ！」

二人は奇声を上げ、こける。レイラとセーナは各々の大事な人（？）に向かう。

「大丈夫？」

レイラとセーナは声を八もらせて言う。

「痛てててて・・・。なんだよあのジジィ」

デイフラはキツと眼を開くと赤く染め、刺青がうっすら光る。

だが、刺青が急に痛み出す。

「アウチ！」

デイフラは左肩を抑える。この時セーナは何が起こったかは分からなかった。

一方カデルはすぐに立ち上がり、じいさんに向かって歩いていった。

「あつ！待てよカデル！」

慌ててデイフラも立ち上がる。セーナもつられて立ち上がる。

「デイフラ待つてよゝ！」

するとじいさんはセーナ向かって飛び掛ってきた。

咄嗟にデイフラは後ろに下がりポーンブレイド改の腹で叩く。

ゴイン！

「グワツチ！なななな何をするか！」

起こったじいさんはディフラを睨む。だが、ディフラは赤い眼で恐ろしく睨む。

「ご、ごめちよ〜……。ははは〜……。」

後ろに下がるじいさんを持ち上げたディフラはこう言った。

「なにやっつてんだ！？年頃の女にやることじゃねえだろがぁ！あぁ？文句あつか？」

後ろに居たレイラとカデルは苦笑い。カデルはディフラを見て「はぁ」と重いため息をつく。

持ち上げて、チンピラみたいにしてるディフラをセーナは止める。

「ディフラ！ちょっと待ってよ。このおじいさんも謝ってるしさ。」

「ほう……。ワシを心配してくれるとは優しいお譲ちゃんじゃのう。ほっほっほ」

だが、まだ後ろには殺気が……。

「ジジイ〜〜〜〜！！！！」

「ひい！」

「ほっほっほじゃねえんだよ！こっちは真剣に聞こうとしてたんだよ！」

こういう抗議をよそにじいさんはセーナにまた飛び掛っていた。

「あのジジイ……！」

だが、セーナもハンターだ。それにガンナーなので動きやすい装備だ。それを活かしてセーナはヒラリとじいさんの攻撃（？）をかわした。後ろではディフラがポーンブレイド改をふりおろそうとするところだった……。もう少し遅ければじいさんは真っ二つになっただろう……。背筋が凍るように冷たくはなったがじいさんは立ち上がる。

と、レイラがじいさんに向かってこう言う。

「ねえ？私は？おじいさん？」

「お前は嫌いじゃ」

単刀直入に言われたレイラとカデルはじいさんの背後に入って武器を構える。そして声を低くそろえて、

「今やっとディフラの気持ちがかかったよ……。セーナは偉いなあ……。怒らないんだもの……。」

カデルの眼が薄くだが、緑に光る。

「待て……。」

ディフラがボーンブレイド改を横にして通行を妨げる。すると、ディフラは予想外の発言をした。

「俺もあのジジイを殺る。俺もだいぶムカついてんだ……。ハハハ……。」

不気味に微笑むディフラを見てセーナがディフラを止める。

少し上目遣いでディフラを見つめ、

「あのおじいさんにお話があるんでしょ？ だったらちゃんと聞かなきゃ。」

こう言われると何も言えない。悔しながらもボーンブレイド改を直す。

「っち……。！」

そう舌打ちしたのは村長だった……。

横で村民がビクついている。

(村長怖ええ……。)

その後、ディフラ達は物知りジジイに事情を話した。

「ふうむ……。いくら物知りジジいさんだとしても、それは知らんのか……。」

はあ、と諦めかけた時物知りジジイがこう言った。

「でも、ある程度は特定できる。恐らくは古龍種じゃろつな。」

「こりゆつしゆ？」

四人が声をそろえて言う。

「うむ。古龍種とは飛竜よりも遥かに高い攻撃力守備力瞬発力。全て飛竜に勝っておるといわれておる。だが、飛竜種にも例外は居る

ようじゃがな。」

「んで？んで んで んで んで んで？」

デイフラが興奮しながら話をもっと聞くために促す。

「ほっほ。勉強熱心じゃな。古龍種の龍は飛竜種と全く違う所がある。お主らもリオレイアを見たのじゃから分かるはずじゃ。」

しばらく四人は悩み、カデルが答えを弾き出した。

「そうか！足の数だ！」

記憶力の良いカデルは前回のリオレイアとの戦闘を走馬灯のように思い浮かべていた。

「ほっほ。そうじゃ。足の数じゃ。飛竜種は二本に羽が付いておるじやろう？古龍種はどうじゃった？」

デイフラ以外が考えると珍しく今度はレイラが答えた。

「四本？だっただけ？」

「そうじゃ。不細工なりにはやるのう。ほっほ。」

「不・細・工？」

カデルがレイラを止めながら話を聞く。

「古龍種は四本足がある。だから、早く移動できる。色々と効率がいいんじゃない。だが、古龍種はまだまだ分かっていない部分が沢山ある。まだ、科学的に立証されていないモンスターは基本的に古龍種に分類されとるよ。」

「へえ〜」と、適当に聞くデイフラ。はっきり言って実物を見ていないので実感が沸かない。未知のモンスターに会えるのはとても凄いことだ。だが、デイフラは出会っていない。だから、どこか胸に穴が開いた感じがするのだ。

夜になり、辺りはすっかり暗闇に包まれた。フクロウの声がつつすら聞こえたりもする。そこでポツケ農場の木の横に今度は違う影が見えた。

デイフラだ。病気から復活したが、腕がやはり少し鈍っている。しかも、さっき、我を忘れそうになった時肩が痛み出したのは何故だ

ろう？

ディフラはポーンブレイド改で素振りをしながら考える。

その時自宅ではカデルはなにやら変だった……。

魔されている。だが、一番気になるのはカデルの足に何やら緑の紋章が……。

第二十四話に続く

〜第二十四話〜 試練・再試練

「??？」

「汝、何を望む……。」

「？」

そう、疑問マークを浮かべたのはカデルだ。

「あつれ〜？俺さっきまで寝てただけだな〜」

「汝、何を望む……。」

「へ？」

「汝、今何が起こっているのか把握しておらぬな……。」

「あ、はい？」

カデルが疑問に思うのも無理はない。周りは本で見たような宇宙空間的な非科学的な場所だったのだ。

「ここは汝の潜在能力の部屋だ。最近汝の近くでも同様のことが起きていたのだが気づかなかったか？」

そう聞かれると、デイフラがなんか変だったような……。と、考ええるも結論までには至らない。

「ええ。分かりませんが……。」

「ここで、汝には試練を受けてもらう。汝の仲間は剛。汝は速の力だ。」

「即？側？測？どれ？」

「汝は火山の時に我を忘れていたな？」

「あ、はい……。」

「汝はあの時疾風の如く矢のように走っていたのだ。」

「はあ……。」

カデルはあの時どうなっていたのか分からない。ただ言えるのは、レイラが「速い」と、言っていた事が頭に残っている。

「あ、はあ……？」

「では、成功を祈る。」

「え！？ちよつと！！！」

ポツケ農場

素振りの休憩中にディフラは自分の肩にある刺青を見た。炎のような形をした刺青。これがなんの役に立つのかは分からない。だが、さつき起きたあの痛みが気になる。赤く染まっている訳でもなく、正常のままだ。

「あの痛みはなんだったんだ？」
と、考えていると後ろから、声が。

「どうしたのディフラ？」

「ダッ！？」

「だ？」

後ろに居たのはセーナだった。

「何だセーナかよ……。びっくりしたよ……」

「そ、そう？何か音がしたから……。ね？」

「そうだったのか……。なるべく音を立てないようにしてたんだけどな……」

「私もディフラと一緒にハンターよ？音には敏感なの。フフッ。」
優しく笑うセーナを見てディフラは微笑む。幸せのひとときを大切に過ごすために。

「あ、そういえばカデルがさつき魔されてたんだ。びっくりしたよ」。また、変な夢見てるのかな？」

「変な夢……？」

ディフラは自分の刺青を見ながら黙った……。

「ディフラ？」

ディフラはカデルにも自分の身に起きたことが起きているような気がしてたまらなかった。

タツとディフラは立ち上がり、セーナに「少し一人にしてくれ」と、言ってセーナを退散させた。だが、気になったセーナはポポの横で見ていた。

ピタツと止まったデイフラは刺青を抑えながら、さっきのじいさんの事を思い出し、腹立てた。デイフラの考えは、今の状態では自分ではコントロールできず、怒りの感情がこみ上げて来たときのみ、刺青の効果が発生すると考えた。だから、デイフラはその刺青の力を自分の物にしようを考えたのだ。だが、その考えはあながち不正解ではなかった。刺青が真紅に光だす。ニヤツとしたデイフラは力を込める。

「はああああああああああ！！！！」

すると、デイフラの眼がこれまた真紅になり、気を失った。すぐにセーナはデイフラに駆け寄り、呼びかける。

「デイフラ！？デイフラってば！しっかりしてよ！」

デイフラの潜在能力の部屋

「久しぶりだな・・・。」

「ああ。こうなってたのか」

「む？これに全くどうじないか・・・。フツ。またお前は強くなっただんだな。」

「当たり前だ！」

ガッツポーズをするデイフラをシカトして、剛の神はこう言った。

「いま、速の神がお前の仲間の潜在能力を引き出している。こうも、潜在能力が秘められている、人間が揃ったのは初めてだ。フハハ！」

「フハハって・・・。まあ、良い。俺にも何か用があるんだろ？」

「まあな。お前はロクに剛の力を使えてはいない。お前は馬鹿だからな・・・。」

その言葉にカチンときたデイフラは反論した。

「うっせえ！俺は馬鹿じゃねえ！」

ポツケ農場でも、寝言のように馬鹿じゃねえ！だけが木霊する。セーナは驚きつつも木の横で添い寝をしている。このような機会は次は無いと考えたために。

「馬鹿だ。」

「馬鹿じゃねえ！」

「馬鹿だ。」

「馬鹿じゃねえ！」

「馬鹿だ。」

「馬鹿じゃねえ！」

「馬鹿だ。」

「馬鹿じゃねえ！」

「馬鹿だ。」

「馬鹿じゃねえ！」

……。

これが延々と繰り返された。

疲れたディフラは諦めて、

「もういい……。もっかい試練を受けないといけないんだろ？多分……。」

「ものわかりがよくなったじゃないか。馬鹿なりにはな。」

「だ・か・ら〜！馬・鹿・じ・ゃ・な・い！！！！！」

その瞬間に剛の神はシカトし、ディフラを穴に落とす。

「……！つて、テメエ！後で覚えとけよ〜！！！！！」

と、言いながら落ちていく……。

その時剛の神は、

「今度こそはちゃんとやってくれよな……。全く……。」

と、呟くのだった……。

第二十五話に続く

〜第二十五話〜 二人の試練は飛竜!?

カデルの試練

ダン!と落ちたカデルは尻をなでながら立ち上がる。

「つて〜!つたく。ここはどこだ?」

見渡す限り、なにも無い。あるのは道が一本通ってる。

「進むのか・・・?」

そして、自分を信じながら歩き始めた。しばらくすると一本の光の筋がカデルの目につき刺さる。

「ウワツ!」

目を覆い、前を見えなくさせ、そのまま歩き出す・・・。

ゴオオオオオオオオオオオオ!!!

「!!!!!!???」

一瞬パニックになったカデルはすぐに体制を立て直し、目の前を見る。

そこに居たのは、岩のような鎧。いや、鎧のような岩・・・?

分からない。だが、それは溶岩の中で密かに獲物を待っていた。

その時、カデルが目に入った。ここは火山。暑さがハンパじゃない。だが、そいつは平然とカデルの方向に体の向きを変え、首を上に向けて、下に下ろそうとした。

その時カデルは一瞬で危険を察知し、横転して、避けようとする。

バーーーーーー!!!!!!

それは何かを吐き出した。だが、吐いたとは全く別のものだった。なにかが伸びてきたと、いった感じだ。

それは熱線だった。そして、その熱線は見えるぐらい熱い。近くまでしか避けられなかったカデルは当然熱いはずだった。だが、熱くは無く、もの凄く冷たかった。腕が千切れるほどに。左の腕がやられた。左腕は自由が利かない。

「クソッ！」

その熱線を吐いたのは鎧竜ことグラビモス。ポツケ村では出現は一切報告されていなかった。事実。カデルたちは火山で赤い龍と遭遇している。こんな奴は居るはずが無い。そう確信したカデルは少しホツとした。だが、安全になったのではない。グラビモスは一気に自分の足を鈍いバネのように走り出す。

ドスン。と重い音を奏でながらグラビモスは確実にカデルに向かって来る。

こんな巨体がカデルの体に当たれば内臓が破裂し、中枢神経がやられ、脳が潰されて、死ぬ。何もかも潰されて死ぬ。だが、カデルはひるまずにボーンククリ改を取り出そうとした。だが、腕には無い。どこにも無い。

「あれ!？」

確かにこの世界に入って何か腕に違和感があった。だが、気にはならなかった。それが失敗だった。だが、後悔している時間はない。カデルは安全な場所に逃げ込んだ。作戦を練るために。

デイフラの試練

「ふう・・・」

デイフラが辿り着いたのはまた森丘だった。だが、今回は背中に武器がある。

すると、どこからともなく剛の神の声が聞こえてきてこう言った。

「汝は馬鹿だから少し難易度は低くして置いた。だが、少し上がってる」

「どつちだよ!？」

ツツコミを剛の神は無視し、スツと消えた。声だけ。

「つたく〜今回はリオレウスじゃないのか・・・？」

そうデイフラが思うのも無理も無い。前回は試練が開始直後に目の前にリオレウスが居たのだから。

そうして木が生い茂っている一直線に伸びた道を歩いていたディフ

ラはあるものを発見した。それはリオレウスではない。だが、形はリオレウスそのものだ。リオレイアでもない。

「あ……ありやなんだ……？」

そういつた直後に左肩が痛み出した。左肩の刺青が蒼く煌々と光っている。

「グッ……！」

そのちよつと声だけでも自然では脅威だ。特に飛竜は音に敏感だ。グルウ……？

何かに気づいたそれは雄叫びを上げた。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

大きく低く、その声は道に響いた。

咄嗟に耳を塞ぐ。だが、それは過ちだった。そいつはその行動を狙っていたのだ。

ギヤアギヤアと言いながら走ってくる。慌ててあたりを見回すと、横にしゃがめば何とか入れる場所があった。すぐにそこに飛び込むと、穴にはその奥にでっかく穴が開いていた。そこではディフラが立っても、それに上に誰かが乗っても天井には届かない位だ。

そこで穴をのぞく。すると、そいつはあの穴に向かって火を吐いてきた！

「グワツ！」

咄嗟にポーンブレイド改を盾にした。だが、振動は計り知れない。ディフラの腕は痺れて動かす事は困難だった。

「くそっ！」

そう。この穴に入るのはいつは計算済みだった。飛竜はかなり賢いのがこれでディフラの頭に入った。

「どうする……？」

その時ピンときた。あいつはこっちを見ている。ならば！

と、咄嗟にポーンブレイド改を持ち、回し斬りのフォームに入った。だが、そのままポーンブレイド改は飛んでいった。

ポーンブレイド改は真っすぐそいつに向かって行った！

ザン！！！！

ポーンブレイド改はそいつの眼に入った。

グギャギャギャギャギャギャギャ！！！！

パニックに陥ったそいつは後ろに下がる。

その瞬間にディフラは前転し、そいつの首元を歩き、ポーンブレイド改はそいつの顔面から引き抜く、すると、目玉が右目から飛び出た。

「うわっ！」

ポーンブレイド改を振り回し、それを落とす、斬りかかろうとした。だが、ポーンブレイド改は予想以上に脆く、すぐに壊れた。

「なっ……！」

ポーンブレイド改は火に当たり、顔面を貫いた。その分、切れ味が格段に下がってしまったのだ。

第二十七話に続く

〜第二十六話〜 武器

ディフラは驚きつつも、すぐに後ろに下がり、剥ぎ取りよしのナイフを取り出した。

「こんなんでこんな奴を倒せるかつてのは後回しで、まず、こいつからの攻撃をなんとかしなくちゃな〜」

ニヤつきながら、こんな奴と睨み合っている。

「ん？」

ディフラは気づいた。こいつはリオレウスだ。だが、根本的に違うところが一つあった。

それは体全身が蒼い。紺色ともいうべき、闇の蒼だった。蒼火竜と言われるものだ。もちろんだが、ディフラはそんなこと全くの無知だ。

「前回の飛竜ちゃんとはちがうじゃないの〜。どしたの？」

その挑発に乗ったかのように蒼火竜は吼えた。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

その瞬間にディフラは蒼火竜の頭をナイフで小突き、上を飛び越えて走っていった。

「・・・？あり？俺ってこんなに飛べたっけ？」

そんなこと気にしている場合じゃない。早く逃げないと。

なんとか、蒼火竜の見えない、アプケロスが沢山生息している所に行くと、剛の神の声が聞こえた。

「お前も大分やるようになって来たな・・・フッ」

「なにがだ？」

「力を大分使えるようになったってことだよ」

「どこで？」

「足の力が格段に上がっているだろ？剛と言っても沢山ある。足。

腕。色々な」

「その俺はまだ足だけか？」

「ああ。だが、それだけでも十分な成長だ。今回この位で……」
ディフラは最後まで言わせずにこう言った。

「まだだ！まだ！絶対この試練で全部強くなってやる！腕も！心も！顔も！」

「顔ってどうなんだ……？」

「いいじゃん！」

「じゃ！頑張るってことで！」

空に手を振ると声は少しずつ無くなって行った……。

その後、タイミング良く蒼火竜がやって来た。

「ありやま……」

頭を掻きながら、まいった顔をしながらナイフを取り出す。

その時剛の神が追伸を言った。

「そうそう。この森丘のどこかに剣がある。それはお前の一番あった武器だ。頑張って探してみるんだな。ヒントは水だ」

「水……？」

「ま。せいぜい頑張れよ」

そういうとまた声は消えた。

「……ということ……？」

ディフラは馬鹿なりに思考を張り巡らした。最終的には逃げる。という結論に至ったのだが……。

「逃げる！」

近くにあった石ころを持つと、蒼火竜の上を通り過ぎ、落ちた。

コッソリ！

その音に反応した蒼火竜を見て、ディフラは走り出した。

そして、こんどは草の多いほうに走っていった。

今は水を探さないといけない。だが、それは案外簡単に見つかった。ディフラが逃げ込んだのは前に穴を見つけた池がある所だった。そ

この風景はある程度覚えていた。

「ビンゴだな……ヘッ」

どんなもんだいと言わんばかりに鼻を鳴らす。

だが、お目当てのディフラに合った武器とやらは無かった。

「・・・あれ？どこだ・・・？」

キョロキョロするディフラは見つけた。奥に水で満ちた道を。

く第二十六話く 武器（後書き）

かなり短くなってしまいました^^；
ですが、ここ位でキリがいいかなと・・・。

「えつと確かここに・・・!?」

キャンプには鎧竜が居た。普段はここには来れない。もちろん大きな問題だが。キャンプが作られるのはそこが安全だからだ。これではキャンプとは言えず、狩場だ。

「なぜっ・・・!」

カデルは強く地面を蹴る。その音で鎧竜が反応する。

「しまった・・・!」

グオオオオオオオオオオオ・・・。

その時腰に違和感が生じた。ポケットに恐る恐る手を入れてみる。

「これは・・・?」

中には「速死」と書いてある木で出来たカードがあつた。もちろん普通なら「即死」だ。だが、これは速の神が与えた試練。だが、分らない。速い・・・死・・・?速く・・・死ぬ・・・?速く・・・死ぬ・・・。

色々試行錯誤している途中に速の神から声が聞こえた。

「汝。苦戦しているようだな・・・」

「そうなんだ・・・速死ってどういう意味だ・・・?」

「では、意味を簡単に説明しよう。速ければ・・・死なせれる・・・だ」

「その木の札を奴の腹にぶち込むのだ。だが、もちろんあのままじゃ無理だぞ」

「え?」

「あいつの腹は頑丈である。ハンパじゃないぞ。あの硬さは。それをどうするかだな」

「じゃあそれを教えてよ・・・!」

そういうとカデルの講義もむなしく、声は消えた。

その時の会話の途中に鎧竜はこつちに突進を始めていた。

「このカードを・・・力でねじ込むのかなあ・・・?」

力任せにカデルは鎧竜に突撃した。

カードも硬かつたが、鎧竜の方が断然硬い。カードは跳ね返された。

「よく見つけたな。まあ、昔の奴に比べてかなり遅いがなハハハ」
「ハハハ……」

鉄刀を背中にセットし、ディフラは飛竜でも降りたり、飛び立ったり出来るぐらいの闘える広場に向かって戻っていった。しばらくして、水が潰されるような音が聞こえてきた。

バシユバシヤバシユバシヤ……。

「何か居るのか？」

鉄刀を構えながら殺気立てる。
グオ？

蒼火竜だった。水を飲んでいたので。

「へっ！今度の武器は鉄だから十分お前を斬り刻めるぜ！」

鉄刀を構え、一気に走るディフラ。だが、構え方がおかしい。大剣の構えになっている。

もちろん太刀はガードが出来ない。こんな細い武器でガードなんかしたら太刀が木端微塵だ。

「あれ？軽っ……！」

ディフラは太刀に振られた。ほとんどディフラは太刀に振り回されている。

「くっそ……！やりにくいじゃんか……！！！」

その時蒼火竜が炎を吐いてきた。

ガアッ……！

「あぶなっ……！」

とつさにディフラは横のローリングし、炎を間一髪で避けた。

その後蒼火竜は空に飛んでいた。

そして、上で滞空している。首を上にあげ、勢い良く蒼火竜は下に振った。その時炎が落ちてきた。

直撃だ。炎の玉が直撃。全身が燃えている。

「グハッ……こんなところで負けるわけにはいかねんだよ……！！」
左肩には蒼く光る刺青が。鉄刀を太刀の構えに自然にする。

今までもディフラは大剣の構えがおかしいときがあった。それは

〜第二十七話〜 各々の試練（後書き）

うまくこの場面を終了させられません。ッ、A、ノ。ウワン
うん……。

これからどうするかなあ……何

「そろそろ終わりにしようじゃねえか・・・へへへ」

足がへ口へ口になりながらも、ディフラは強がる。

その宣戦布告を聞いて、蒼火竜は吼えた。

グオオオオオオ!!!

ある程度距離を離して、相手の攻撃を見切る。

静かな時間が過ぎていく・・・。

ヒュウウウウウウと風がディフラをなでる。

その瞬間、ディフラが鉄刀の構えに入った。

それに気づいた蒼火竜も走る。そして、ディフラも全力疾走で走る。

「うおおおおおおお!!!」

相手の速さと自分の速さを利用して、蒼火竜の足を切り落とした。

この時点でディフラはの勝利が確定した。

「へへへへへへ・・・ウエツへへへ・・・」

どこか、ディフラの様子がおかしい。

左肩が蒼く光っている。眼も蒼く光っている。

「死ね!」

の一言でディフラはなんのためらいも無く、蒼火竜の頭に鉄刀を刺した。

ブシャー!!!

そのまま、蒼火竜は眠った。

「へっへっへっへ・・・」

そうして、剛の神の声が聞こえた。

「お前・・・気をしっかり持てよ?」

「あ?」

「やっぱり・・・」

がっくりする剛の神は続けてこういった。

「いいか?この力は神の力が宿ってるんだ。下手に使えば、脳をやられるぞ?今、お前はそれの前の段階だギリギリな」

「お・・・おう・・・」

少しずつ自分の気を取り戻してきたが、眼が真っ白になっている。

そして、寝た。

「こりゃ、一試練（闘い）のやりすぎだな」
そうして、ディフラの試練は最後まで終了した。だが、まだ力はコントロール出来ていない。
だから、これからも特訓が必要だ。

カデルの試練

「あぶなっ……！」

横っ腹を少しやられただけで、なんともない。
問題はその後だ。

このカードをどうやって腹にぶち込む……？
ギユツとカードを握り締め、力を発動しようとする。

この世界は速の神が創った、火山だ。普通のポツケ村付近の火山とは似ているが、違う。

力も不慣れだが、この世界なら発動できる。

それが、試練の正解だ。ディフラのように我武者羅に行動して
いては、最初はうまく行かない。

まあ、あれも正解と言えば正解なのだが……。
足が翠に光る。

「ダアッ……！」

一気に走って、カードを持つ。

今回は武器は無いが、代わりにこれが一撃で倒せる武器だ。

「くらエエエエエエエ……！」

ポツケ村

ディフラは試練から帰ってきていた。

「う……うん……」

「ディフラ……」

早速ディフラに抱きつく、セーナ。焦るディフラ。

「ちょ．．．セーナ．．．!?」

顔を真っ赤に染めて 驚く。

「あれから、ずっとディフラたらずつと寝てたんだよ!？」

「あ．．．は．．．そ、そう．．．」

セーナは試練のことはもちろん詳しくは知らない。

「じゃあ、家に戻ろうぜ．．．」

「うん!」

ディフラは軽くフラフラになりながらも鉄刀を担ぎ、家に戻った。

「あれ?ディフラそんな武器だったっけ?」

「あ?これ?また、今度話すよ．．．今は疲れた．．．」

「あんなに寝てて?」

「いや．．．前話したあれ．．．だよ．．．」

「ああ．．．あれね〜」

そうして、二人はベッドで寝た。

カデルの試練

鎧竜は消えていた。

カデルは速の神と話をしていた。

「汝に力を与えよう．．．その後、足を見てみるがいい」

「分かった」

「では行くぞ!」

そう、速の神が言うのと地面に翠の紋章が描かれ、カデルを包んだ。

「これで、ディフラと一緒に闘える．．．!」

カッと目の前が明るくなって、起きると家のベッドに寝ていた。

足を見ると、翠の紋章が薄く光っていた。

そうして、少しずつ消えていった．．．。

朝

そうして、今日もクエストに行く。でも、今日はそんな大きなクエストは無かったので、皆でランポスを密林に退治に行った。

第二十九話に続く

〈第二十九話〉 怪鳥の出現

あの試練から一週間がたった。

ランポスを刹那にかなりの量を退治したので、全員ランポス装備になっただ。

途中、ドスランポスという強敵とも戦うことになったが、ドスギアノスとの戦闘を思い浮かべ、戦ってみると案外簡単に討伐に成功した。

「これで皆おそろいだな」

「まあね」

「自分たちで作ったって感じだよな」

前回は適当に急いで作ったので、あんまり実感が無かった。それにハンターという自覚すらあまり無かった。

だが、今回はランポスが来たら、退治しに行つて頑張った。

ランポスが居ないときは採掘をしていた。お金の方もいっぱいだ。

そんな話をしていると、運が悪いのか良いのか村民が飛び込んできた。

「おい！お前ら！イヤンクッククが密林に出てきたから、至急密林に行つてくれ！」

部屋の空気が一瞬凍りついた……。

「ハア！？」

そうだったのはデイフラだった。

「なんだって……？」

「イ・ヤ・ン・クツ・クだ！」

村民は慌てながら、そう言った。

ディフラとカデルは知らなかった。イヤンクツクを。
だが、レイラとセーナは驚いている。

「イヤンクツクだって!？」

「こんな時に来たの!？」

今は、簡単なモンスターでディフラとカデルの戦闘能力を上げようと、セーナもレイラも思っていた。

だが、これは誤算だった。

こともあるつか、イヤンクツクが出たというのだ。

「何・・・?イヤンクツクって・・・?」

「・・・」

無言。それが意味するのは恐怖。恐怖で言葉が出ないようだ。

その後、セーナがか細く口を開いた。

「イヤンクツクっていうのは、飛竜種でも一番下級のモンスターよ。

・・・でも、ディフラ達じゃ行けるかどうか・・・」

「イヤンクツクはなにか悪いのか・・・?その・・・農作物とかさ・・・?」

その時、レイラが答えた。

「ご名答・・・イヤンクツクはそこらへんの家畜とかも荒らすわ・・・最近では居なくなってきたんだけど・・・」

その時、ディフラが鉄刀を担ぎ、ジャックに飯を作るように指示した。

「了解ニヤ!急ピッチで作るニヤ!」

ジャックはアイルキッチンに入り、急いで料理を作る。

「ディフラなにやってんの・・・?」

「決まってるだろ!そいつをブツ倒しに行くんだよ!」

驚いたカデルがディフラの肩をつかみ怒鳴る

「おい!何言ってるんだ!?お前死ぬ気か・・・!??」

「いや・・・違う・・・倒しに行くんだ。皆が行かなくても俺は行く」

「・・・」

「……」

「……」

三人は一瞬黙った。

セーナとレイラは武器を手取る。

「おい！二人とも！？あんだ達もか！？」

「ええ。私達も初めてだけど、行くしか無いのよ……この村を守るにはね……」

「くっ……！」

カデルも遅れて準備を始めた。

一行は急いで、猫飯を食べて、村長のところに向かった。

「お主ら……どこへ行く気じゃ？」

デイフラが答えた。

「決まっている！」

そして、全員で

「イヤンクツクを倒しに……！」

村長は呆気にとられた。

こんな奴らからそんな事が出てくるなんて……。

「ほ……ほう……お主らも言っようになったのう……」

「行くぜ！」

「ああ！」

「うん！」

「わかった！」

一向は一斉に走り出し、密林へと向かった。

密林

「まずは4つに分かれよう。デイフラはこのツタ。セーナは左。レイラは右。僕も右に行くけど、その後分かれる。」

「分かった。それで行こう」

デイフラも賛成し、一斉に自分の向かうべきところへ向かった。

クアアアア！

小さく威嚇すると、尻尾を回し始めた。

「グハツ！」

デイフラは吹っ飛ばされた。そして、セーナに当たった。

「キヤア！」

当たった衝撃で、セーナのポーチからコロっと何かが出てきた。

「何これ？」

「これは……」

つぶやくとセーナは薄く微笑んだ。

「これは音爆弾よ！これでイヤンクックを止めれるわ！」

「それは一石二鳥だな！」

「え……？」

「貸してみ！」

デイフラはセーナの音爆弾を手にとると、怪鳥の上に投げた。

当然怪鳥も驚いているが、それだけなら目の前にやるはずだ。

だが、これには馬鹿なりの考えがあった。

第三十話に続く

第三十話 怪鳥の耳

キーーーーー！

と、大きく音がなる音爆弾。デイフラはそれを想定していなかった。セーナはもちろん、耳をふさいでいたが、デイフラはそれを知らなかった。

「あーーーーー！」

「耳が・・・耳が・・・痛い・・・マジで・・・」

「大丈夫デイフラ・・・？」

だが、これでかなり役立った。

音爆弾も、ペイントボールの役割をするのだから。

その音に気づいたレイラ。

そして、カデル。

その音が人工のものであるのはカデルでも分かった。

「こっちか！」

カデルはその音にひきつけられ、怪鳥の元へ知らず知らず向かっていった・・・。

その時にはレイラは到着していた。

セーナは座っていて、デイフラの肩と眼はおかしいし、レイラにはすぐに理解できるほどの知能が無かった。

「大丈夫!？」

大きな声でレイラはウォーハンマー改を持ち、叫んだ。

すぐさま、レイラは怪鳥の腹に何発か入れた。

だが、頑丈も頑丈。そんなときでブランゴの時の様に肋骨は折れない。

かろうじて、甲殻にひびが入るだけだ。

だが、そこを何回も叩く。すると、甲殻が割れる。

そこをデイフラが鉄刀で刺す。

そのやり方をやってみるが、尻尾や突進でうまくタイミングがつかめない。

「くっそ・・・！」

そう言うと、カデルがすばやく足に翠色の紋章を着け、もの凄いスピードで走ってきた。

「カデル！」

「おう！」

カデルはボーンククリ改を手に、何回も切りつける。潰れた腹に何回も攻撃を食らわす。

セーナ以外のハンター全員は赤く染まりながらも闘う。

セーナもだいぶ楽になってきたので、戦線に復活した。

「ハアツ！」

セーナの掛け声で、矢は数本怪鳥の顔に刺さった。

グギャギャギャギャ！

その悲鳴で全員の視線が顔に行く。

怪鳥の顔は潰れ、耳も無くなっている。

下を見れば、落ちていることに気づいた。

「うわぁっ！」

デイフラは驚いて、後ろに下がるが、レイラはおじけず耳を回収した。

「これは貴重だから、もつとくわよ！」

その言葉を聴いたら、そのグロテスクな耳が輝いて見える。

「おお・・・！」

デイフラは疲れてきたので、耳を回収するほうについた。

「重っ・・・！」

ズシンと耳がデイフラの腕に乗る。

「大丈夫？持てる？」

セーナが聞く。セーナはグリードと一回イヤンクックに来てる。

その時は見ていただけだったが、その時に耳の重さは知っている。

「ああ・・・でも、やつぱは着いてきて」

「分かったわ。レイラ!」

戦闘中に突然声をかけられたレイラは驚くが、こっちを向く。

「何!？」

「いまからベースキャンプに耳を届けてくる!」

「分かった!」

そして、ディフラとセーナは良い言い方をすれば、「初めての共同作業」。

耳を急いで、ベースキャンプに届けに行った。

「あ。ディフラ。そっちはツタだけの崖だから、そっちらからは厳しいんじゃない?」

「大丈夫だつて!」

ディフラの力強い声にセーナは崖に行くことにした。

「・・・怖い?」

「ううん。大丈夫。行こうっ!」

二人は上にディフラ。下にセーナで耳を運ぶことにした。

これで、ディフラが誤って落としても、セーナが守るといふ形になる。

だが、これといったハプニングも無く、耳は納品BOXの中に納められた。

「じゃ、戻る!」

「おう!」

だが、二人が戻ったところにはピンク色の怪鳥では無く、50%は赤くなった、永遠の眠りについた怪鳥が居た。

「ハア・・・ハア・・・」

二人は怪鳥を討伐していた。

「大丈夫!？」

セーナが二人に駆け寄る。レイラはハアハア言いながらも手を出して、「大丈夫」と手で言った。

カデルも「大丈夫」と言った。
4人は船で少し休んだあと、主人を起こして出航した。

ポツケ村

「アンタ達よく帰ってきたね！」

「まあね」

得意げにディフラが言う。だが、今回ばかりはディフラの気刃斬りもあり、音爆弾の発想もあり、今回はディフラに文句を言えなかった。むしろ、言いたくなかった。

村長に報酬を貰い、4人は家に帰った。

すると、見たことあるような見たこと無いような影が……。

第三十一話に続く

〜第三十話〜 怪鳥の耳（後書き）

更新遅れました。

すみません・・・orz

やっと、イヤンクツク倒せました〜

長かったですねwww

ここまで来るのに・・・^^；

第三十一話 新しいポケケ村

「……?」

「……???」

「……????」

「……えっ?」

4人はその姿を見て、驚いた。

「なんだニヤ?」

それはジャックだった。だが、着ている物が全く違う。

「お……お前どうしたんだ?それ」

「これかニヤ?これはオトモになるためにこういう鎧を着ているニヤ!」

「……オトモ?」

「あ、もう一つマフモフ型の装備もあるニヤ」

「人の話を聞かんかい!」

「……ゴメンニヤ。つい、気が舞い上がってしまって……」

照れながらも、とても嬉しそうにするジャックを見て4人はイヤンクックとの疲れを忘れてきた。

「そつえば、料理はどうするんだ?」

「それニヤらもう来てもらってるニヤ!」

「え?」

アイルーキッチン

アイルーキッチンも少し変わっていた。

出入り口の右にダンベルや、鎧などが無造作に置かれている。

「これは……?」

「これはおいらのトレーニング用品だニヤ。これで、おいらも強くなるニヤ!」

「つて、前はギアノス程度にビビってたが、大丈夫なのか？」

「大丈夫ニヤ！頑張つてなれるニヤ！」

「本当に大丈夫かなあ・・・」

「それはそうと、新しいお仲間を紹介するニヤ！」

その声で4人はキッチンのほうに眼が向く。まさに観光ガイドの「右手に見えますのが・・・（以下略）」のように。

「よ・・・よろしくですニヤ」

照れながらも、あいさつをしたアイルーは「チビ」と言うらしい。この名前はネコバアが付けたそうだ。

「よろしくな！チビ！」

ディフラがしゃがんで、握手を求める。

「よろしくですニヤ！」

こうして、新しい仲間「チビ」も加わり、より一掃ポケ村に活気が出てきた。

翌日、4人は新しい料理を食し、密林に鉱石採掘しに行った。

この、鉱石で全員武器が変わった。

ディフラは鉄刀を強化し、鉄刀【楔】にした。

カデルはアサシンカリンガに。

レイラはウォーメイスに。

セーナは鳥幣弓一にみんなの素材を集めて作成した。

「これで、新生ディフラ討伐団だな！」

「いつの間にそんな変な名前付けたんだ？もう少し良い名前考えようよ・・・」

落ち込みながら、カデルは講義する。

「ううん」

「獵団 桜花つてのは？」

突然、セーナが議論した。あまりにも唐突にカツコイイ名前が出てきたので、5秒間ぐらい沈黙になった。

「・・・お・・・お・・・」

ディフラは眼を輝かせ、セーナを見る。

「え？何？大丈夫・・・？」

「それに決定だ！」

「うん！賛成」

レイラも賛同してくれた。

そうして、村長に何かクエストが無いか聞きに行くと、横に見知らぬアイルーが。

「ふむ。おババ殿がそういうのならば・・・」

「ううむ・・・でも、あやつらにはちと早過ぎるかの・・・？」

「ですが・・・」

「おう！村長！」

「ふお！？ふおふおふお。お主ら武器が変わったのあゝほっほっほ。」

「それで、横のアイ・・・ルーは・・・？」

確かにディフラの言うとおり、アイルーというには少し違う。

顔だけ、出ていて下には不思議な服を着ている。三角の形に服がなっている。

「ふむ。自己紹介がまだだったの。私は村での【上位】クエストを担当するものじゃよ。みなはネコートと呼ぶがな。」

「ネコートさんですか・・・？」

カデルが念を押して、聞く。

「そうじゃよ。よろしくな。しばらくはおぬしはおババ殿の方に世話になりそうじゃがな。」

ムカッと来たディフラは勢いあまって言ってしまった。

「んだと〜！？すぐに【上位】なんて行ってやるよ！へっへんだあ〜！」

口を指で広げ、舌をベロベロさせているのをネコートさんはシカトし、村長とまた話し始めた。

「お主らも今日は帰りなさい。今日はこれといって、依頼も無いからのお〜。」

「んじゃね！」

4人は2人に手を振り、家に帰った……。

「おババ殿。これは流石に……。」

「そうじゃな。これはもう少し腕利きのハンターになってからやってもらおうかの。」

そういつて、地面に置いた書類からは茶色の体をした角が赤いモンタクが……。

そんなことも知らずに、4人はぐっすり寝ていた……。

ジャックとチビは二人で寄り添って、キッチンの暖炉の近くで寝ていた……。

「むニヤむニヤ……もう食べられないニヤムフフ……」

楽しい夢を見ながら夜が明けた。

「ふう……ん？」

デイフラが起きるとアイテムボックスの所に色々素材が置いてあった。

「なんだこれ？」

そこには、マカライト鉱石、鉄鉱石、円盤石などの鉱石が置いてあった。

「なんでこんな物が……？」

すると、アイルーのような足跡が薄く見えた。

「ちよつと行つてみるか」

その足跡はポツケ農場に続いていた……。

「ん？」

そこには船が置いてあり、ヘルメットを被った人……？が居た。近づくと、それはトレニヤードだった。

だが、デイフラは全然知らない。

なぜなら、火山で寝込んでいたのだから。

「お前誰？」

「ニヤ！？」

突然の呼びかけに驚いたトレニャーはピツケルを構える。

「ま、待て。俺はあそこに住んでいるハンターだ。武器を直せ」

「んニャ？そうだったかニャ。それは申し訳なかったのニャ。ニャニャニャ」

ネコのように笑いながら、親父のように反り返る。

「・・・親父くさい・・・？」

「失礼だニャ！これでも、生まれて10年だニャ！」

「そ・・・そうか・・・」

軽く、頭を下げて、それから自己紹介をした。

「俺の名前はデイフラ＝イガラシだ。よろしくな」

「デイフラでいいかニャ？」

「おう。イガラシのほうはまあ・・・飾りみたいなもんだ」

「分かったニャ。デイフラ。よろしくニャ」

「よろしく！」

二人はきごちない握手を交わし、それぞれの元へ帰った。

家に戻ると全員起きて、デイフラを探していた。

「どこ行ってたの？」

「いや、ちよつとポツケ農場に」

「そう・・・探したんだからね！」

「ごめん」

そうしていると、村人が来て当たり前のように依頼の報告をしに来た。

「また、イヤクツクが出た！しばらくは怪鳥にやっかいになるらしいぞ！」

「分かった！」

「任せとけて！」

「ちゃんと支給品は支給品BOXに送っておくから至急密林に向かってくれ！」

こうして、しばらく4人はイヤクツクの討伐で月日が経った・・・。

その間にもジャックは一緒にクエストに出かけ、段々力をつけて行った。

第三十二話に続く

〜第三十一話〜 新しいポケケ村（後書き）

お久しぶりです。

色々名前変えてますが、お気づきでしょうか？

まあ、それはさておき・・・。

獵団 桜花は自分のギルドカードの称号です。

ちよつとばかり、自分も入れてみたくなりました・・・^^;;

チビは自分の一番強いオトモアイルーですwwww

第三十二話 異変

イヤンクツクが大量発生して、2週間。

2日に一頭は絶対に出てくるといふ、悲惨な状態の中でデイフラ達はなんとかやり過ごした。

この現象は10年に一度起こるか起こらないかぐらいの現象だった。

「ああ〜！」

デイフラが嘆く。

「流石に私達でもこれは流石にキツイわね・・・」

セーナも疲れている。そうとうキツかったようだ。

全員、所々クツク装備になっている。

下半身の脚、腰がクツクになっている。

下半身だけそうなると、なんか違和感があった。

前のギアノス時はペイントボールをつけるとなんとなくは寝ているか、寝てないかがなぜ分かった。

「なんか、変なんだよなあ〜」

「うん・・・」

それを聞きにデイフラ達は武器屋に向かった。

「おう！お前達はよく頑張ってくれてるな！」

「ど、どうも・・・」

照れくさそうにカデルが感謝する。

「そうそう、前にココット村に鎧玉って奴が入ったらしくてそれを行商バアさんに買ってきてもらったんだ。お前さんたちの出世祝いだ」

そう言うつと武器屋の主人はデイフラに鎧玉をあげた。

「ありがとな！おっちゃん！」

と、デイフラがふと帰りそうになったのをカデルが止める。

「大事なこと忘れてるだろ!？」

「あ。いっけね。忘れてたあ〜」

「つたく・・・」

手でこめかみを抑えながら呆れる。

「ん？どうしたんだ？」

「いえ、実は・・・」

カデルはしばらく事情を説明した。そうすると、あんがい簡単に返答が帰ってきた。

「ああ。それは（スキル）って奴だな。おい、テリー、説明しろ。

俺はちよつとばかり工房に入ってるわ」

「分かったニヤ！」

そういうと、武器屋の主人は奥に消えていった・・・。

テリーが言うにはスキルというのは簡単に言えば、その素材に使ったモンスターの特性を防具に注ぎ込む、武器の職人が30年かけてできると言われる技術だそうだ。

だが、あの武器屋の主人は例外で武器屋の主人は天性の才能で、生まれた時からトンカチを握り始めていた。

10歳ぐらいには鉄刀ぐらいは作れるようになっていた。

その、スキルはそのモンスターの特性の他にも色んなスキルがつくらしい。

で、ディフラ達の違和感というのはそのスキルが失われたからである。

防具が揃えばそれで、スキルが発動するのがほとんどだそうだ。

他にも組み合わせ次第では他の防具を組み合わせてもスキルは発動するらしい。

他に装飾品を言うのがある。

それは、宝石のようなものを防具につけることでその分のスキルの力を手に入れることが出来る。

それで、スキルを発動させることも可能らしい。

「ほう・・・そういう事か・・・それで、俺達は変に感じたのか」

「そうだニヤ！また、イヤンクックが出現したら倒して素材を集め

るニヤ」

「分かった。そうするよ」

カデルが今度は返事した。

そうして、4人は家に帰り、ジャックの訓練メニューを考え、ご飯を食べてドスゲネポスが出たと聞いたので雪山に向かうことにした。

雪山

「なんか、雰囲気違うような気がするんだけど・・・」

「あ。カデルも？俺も俺も」

デイフラ達はキャンプに辿り着き、いつもポポが生息している草が生い茂っているところにさしかかった。

「なっ・・・」

デイフラは驚いた。そこには、ギアノスとブルファンゴが居たのだから。

ギアアギアア！

ブルウブルウ・・・！

二匹とも威嚇し合い、一方は得意の突進。もう片方は得意のフットワークで避ける。

その二匹を少し罪悪感を感じながらも始末した。いつもの緑の草原は赤の草原に変わっていた。

いつも、ランゴスタは居るが、今回にいたっては大雷光虫に変わっていた。

やっぱり、おかしい。

そう思った4人はガウシカ等が生息しているところも一応確認しに行った。

そうすると、案の定そこはギアノスの群れが居た。

ギヤ？

気づかれたが、ディフラ達の方が一枚上手だった。すぐにそこも赤い血で地面が染まった。

もちろん、ハンター達にも返り血はたっぷり付いている。

「ったく、これはどうなつてんだよ！」

鉄刀【楔】を直しながら、ディフラは怒鳴った。

下のギアノスの顔を踏み潰し、さらに怒る。

「そんなに怒るなつて。冷静になれよ。」

「つく・・・！分かったよ！」

地面を蹴り、また進みだす。

そうして、吹雪が吹いたり、やんだりする頂上の方に近づいていた。

そうすると、目の前に鋭い眼光、大きなトサカが特徴のドスギアノスが姿を現した。

「やっと、お出ましか・・・行くぜ！」

「ああ！」

「分かつてる！」

「分かったわ！」

「了解ニヤ！」

全員順番に攻撃を加えていく。

「くっ・・・まだかよ!？」

ディフラが怒鳴った。だが、その通りだった。いつもなら、もう死んでいるはずなのだ。

だが、今回はもの凄くデカイ。ハンパなく。

そうしているととんでもない奴と出くわした。

「んなつ・・・!？」

「嘘だろ!？」

第三十三話に続く

第三十三話　力の暴走

そこに居たのはブルファンゴよりも一回り大きい、白い首元の毛が特徴のドスファンゴだった。

「なんで!？」

カデルが驚きを隠せない。だが、これでさっきまでの異変のパーツは繋がった。

「それで、あんな所にもギアノス達が降りてきてたのか」

デイフラが納得する。だが、そんなことをしている場合じゃない。

今は最悪の状況だった。ドスギアノスにドスファンゴまで来てしまった。

牙獣種と、鳥竜種がいつペンに来てしまったのだ。いくら弱くてもこれは流石に厳しい。

「くそっ……!」

まず、間合いを見て少しずつドスギアノスに攻撃を加えていく。だが、それを阻止するかのようにはドスファンゴのもの凄い突進がやってくる。

避けるのが精一杯だった。

「これは無理か!？」

デイフラは全員にアイコンタクトで、移動を命じた。全員コクツとわずき、一斉に走り出した。

別のエリアに避難し、作戦を練る。

「で、どうする?」

「ううむ……厳しいよな?」

「ああ。これだったら、二人二人で別れるしかないか?」

「そうするか!」

そうして、また全員武器を構えて元の場所に戻った。

デイフラとセーナのコンビとカデルとレイラのコンビだ。

デイフラがドスファンゴに気刃斬りを加えて行く!

ブオ！ブオ！

うなりながら、悲鳴を上げるドスファンゴをお構いなしに血を全身につけながら、斬りつける。

「うおおおおおおお！！！」

突き、縦斬り、縦斬り、斬り下がり。気刃斬り！

そのコンボを幾度となく当てていく。

ブオオオオオ・・・

その時、ブルファンゴの頭がドサツと落ちた。

首から、大量の血が出て、脊髄が見える。

セーナはドスギアノスの攻撃を見計らって、目に矢を当てようとす
るが、うまく行かない。

「クソッ・・・！」

やけくそになった、セーナは矢を拡散させて、撃った。

「うおっ！」

その矢はカデルのギリギリの所を飛んでいった。

その時、デイフラがセーナの肩をつかんだ。

「おい！気をしっかり持てよ！こんなもんで、パニックになってん
じゃねえよ！！！」

耳元で怒鳴られて、ようやくセーナは正気に戻った。

「ええ。もう大丈夫。行くわよ！」

「おう！」

デイフラも鉄刀【楔】を構えて、ドスギアノスに斬りかかる。

順番に加えていく攻撃はもの凄いダメージに変わる。

その時ドスギアノスの目がえぐれた。

グギャギャギャギャ！！！！

「へっ……！どんなもんだ！」

ディフラが指で鼻をこすり、蹴りをかます。
ドチャ。と鈍い音を立て、蹴りは入った。

ギギエ！

ドスギアノスは目を見開き、吐血した。

その時カデルは気がついた。

目が力の蒼い光を超えて、銀色の光を放っている。

「へへへ……オラッ！」

膝でドスギアノスのどてっばらを何回も蹴る。何度も、何度も、何
度も蹴る。

「もうやめろ！落ち着け！どうしたんだ！？」

「ああ？」

目を上に向けて、カデルを威嚇するように睨み付ける。

「くっ……！力が暴走したか！」

「え？何それ？」

「何？何のこと？」

「え？いや……なんでもないよ……」

「何！？なにかあるんでしょ！？こんな、ディフラ……ディフラ
じゃない！」

セーナが涙ぐみながら、カデルの胸ぐらを掴む。

カデルは必死にセーナと目をあわさないようにする。

カデルは速の神から聞いていたのだ。力の暴走のことを。

*

「力を与える前にひとつ注意がある。剛の神はおそらく言っていない
であろうことだ。ようするに、その力の持ち主は知らないという
ことだ。」

「なんだ？」

「力は暴走するじやろう。おそろくな。まだ、お主らも扱いきれていない。」

「それが、どうかしたのか？」

「速の力は暴走すれば、暴走が止まるまで永遠に走り続けるだけだが……」

「剛の力は……？」

カデルが恐る恐る聞いてみる。

「ほぼ、永遠に相手を殴り続けるのだ……」
「なっ……」

*

「……ああ」

「セーナ悪い。せつかくのデイフラだが……！」

カデルはアサシンカリンガの柄でデイフラの後頭部を殴り、気絶させた。

ゴソツ

「うわっ！」

「え！？」

デイフラは気絶した。見事に。

「何すんよの！？私のデイフラに！」

カデルは黙って、脚に、緑の紋章を付け、一瞬でその場から離れた。
「！？」

セーナは驚いた。一瞬でカデルが居なくなつた。

その瞬間に、ドスギアノスの息の根が止められた。

グエエエ……

「行くよ……」

首を下に向けて、ドスギアノスの顔を潰してカデルは山を降りていった・・・
訳の分からない、レイラとセーナはディフラを担いで山を降りていった・・・

ポツケ村

朝の頃は沈黙に包まれていた。

「ニヤ・・・どうしたのかニヤ？」

「知らないニヤ。でも、気ににやるニヤ。ディフラの旦那も寝ているしニヤ・・・」

カデルは昼に訓練所に2人を呼んだ。

「こつちに来て。あの事話すからさ」

「分かった」

3人は訓練所の闘技場に入っていた。

「まずは、力を教えとかないとね」

そういうとカデルは簡単に緑の紋章を脚に浮かびださせた。

「これが力。で、俺の能力は・・・」

その瞬間にカデルはセーナの後ろについて

「速の力って言うんだ」

「!？」

驚いたセーナは、すぐに後ろを振り向く。

「まあ、ディフラの力は全然違うんだけどね」

と、そういうとカデルは紋章を静かに消した・・・。

その後、ディフラの力の事を10分ぐらいに渡って説明した。

10分後

「へえ・・・そんな事が・・・」

「その力の事だったのね・・・」

セーナはディフラの力の事はある程度なら知っていた。

でも、そんな秘密があったのは、セーナはおるか、ディフラすら知

っていないかった。

その後、ディフラは暴走からやっと復活し、復活して早々鉄刀【楔】を振り回し、暴れた。

そして、またカデルに殴られそうになった。

こうして、力の使い方を教えられたディフラだった。

第三十四話に続く

第三十四話　死との直面

力の使い方を、剛の神にディフラはしっかり教えてもらった後、4人はイヤクツク討伐に向かっていた。

そうして、全員の装備はクツク装備一式揃っていた。

「ふう・・・結構最近頑張ってるよな？俺達」

「まあね。でも、まだまだなんじゃない？」

「そうそう、グリードの事も考えたら、私達なんてまだまだ新米よ・・・」

セーナも笑いながら、成功を喜ぶ。

「そういえば、グリードのおじさん戻ってこないね」

レイラがふと、疑問をぶつける。

「うん・・・そだね・・・」

急に元気をなくすセーナ。

そんな姿を見たディフラは、気になってしょうがなかった。

その時、村長とネコートさんがやってきて、その場の空気を凍てつかせた。

「ほう・・・セーナは知っておったかの？」

村長が顔を覗き込み、質問する。

すると、セーナは突然泣き出し、静かにうなずいた。

「うっ・・・うっ・・・うっうっ・・・」

「どうしたんだ？セーナ」

ディフラも気になってしょうがない。

「あんな、貴殿よ。少しは場の空気というものを感じ取らぬか」

「あ？なんだよ？気になるんだよ！俺は！」

ネコートさんは、呆れながら村長の後ろに下がる。そうして、村長の言葉が皆を凍りつかせた。

「ディフラよ・・・」

「ん？」

「とても、言いにくいことなんじゃが……」

「なんだよ？早く言えよ！」

「そうか……あのな、グリードが前の未確認の龍との対決で命を落とした。予想以上に相手が強かった……ギルドの対処はすぐに親族に伝えることじゃった。だが、親族は全員死亡。全員一緒に討伐に向かっていたようじゃ……だから、セーナが知ることになつたんじゃな」

「んなつ……んな訳ねエだろオ！？嘘だつて言えよ！なア！ババア！おい！なんとか言え！」

泣きながら、ディフラは村長の胸倉を掴む。

「だつて……前までピン・ピン……してた……じゃんかよオ！ふざけんな！死ぬわけねエじゃねエかア！」

「ワシとて信じとぅないわ……あんなハンターを無くしては、もうこの世もおしまいじゃ……」

ネコートがグリードの死因について話し始めた。

「グリード殿は未確認の火の弾によって殺されたと報告されておる。一人報告するギルドの者が居たんじゃな……それで、グリード殿は死んだそうじゃ」

「なんで……なんでだよオ！？おっさん！」
上を向いて、ディフラが泣き叫ぶ。

その時、ポンとカデルがディフラの肩を叩いた。

「も、もう悔やんだつてしかたないんだ……諦める……」

「だつて……少ししか話してないじゃんかよオ……くそオ……くそオ！」

その瞬間ディフラが集会所に向かおうとした。
だが、カデルが止める。

「おい！どこ行くつもりだ！？」

「うるつせエ！ギルドマネージャーに頼んでおっさんを殺したやつを殺しに行くんだよ！」

「馬鹿かお前は!?!?・・・そこまで馬鹿とは思ってなかったよ。俺達が倒せる相手じゃないだろお!?!?」

「くっ・・・でもよオ・・・ちくしょおオオオ!!!」

そうして、4人は家に戻った。

だが、家の中は完全な『静』。物音と鳥の声がかすかに聞こえる程度だ。

「・・・」

アイルーキッチンでチビが静かにお茶をみんなに差し出す。

「ニヤ・・・」

スツとお茶を置き、お辞儀をするとそそくさとジャックの元へ戻った。

そうして、小さくジャックは

「デイフラ達どうしたのかニヤ?」

「知らないニヤ。でも、デイフラの旦那に何かあった事はきつとそうニヤ」

「うんニヤ。僕もそう思うニヤ」

その後の夜もしばらく沈黙は続いた・・・。

その時セーナが立ち上がった。

「おい。どこ行くんだ?」

デイフラがたずねる。

「ちよつと、散歩だよ」

「じゃあ俺も行こうか?」

「ううん。大丈夫だから。と、いうよりは今日は一人にして・・・」

「おう・・・そうか・・・悪い」

そうして、デイフラが軽く手を振って見送ると、カデルとレイラが寄ってきていた。

「うおっ!・・・なんだよ・・・」

頭をかきながら、目をそらす。

「それで良いのか?デイフラ。このままで」

「んあ？ああ、大丈夫だ」
「そう？そうは見えないけど」
「うっ・・・ま、まあ・・・な。でもよ、どうすんだよ？」
「それは知らないわよ。それはデイフラしだいでしょう」
「そうか。じゃあ、無理だな。俺には今のあいつを元気にする方法が分からねエからな・・・」
「がっかりしたデイフラを見かねてカデルが呆れてこう言った。
「お前、もう少し考えたら？今じゃなくて良いから少しずつグリードの死から離してやるんだよ。そうしないとダメだろ。あのままじゃずっとグリードの死を見続けるぞ」
「うっ・・・それは・・・困る・・・」
「だろ？じゃあ、少しずつで良いからやれば？」
「おう・・・そうする」
こうして、散歩が終わってより、ブルーになったセーナが戻ってきて、4人は食事をすることにした。
デイフラが積極的にセーナの食器とかを片付けてやる。そうして、気をデイフラに戻そうとしたのだ。
「あ、ありがとう・・・デイフラ」
「おう、気にすんな。これぐらいいいって」
こうして、次の日はずっとのんびりと時を過ごし、セーナを元気付けようとした。
その時、デイフラはどうしても村長に聞きたいことがあったのでひとりで聞きに行った。
「おい、ババア。ひとつ聞きたいことがある」
「ほ？なんじゃ？」
「グリードのおっさんを殺したのは誰だ？」
「・・・それはじゃな」

第三十五話に続く

第三十五話 雨の密林

ボソツと村長はグリードを殺したモンスターの名前を言った。

「・・・ミラボレアスじゃよ」

「オババ殿っ！」

「分かっておる。大丈夫じゃ。安心せえ」

「で、ミラボレアスってなんだ？」

「今は伝説として存在する程度のモンスターじゃ。だが、ちよつと前にそいつが遠い城に襲撃したとの情報が入ってきたそうじゃ」

「そいつに殺られたのか？」

「そうじゃ。予想以上に強かったみたいじゃの・・・」

「そっか・・・」

残念そうに言うのと歯を噛み締め、ニヤついた。

「うっし！じゃあさ、俺はそいつ殺す！ぜってエ殺して、平和にしてやるっ！」

拳をグツと握って、これからの抱負をデツカク言った。

「ほっほっほ。頼もしいのオ」

「全くです」

「じゃあな！」

そうして、ディフラはスタスタと家に帰っていった・・・。

「ディフラ何しに行つてたんだ？」

「ん？ ああ。まあ、ちよつと・・・な」

「？ う、うんそうか」

「おう」

ディフラはセーナを呼ぶと、真実を打ち明けた。

そうして、セーナは驚愕した後、泣き出した。

「あ、いや・・・お前を泣かすために言ったんじゃないなくてさ、」

「で、でも・・・グリードはやっぱり死んだってことでしょ？」
セーナはグリードの死がまだ受け入れられてなかったのだ。いつか、ヒョコつと顔を出してまた元気なグリードが見れると祈っていたのだ。

ディフラはもうグリードの死を受けれていたからセーナも大丈夫と勝手に確信してしまっていた。

「あ・・・あのさ」

ディフラは泣いているセーナの肩を叩いて話しかけた。

「なに？」

「俺は、おっさんを殺した奴を殺すんだ。そう決めてるんだ。それから、強い奴がもつともつといっぱい居るだろうけど俺はそいつ倒せた」

「満足だと思う。でも、やっぱりもつと強い奴とも戦う。だって、そいつらがセーナとか、カデルとかレイラ殺したらダメじゃん！」
「・・・うん。私もそうする」

「え？声が小さくて聞こえなかったなあ」

ワザともう一度聞こうとするディフラの頬にパンチが飛んできた。

「グホッ！」

「聞こえてたでしょ！ もぉ」

スタスタとセーナはディフラを置いて帰り始めた。

「あつ！ ちょっと待てよぉ」

ディフラも慌てて追いかける。

「あ。帰ってきた」

カデルが気づいて手を振る。

「何話してたの？」

「ちよつと、な」

「教えるっ！」

カデルがディフラに飛びつく。

だが、それをヒラリとディフラはかわした。

「ナメんなよ〜？ 俺だつて一応ハンターだぜエい？」

「そ〜だな」

カデルがむくれながら言った。

そうするとディフラはカデルと肩を組んでボソツと耳元で言った。

「お前の方が試練が遅かったぞっ！」

「なっ・・・なにを〜！」

カデルが一瞬速の力を使ってディフラのわき腹にパンチを喰らわした。

「グホツ！」

本日2回目のパンチだった。

そうすると、つまらなくなつたレイラが遮つた。

「さあさあ！ ジャックとチビが作った料理よ！」

「あんまりおいらはやってないニヤ。オトモとしての訓練も必要だからニヤ！」

「ま。それは当然だなっ！」

ディフラが自信満々に言う。

こうして食事を済ませ、4人はコンガが大量発生してるといので、コンガの駆除の為密林へ向かった。

密林

今回のクエストはあいにくの雨。

最悪の天気の中、4人は支給品を受け取り携帯食料を食べ、コンガ討伐に向かった。

「それにしても寒いな・・・」

震えながらディフラが言った。

「そ、そうですね・・・」

寒さで敬語になってしまったセーナも居る。

昔のセーナのように。

ふと、レイラが皆を呼んだ。

「こんな時のために！用意しました！」

「へ？なにを？」

カデルが問う。

「ジャツジャジャーン！傘！」

「お〜」

デイフラが感心する。

「ところでそんなものどうやって手に入れたんだ？」

「落し物！」

「あ、そう・・・落し物の傘か・・・」

「ま、良いじゃないの？傘には変わりないんだから」

「そりゃあそうだ」

4人はちよつとボロボロの傘を指しながら、コンガを探しに向かった。

すると、木が多く海岸がある、ところに出くわした。

そこには桃色の体をしたゴリラが居た。

この世界のサルのような存在のコンガだ。

「居たな・・・！」

「ああ」

「ほんじゃま行きますか！」

「分かった！」

「うん！」

デイフラ・カデル・レイラが攻撃を食らわし、セーナが援護するいつものフォーメーションを作りながら攻撃を加えていった。

その2分後には桃色のコンガはすっかり、紅色の血まみれのコンガに変貌していた。

だが、その2分間にもいつもよりもやりにくい状態があった。

地面がぬかるんでいる。そのせいで、太刀の踏み込みもハンマーの殴りも片手剣のジャンプ斬りもうまくできない。

泥と血がにじんで鎧がすっかり汚れてしまっている。

「ったく、なんだよこの泥まみれ〜！」

ディフラが嫌がりながら、叫ぶ。

「仕方がないだろ。雨が降ってるんだから」

カデルが当たり前の事を言う。

「だって見るよ。せつかくの防具がこんなに……って血がいつぱい……かよ」

「うん。あたりまえじゃん」

レイラが言う。こうして、ディフラは二人にツツコミを入れられて疲れた。

その後も、コンガは次々に骨格を変形させたり、真つ二つに分裂したりして気配すら感じなくなった。

……そのはずだった。ある一体を除いては。

そいつはコンガに比べて格段にデカく、尻尾にキノコが巻きつけてある。

そう。そいつはババコンガだ。

「なんだありや!?!」

ディフラが驚いて、叫ぶ。

「ばっ……バカ!」

と、セーナがディフラの口を塞ぐ。

ディフラがもがもがとしているがそれが今の4人には得策だったのだ。

今の地面の状態、疲労、力の問題をふまえると無理をしないと勝てない。

それに、ババコンガの為の罾もなにも持ってきていない。

4人はそおつと拠点キャンプに戻った。

「ふう……」

レイラとセーナが一息つく。カデルとディフラにはなんの事だかさっぱり分からない。

その時、不機嫌そうにディフラが問う。

「さっきのは何だったんだ? コンガみたいだったけど、デカすぎだったよな?」

「ええ。さっきのはババコンガだったわ。村長も何も言っていなかったはずなんだけど・・・」
セーナも不思議だった。基本はギルドナイトと呼ばれる、特別なハンターの部隊がフィールドへ出向き、その時のモンスターを討伐するか

、目撃情報が他の商人や、他の村へ行くこととしてる人たちがギルドに連絡を取る。

だが、今回は村長もギルドから全く話を聞いていない。

おそらく、雨であり、村へ出向く商人達が居なかったのだろう。

そのため、ババコンガが居ても分からなかったのだ。

「一応、コンガはある程度討伐できたわ。一旦帰りましょ」

「お、おう・・・」

セーナのしゃべり方が少し変わったような気がしながらディフラはポツケ村へ帰っていった。

ポツケ村

4人は村長にババコンガのことを話すと、やはりギルドからそういう報告は無かったようだ。

だが、いい知らせが村長からあった。

「最近、ポツケ村に訓練所にハンター志望の輩が3人ほど来ているそうじゃ。教官も大変じゃな。ホッホッホ」

「で？ そいつらは俺より強いのか？」

ディフラがワクワクしながら聞く。

「うむ。カデルやお主よりも筋が良いそうじゃ」

「なに！？」

「今度試しに会いに行ってみるか？」

村長が悔しがっているディフラに向かって提案してくれた。

「教官にはワシが言っとくわい。でも、お主らも訓練させられるかもしれぬな」

「ええ〜！」

デイフラが残念そうに言う。だが、目はキラキラと輝いている。

「じゃあ、明日みんなで行って見ない？」

レイラがほとんど決定しているが、ダメ押しした。

「そうですね！」

セーナが賛同する。カデルとデイフラは何も言えない。

そして、明日4人は新しいハンター達と会うことになった。

その夜セーナは寝れないでいた。

グリードの事だ。忘れようといつももの楽しい感じはやめて、ハンターとして、しっかりとした「喋り方をしながら頑張って一人のハンター」

として、生きていくことを決めた。

「よしっ！」

セーナは頬をパンパンと叩き、寝た。

こうして、今日は訓練所に行くのだった……。

第三十六話に続く

第三十六話 訓練生

今日はディフラ達が訓練している新米ハンターに顔合わせする日だ。

「あゝ、なんか緊張すんなっ！」

ディフラが頭の後ろで手を組み、そう言う。

「ええ、でも少しでも手本になるように頑張りましょう！」

「なあ、セーナ」

どうしてもセーナの喋り方が気になったのでディフラは思わず聞いた。

「なんで、そんなしゃべり方なんだ？」

「えっ・・・ダメ？」

「いや、ダメじゃないけど、ダメっていうか・・・ダメじゃないといえますか・・・」

しどろもどろになっているディフラを救ったのはカデルだった。

「要するに昔のセーナに戻ってこいつはなんか焦ってるんだよっ！」

「そ、そうそう。そうなんだ」

「ははあゝん。そういう訳ね」

レイラが見下しながら言う。

レイラはもう既に、ディフラとセーナが両思いなのが、分かり始めていた。

この出来事で、疑惑が確信に変わった。

セーナはこの喋り方に疑問を持たれるとは思っても見なかった。

この喋り方は元々に戻したただけであって、決して前から変わったわけではない。

だから、自分では全く違和感を感じなかった。

また、ディフラにはちゃんと話そうと考えていた。

こんな形で言うのもいいのだが、少し嫌だったので、この時は黙った。

「じゃ、行くか！」

デイフラは手を平手に拳でパンと叩くと訓練所に歩き始めた。

「おう！」

「うん！」

「ええ・・・！」

正直4人は緊張していた。新しいハンターが自分よりも強かったらどうしようか。手本が見せなければならなくなって、失敗したらどうしようなどと、一つも確定していないのに4人は別々の時間起きて、悩んでいた。

訓練所

「おう！やつと来たか！」

いつもの威勢のいい声で迎えてくれたのはもちろん、教官だった。

「ういっす」

デイフラが軽く手を挙げて挨拶をした。

「こ、こここんにつわっ！」

「へ？」

カデルが後ろを向く。

「あ、あの…えつとその…新しくポツケ村に来ました、オルガ…ラングレートです！ よ、よろしくお願います！」

背中には、双剣のツインダガー改があった。

突然の挨拶に4人は戸惑ったが、少しして

「お、おう。よろしくな」

軽い挨拶をデイフラが代表してした。

「俺はギレン…ダークネスだ」

ステイルランスを背負ったクールな感じの彼には4人が「自分よりも強い」と感じた。

「おう、よろしくな」

ちよつと軽蔑した感じでデイフラも挨拶をする。

そして、ボーンホルン改を背負った少女が挨拶をした。

「私は、ユイ…ヴェステイ…です！ よろしくです！」

「よろしくねえ」

レイラが明るく挨拶をする。

「俺は、ディフライガラシだ。よろしくな」

「僕は、カデルナカガワだ。よろしく」

「あたしは、レイラジエイフードだよ。よろしくねっ」

「私は、セーナミルゼンですわ。よろしくお願いします」

全員の自己紹介が終わったのを見計らって、教官が話しかけてきた。

「お前ら！あ、違う違う。オルガ達じゃない。ディフラ達だ」

「へ？俺ら？」

「そつだ。ちよつと着いて来い。訓練だ」

「お、おう・・・分かった」

4人が連れて来られたのは闘技場と呼ばれるところだった。

「ここどこ？」

レイラが教官に聞く。

「今から、イヤンクック討伐訓練を行う！」

突然の訓練開始に4人は戸惑った。

「はあ！？」

第三十七話に続く

第三十七話 青怪鳥

「で、でも……イヤンクックって密林とか、森丘じゃないと生息してませんわよ?」

「全く……こつちの世界の奴でも知らんのか????愚か者め」

「で、どうすんだよ?おっさん」

デイフラが拠点のベッドベイスキャンフに座り込んで、聞く。

「向こうに行けばわかるわい」

そう言つと教官は、一つ大きく開いた穴を指差した。

「あの奥に行けばいいの?」

レイラが恐る恐る聞いてみる。

そういうと、教官は満面の笑みを浮かべ、うなづく。

「マジかよ……」

カデルは肩をガクツと下ろし、落ち込む。

「ま、行くか」

ベッドからスクツとデイフラは立ち上がると、鉄刀【楔】を背中から抜き取ると、目を光らせながら闘技場の入り口を見る。

そこからは、殺気が流れ込んできていた。

だが、さほど怖くない。

密林のイヤンクックの方が恐ろしかった。

「そういえば、ここのモンスターってどうしてんだ?基本討伐だろ?」

ふと、デイフラは聞いてみた。

「お、おう。それはギルドが訓練用に捕獲してくるんだ。素材は少し採って、生きてる状態で村に搬送するんだ」

「へえ、ギルドってやつも一苦労だな」

「まあな。あれは、そこらへんのハンターがなれるもんじゃない。

そこは分かつてるよな?」

「もちろん!じゃ、行くぜ!」

「おっしや！」

「りよーかい！」

「はい！」

4人は、一斉に入り口に走りこんだ。

「あの人たちなにしに行つたんですか？」

ヒヨコつと顔を出したのはユイだった。

「うおっ！」

教官も驚く。

「あ、あれはモンスターで訓練しに行つたんだよ」

「ズルい〜！私達もそんなやつしてください！」

「まだダメだ」

「ぶう・・・」

頬を膨らませると、ててと、オルガとギレンの元の戻っていった。

「ははは、そりゃあ無理だろうよ」

「お前が足ひつぱるからな」

「なんだと!？」

「おいおい・・・また、ケンカかあ？全く・・・勘弁してくれよ・・・」

「」

教官が疲れていると、そのころ、ディフラ達は闘技場に着いていた。

「あれだな」

「ああ」

狭い空間での戦いはディフラ達は全く慣れていない。

目の前には見覚えのある、赤い体の鳥竜が居た。

「怪鳥様のお出ました〜！」

ディフラは鉄刀【楔】を抜き放つと、イヤンクックを斬りつけた。

イヤンクックの鱗が剥がれ、甲殻が割れる。

その衝撃でイヤンクックも攻撃を加える。

そのついでに軽くかわし、後ろに交代しようとする。

基本的に一般常識ではその地方にもよるが、ドスランポス2頭の狩獵が始めての2頭狩獵だ。

地方ではドスゲネポスの所などもあるそうだが。

怪鳥2頭はそこそ腕っ節のハンターになってから受けるクエストだ。

「なっ・・・なんだあ!？」

デイフラはおどろく。

そうこうしていてもラチが開かないのをカデルは分かっていた。もちろん、他の二人もだ。

カデルはレイラが開けた亀裂にアサシンカリングを突き刺す。

刺さったアサシンカリングをそのままにして、レイラがウォーメイスでそのアサシンカリングを深く刺す為、もの凄い勢いで叩きつける!

ガン!と音がしたと同時にぐらいに血が吹き出る。

クアアアアアアオオオ・・・。

そして、静かに倒れた。

だが、もうその時点で彼らの体力は半分以下。

もう、青い怪鳥は突進を始めていた。

ダン!ダン!ダン!

「逃げて!」

レイラが避ける。

続いてカデルも逃げる。

デイフラは疲れて動けない。

「くっ・・・!」

カデルは速の力を発動した。

その瞬間、デイフラは間髪青い怪鳥の攻撃を避けた。

「わ、悪イ・・・」

「気にするな。でも、顔が切れてるぞ」

「ん?そうか。くちばしをかすったんだろ?。多分な」

「そうか」

その時教官の声が聞こえた。

「お前ら〜！目を閉じる〜！」

「ディフラ！カデル！早く！」

セーナが怒鳴る。

「わ、分かった！」

4人は咄嗟に目を閉じる。

その瞬間に目の前が目を閉じてでも分かるくらい明るくなった。クウアアウアアオオアア?!?!?

目を開けると青い怪鳥は目を閉じてその場で暴れている。

「今の内だ！」

教官が4人を呼ぶ。

「分かった！」

4人は目が少しチカチカするが、急いで教官について行った。

第三十八話に続く

第三十八話 七人の戦い

「あのさ、おっさん」

「デイフラが息が切れつつも質問する。」

「ん？なんだ」

「俺達の訓練つてさ、イヤンクックだけだよな？その、レアバー
ジョン……？とか、じゃねえよな？」

「自分でも何を言っているのか分からなくなってきたが、教官は答えた。」

「ああ。あれは、不慮の事故だ。これはギルドに報告する。そんなにギルドも頑固者ではないはずだからな」

「それにしても、焦ったな……」

「ところで教官はどうして青いイヤンクックが闘技場に来ることが分かったのですか？」

「今度はカデルが質問する。」

「新米3人組を見てたら、上空を通っていった。方向が闘技場だったから閃光玉だけ持って行って、一応確認の為にいったんだよ。」

「そしたら、案の定。このざまだ」

「苦笑いを浮かべる教官は後ろを向いて3人を呼び出した。」

「うーん……」

「教官は何か悩んでいる。」

「7人は何を考えているのかさっぱり分からず、そこでブーツと座っているだけだった。」

「やっぱり、証拠が必要か……ギルドでもそこらへんは五月蠅いからな……」

「そう呟いて3分ほどした時に教官が7人に向かって口をあけた。」

「よし！お前ら！もっかい闘技場行ってこいや！」

「その瞬間はギレンがうたた寝をし、他の6人は硬直した。」

「一瞬静かな時を過ごし、その直後に大きなイヤンクックの耳をも壊」

すような声で6人は叫んだ。

「ハア〜!？」

その声にギレンも寝かけていたが、ハッと目を覚まし、スティールランスを構える。

「・・・行くぞ」

ボソツとギレンは一言だけ残し、闘技場に向かった。

「お、おい!待てよ!ギレン!」

オルガも追いかけて、ユイも追いかけていく。

それに4人も着いていく。

再び闘技場に着いた4人。

初めて闘技場に着いた3人。

合わせて7人。

目の前にはイヤンクツクの死肉を喰らう、イヤンクツク亜種が居た。

「なあ・・・これって共食い・・・?」

オルガがユイに聞く。

「さ、さあ・・・もしかしたら違う種類の竜なのかもしれないじゃない・・・」

「そんなことは無い。」

そんなことは無い。

誰もがそう思った。だが、そう考えるのも無理は無い。

虫の共食いは小さくてまだマシだ。

だが、あそこまで大きくなると恐ろしいどころの騒ぎではなくなってくる。

おぞましい。気持ち悪い。

いろんな恐怖が混ざり合う、オルガとユイ。

だが、ギレンは迷うことなくランスをイヤンクツク亜種の顔に突き刺す。

ゲグア!

しかし、イヤンクツクのように柔らかくない。

亜種はそれなりに硬い。

「クツ・・・！こんな武器じゃ駄目か！」

すると、その後ろからオルガが双剣を抜き、顔に切りかかろうとした。

パツと見れば見事な連携プレーだが、ユイはそうは思っていない。

4人が関心しようとした時にその関心は悲愴感に変わった。

「どけよ！」

「うるせえんだよ！下手くそが！」

「あちゃ〜・・・」

ユイが顔を手で隠す。

すると、セーナがユイの肩を叩き、こう言った。

「あの二人をこちらに戻してきてくれませんか？これじゃ、こっちの連携がうまく取れませんか」

ディフラは背筋が凍りそうになった。

これは、願いを出しているんじゃない。命令しているんだ。

静かに怒るセーナに少し恐怖を抱いたディフラも鉄刀を抜き放ち、構える。

「わ、わかりました。・・・おい！オルガー！ギレンー！邪魔だから、どけよ〜！クソ虫が〜ボケエ〜！」

ちよっと言葉が荒くなったことにセーナとディフラは少々驚いたが後ろの2人も構えていたので気を取り直した。

「じゃ、行くか」

「ああ」

簡単なやりとりを済ますとまず、ディフラが特攻。カデルとレイラが後ろで構え、セーナは後ろで援護。

ひとまず、ギレンが残した顔の傷をディフラが同じようなところに斬りつける。

その後にカデルがイヤンクツクの懐に入り、足を斬る。

そして、レイラが背中をハンマーで溜めて、殴る。

それに、幾度となく降り注ぐ矢。
オルガとユイは黙って見ていた。

ギレンは戦いに行きたくてうずうずしているようだ。
顔の左側のくちばしはほとんど原型をとどめていない。
だが、硬くてうまく斬りつけない。

「くそっ！」

だが、何度もカデルが足を斬りつけて遂にイヤンクックがこけた。

グアアオウ・・・グアア！

必死にもがいているが容赦なくディフラは体を斬りつけ、カデルはくちばしにアサシンカリングを刺し込み、それをレイラが叩き、顔をつぶすようだ。

ディフラの攻撃はイヤンクックが立ち上がるのを防ぐためだ。
もう、これだけで死ぬ。

そう思ったが、ここで予想外の事が起きる。

ギレンが後ろからスティールランスを突き刺したのだ。

その予想外の出来事を予想できなかったレイラはそのランスが腰に刺さるまではいかなかったが、腰の部分は斬れた。

「ああ・・・っ！」

「レイラ！」

カデルはサツと担ぎ、レイラを安全なところに連れて行った。

「セーナ！ここでレイラを見ていてくれ」

「分かりました」

その、瞬間にディフラが剛の力を。カデルは速の力を発動させた。

「おい、ギレン」

ディフラが目を紅くする。どうやら、なんとか理性はあるようだ。
カデルの目は白くなっている。

濁ってはいない。とても透き通っている。こちらも理性はちゃんとあるようだ。

「デメエ、なにやってんだよ」

「う、うるせえよ」

さすがのギレンもこれにはたじろぐ。

「デイフラ・・・早く・・・速く殺そうよ」

「あ、ああ。そうだな。こんなやつかまってられるかよ」

ダツと踏み出すがうまく連携は取れない。

・・・はずだった。

だが、速の力で速くなったカデルがその勢いのままイヤンクツクの足を斬りつけて、通り抜けてデイフラが背中を強く叩き斬る。

グギヤア！

だが、これには勝機が見えたのだろう。イヤンクツクも負けじと火を乱射する。その後に尻尾を力いっぱい振り回す。

それには近づけずに後退した。

それが失敗だった。

それをイヤンクツクは狙っていたのだ。

その瞬間にイヤンクツクは力いっぱい突進してきた。

それは防げなかった。

デイフラとカデルはまともに喰らい、立てなくなるほどだった。

「グウアアア！」

「ウアアア！」

残ったのはセーナー一人になった。

だが、本当は一人じゃない。

4人だ。

しかし、チームワークの「チ」の字もないくらいに4人にチームワークは無い。

目の前には瀕死寸前でも必死に周りのハンターを殺そうとするイヤ

ンクック亜種。

「あのおく……ユイさん」

「あ、はい!？」

「今から攻撃をしかけましょう」

「はい!？」

この声に気づき、ギレンはもうすでに戦闘態勢になっている。

オルガも立ち上がり、静かに頷いた。

「わ、分かりました。では、行きましょう!」

今回は全く違う形だ。

狩猟笛なんて物はセーナでも見たことがある程度で、小さい頃に一度吹いてみると言われたが必死で拒んだらしい。

オルガとギレンはさっきの戦闘を見て、オルガは刀身が短いので足を。

ギレンは槍でリーチが長いために顔を狙う。

これにユイはものすごく驚いていた。

デイフラ達の攻防が凄かったのと、オルガとギレンが喧嘩をしていないことだ。

「ユイさん!しっかりしてください!」

「……あ、はい!すみません!」

そう言われるとユイはおもむろに狩猟笛に口を当て、旋律を奏でていった。

すると、妙に体が軽い。いや、足が軽い。

走るのに全く疲れが無い。

「これは……もしかして強走……?」

強走薬というものがある。

それは、生焼け肉の効果を増強剤で強化し、それでスタミナがつきしばらくの間疲れが無いというものだ。

ゲリヨスという飛竜の体液を使って、こんがり肉と混ぜて、強走薬グレートというものもできるらしい。

だが、セーナはそんなもの飲んでいない。

これは、ユイが吹いた旋律の効果だった。
これを吹いた直後にイヤンクツクの方面で凄い闘志を感じる。
オルガだ。

オルガはこの旋律を聞くと、鬼人化する。
鬼人化というのは体内の力を爆発させるのだが、その代償に体力を
ものすごい勢いで削られる。

だが、それは強走薬・強走薬グレートなどで防げることが分かっ
ている。

その要領で狩猟笛の旋律でも大丈夫だということをお教官に教わった。
その闘志にイヤンクツクも少し怖気づくが咄嗟に少ししゃがみ、尻
尾を振り回した。

ガードの出来ない双剣ハンターのオルガは二つの剣で十字を作り、
尻尾の勢いを少しだけだが抑えて吹き飛ばされる。

ギレンはそのままガードをした後に攻撃を加えようとする。
だが、その攻撃にもイヤンクツクは気づいていた。

「なに!?!」

急いでギレンはガードをする。だが、その熱さはガードできない。
盾が熱くなる。

バックステップでイヤンクツクの近くから離れる。

その瞬間に旋律を吹き終えたユイがポーチから導火線のついた瓶の
形をしたものを導火線を勢いよく引っ張り、イヤンクツク目掛けて
投げた。

「うおい! ユイ! 投げるなら言えよ!」

「チツ・・・!」

「ごめん!」

4人はグツと目を閉じた。

先ほど教官が使っていたものと同じ、「閃光玉」だ。

グギヤア!?!

視力を一時的に失ったイヤンクックを尻目に4人は武器を構えなおす。

セーナは矢をつがえ、オルガはグツと双剣を握りなおし、ユイは狩猟笛を担ぐ。

そして、ギレンはさつきとは違う構えになった。

ステイルランスが腰にある。

そう思った瞬間にギレンは走り出した！

ランス特有の技。突進だ。

勢いよくランスを突くことで普通の攻撃よりも強い攻撃を加える。

その突進をイヤンクックは避けきれず、顔に刺さった。

ウグギャギャギャア！

その悲鳴とともにオルガが走り、鬼人化する。

そして、腹を他の人たちが躊躇するほどに斬りつける。

そして、ギレンがランスを抜くとユイが勢いよくポーンホルン改を叩きつける。

その時にバキツと恐ろしい音がした。

くちばしが粉々に砕け、イヤンクックは頭を地につけた。

そして、静かに崩れ落ちた。

ハアハアとセーナ以外の3人は息を上げ、座り込んだ。

「へっ・・・下手くその割にはやるじゃねえか・・・」

「うるせえよ・・・お前もそういうオーラ出してるだけなんじゃねえのかよ・・・！」

「もう二人とも喧嘩は駄目だってば・・・」

フツとセーナは笑うと3人にディフラ達を運んでもらうように頼んだ。

ディフラ達が目を覚ますとそこは闘技場の拠点^{ヘースキャンテ}だった。

「イヤンクックは!?!」

ガバツと起きるとせわしなくディフラが慌てる。

「もう、うるさいぞディフラ。周りを見る。バカ・・・」
いつものようだが、呆れるカデルをフツと見て、フツと前を見直す。

そこは拠点だった。

前にはセーナがいた。

「うわっちお！」

「大丈夫ですか？ディフラさん」

「お、お前・・・俺には敬語やめたら？」

「駄目ですか？」

「なんか、ちよつと調子狂うぞ〜前まで普通に喋ってたのにさあ〜

・・・」

「ウフツ」

「・・・お前らが倒したのか？」

「そ、そうツス！」

「そうだよ。文句あるか？」

「いえ！皆さんのおかげです！」

「ユイは謙虚すぎだよ！」

そういうと7人はしばらくの休息をとり、訓練所に戻った。

「おう！帰ってきたか！大丈夫か？」

「ま、まあなんとかな・・・それよりもレイラを見てくれ」

「うおっ！こりゃどうした！」

「それは」

「お、俺がやってしまったんだ・・・」

ディフラが言う前にギレンが自白した。

「よし、セーナ。レイラを家に連れて行け。ディフラとカデルには

そのときの状況を聞かせてもらう。もちろんギレンもだ」

「悪い・・・」

「なにが悪いだ！このドあほ！早よこっちこんかあ！」

その後ディフラとカデルはギレンの話をして、ギレンが帰った後に力の話を聞いてみた。

「あのさ、おっさん・・・いや、教官」

「おう？もう、おっさんでも教官でもどっちでもええぞ？」

「いや、そうじゃなくてさ・・・」

すると、ディフラは肩の防具を外し、力を軽く発動した。

目は紅い。肩の刺青も紅くなっている。

「これについて教えて欲しいんだけど」

「な、なんだこれは？」

「やつぱしらねえか・・・。しらねえならいいよ。ありがとな。おっさん」

「・・・？お、おう。そうか。じゃあな」

そうして、教官はしばらく書類をめぐりにめぐったが、なにも情報はなかったらしい。

それにその教官がみた書類は教官が使った後にはもう、読めないほどボロボロになっていた。

原因は本の虫になっていたからではない。

単に力が強くてがさつなだけだった。

その後の一週間は不眠不休で無給料の書類弁償代をかせぐのに必死だったという。

第三十九話に続く

〜第三十八話〜 七人の戦い（後書き）

なんか、更新遅れてすいません。

では、この場を借りて2万HITしたことを報告させていただきます。

ひとまずこれはやっとなかないと

ゝ（）。ゝ（）。。。* 【ネ兄2万HIT!!!】 ……* ……*
°…*（）。ゝ（）ノ

本当に読んで下ってる方々。

ありがとうございます。

これからも、がんばりますので応援よろしくお願いしますっ！

第三十九話 皆で訓練

あの7人の激闘はポケケ村に知れ渡り、村長からギルドからの報酬金を受け取った所だった。

「それにしても、レイラの傷の回復力は恐ろしいほどだなっ」

カデルが言う。

「全くだ」

「私の祖先って・・・なに？トカゲ？」

「違うでしょ」

デイフラが笑いながら否定する。

「それにしても、あのギレンがあんなに謝るとはな・・・」

ギレンはあの教官との話の後に誰の命も無かったが、デイフラ達の家に戻ってきた。

4人でそこそこ窮屈な部屋だったので、デイフラとセーナはアイルキッチンに行って、のれんの隙間から話は聞こえないが、動作などで大体は分かった。

「やっぱり、あいつはオーラだけか。あいつもまだまだ新米だな」

「いや、デイフラさんもすわよ？」

「まあ、それを言われるとそうなんだが・・・」

すると、突然武器屋の店主が声をかけてきた。

「おい！お前達、こっちに来てくれ！」

突然の声だったので4人は少しビクついたが、呼ばれたので行ってみた。

「これが最近ドンドルマの方から入荷できたから、お試しのような感じで受け取ってくれ」

渡されたのは、青い硬い玉だった。

「これは『鎧玉』ってな。防具の強度を強化できるんだ。今の前達にはまだ必要ないかもしれないが受け取っておいてくれ」

「ありがとうございます。武器屋のご主人」

「あれ？セーナってば口調がええ変わったな〜」

「ええ。昔に戻って気をしっかり引き締めようと思ひまして」

「そうか。それもそれで・・・うん。で、ディフラはどうなんだ？」

「おい！おっちゃん！勘弁してくれ！」

ディフラのマジ頼みに武器屋の主人も観念してくれた。

「わーったよ！」

「じゃあな！ありがとな！おっちゃん！」

「ああ！」

その日はポツケ農場でゆつくり釣りをして、静かなひとときを過ごした。

「てか、レイラさん凄いですわね。そんなきれいなピンク色の魚を釣るなんて」

「でも、これなんだろうね・・・」

「食えるか？」

「そう、全部食べ物ばっかにするなよ。ディフラ。てか、いつの間にそんなキャラになったんだ？」

「キャラ？」

「あ、いやなんでもない」

レイラが釣ったのは春夜鯉だった。

主に春夜鯉は防具のマカルパシリーズに使用される。

マカルパシリーズはなにやら不思議な力があるらしい。

『錬金術』というスキルがつくらしいのだが、説明が出来ないためにあまり有名ではない。

ハンターでその装備をしているのはギルドの研究課のハンターだけだ。

そのハンターは狩りをあまりやらない。

モンスターが暴れていれば、それはギルドナイトに任せればいいのだから。

主に、モンスターの生態を研究している。だから、討伐というよりかは観察・捕獲。その二つが主な狩りのスタイルだろう。その春夜鯉はギルドに寄付するというのがハンターの中での処分の仕方だ。そうすれば、少しにはゼニーになるためだ。

「というか、まだ昼だぞ。どうする?」

ディフラがあまりにも暇になったので思わず本音が出た。

「うう〜ん・・・」

「でも、今は依頼が無いからな。どうにも、動けないよ」

「じゃあ、訓練所に行かない?」

レイラが提案する。

「いいか? セーナ」

ディフラが少し気を使って聞く。

「え、ええ。大丈夫ですわ」

少し動揺気味だったのが、少し気にはなったが、とにかく暇なので訓練所に向かった。

訓練所

「あれ? 教官は?」

レイラが入ってくるなりユイに問う。

「あ、今日は家で寝てるそうです。村の人が起こしに行っても寝ぼけて吹っ飛ばされるそうです」

「うわー・・・あの人ならやらかねないかも・・・」

少し村の人に同情したレイラだった。

「で、お前たち3人って訳か・・・」

ディフラがため息交じりで話す。

「なあ、ディフラ。耳かせ」

カデルがそっとディフラに話しかける。

「んあ？・・・なんだよ？」

ゴニヨゴニヨとカデルが話し終わると、ディフラがニヤツとして「う言った。」

「よし！今から俺らがお前を鍛えてやる！分かったな！」

それを聞いたセーナが

「ちょ、ディフラさん！それは聞いてませんよ？」

「だって、言つてねえもん。ははっ」

「はじゃないですよ〜！ も〜！」

『ま、いいじゃないか。こういうのも』と、いう眼差しでディフラはセーナを見つめると、セーナは顔を真っ赤にして、頷いた。

「じゃあ、早速やりたい所なんだが」

と、言いながら訓練生3人を見渡す。ディフラは気づいたのだった。全員の武器が全て違っていたのだ。その結果、ペアはこのように決まった。

ディフラ&ギレン

カデル&オルガ

レイラ&ユイ

セーナ：みんなの世話係

「・・・これでいいのか？」

ちよつとギレンが苦手なディフラとしては出来れば変えて欲しかったのだが、武器のカテゴリ上これが最善策となってしまうた。

「いいんじゃない？」

カデルは十分満足しているようだ。

「ま、仕方ないわよ。どんまい。ディフラ」
他人事のように喋る二人に少し、不快感を抱いたディフラだったが、なんとかセーナが見てくれるというので、内心めちゃくちゃ喜びながら、訓練にとりかかった。

と、1時間ほどやっている和个人個人の欠点が見つかってきた。

ギレンはバランスはいいのだが、突きの威力が低いために相手に致命傷を与えない。

オルガはむやみに鬼人化してしまうために、スタミナが持たなくなりその後、攻撃が続けられない。

ユイは攻撃の面では十分なのだが、笛の旋律がまだうまく覚えられなく、うまく吹けない。

そういう欠点を修復するつもりだったが、ある程度の筋トレ程度で時間はどんどん過ぎていった。

この三人の最初に出てきた欠点は次までにある程度なおす必要があったので、宿題にすることにした。

そして、次の日もディフラ達が見る、教官抜きの訓練が始まる……。

第四十話に続く

〈第三十九話〉 皆で訓練（後書き）

本当に更新遅れてすいませんでした！

PCがしばらく使えなかったっていうのもありましたが、結構放置してたために話を自分で忘れてしまっていました・・・（馬鹿

これからもこんな風な更新スピードになってしまいますかもしれませんが！
だって・・・受験だもん。勉強しないと駄目なもんでwwww
こんな小説に付き合って下さってる方に、本当に感謝！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7208c/>

モンスターハンター ~ポッケの平和~

2010年10月10日02時44分発行